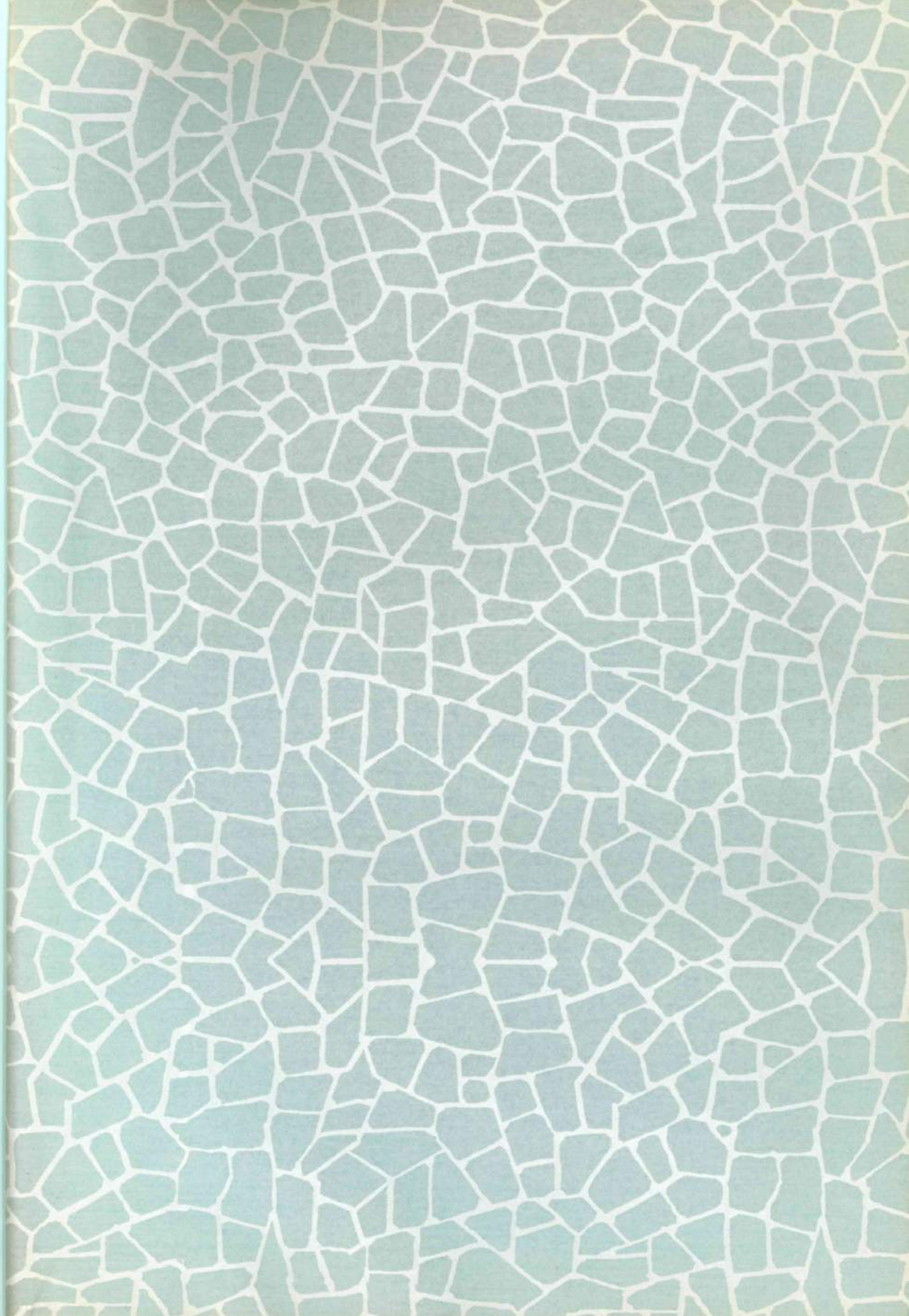




創立20周年記念誌

TKC





田辺 佐野 田島 横川 薄木 村松 佐藤
大島 曾田 永田 柴田 前島



南間



末山 内山 中林

たちばなイレブン

作詞 笠松文雄ほか
作曲 山室紘一

Music score for "Tachibana Eleven" (たちばなイレブン). The score is written in 4/4 time and includes the following lyrics:

1. むねに かがや く ちの ばな マ ー ク すべ
2. おおぞら かひびー く たこ の せ ない え ん に ちか

てのー ちかー らい だ た し か う き っ っ て き ファイ
らー いっぱ い た た

ト だ シュート だ ス ビ ー ド だ
ぼくら たちば な たちば な イレ ブン

たちばなイレブン

作詞 笠松文雄ほか
作曲 山室紘一

胸に輝く たちばな マーク
すべての力 出きつて
ファイトだ シュートだ スピードだ
ぼくら たちばな たちばなイレブン

大空ひびく この声援に
ちから一ぱい 闘う勇氣
ファイトだ シュートだ スピードだ
ぼくら たちばな たちばなイレブン



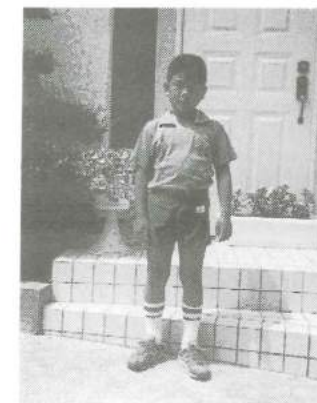
L (A, B)



愛 好 会



S L



LL (A, B)

たちばなキッカーズ・マーク



TKC

FC たちばな



下田小学校での練習風景

目次

祝 辞	1
あいさつ	6
特集「これからの少年サッカーの在り方」	
少年サッカーを問う	7
座談会「サッカー協会役員を招いて」	
― これからの少年サッカーの在り方 ―	12
他チームに学ぶ	22
― たちばなOB座談会 ―	
後輩にのぞむ スタイルは「自由なサッカー」	32
たちばなの指導方針	40

たちばなキッカーズのおゆみ・記録・思い出	
たちばなキッカーズ二十年のおゆみ	53
たちばなキッカーズ輝かしき足跡	66
スポーツテスト(合宿/記録)	69
記念に寄せて・コーチから	70
たちばなキッカーズを振り返って	80
たちばなキッカーズ時代の思い出	92
現役の子の抱負	102
たちばなサッカー愛好会の誕生	106
各期のメンバー	114
卒業生の横顔	123
寄せ書き	126
創立二十周年記念行事資金調達バザー報告	134
創立二十周年記念準備委員会組織	135
編集後記	136

祝 辞

たちばなキッカーズ 創設二十周年を祝う

下田小学校長 増 田 實

たちばなキッカーズの成人式ノ誠におめで
とうございます。



現代っ子は体位はありますが、体力がない、
いわゆる「もやしっ子」とよく言われていま
す。わたしもこの傾向を憂慮している一人で

すが、体力を増すためには、何か自分の好きなスポーツをすることが最適な
方法であると思います。

特にサッカーは、体力だけでなく、精神も鍛えられます。またチームワ
ークによって協力性も育てられ、たいへん魅力のあるスポーツです。

現在、たちばなキッカーズに加入している児童は、一年から六年まで百二
十名ぐらいと聞いております。これは下田小学校全在籍数一三〇に当たり、
男子在籍数の二五％にもなります。

これだけ多くの児童が、毎週土曜日は午後一時半から五時まで、日曜日は
午前九時から正午まで、計六時間三十分練習を積んでいるということは、一
人ひとりの心身のたくましさや協力性を育てるのにどれほど役立っているか
計り知れないものがあると思います。それが二十年も続いてきたのですから
社会への偉大な貢献です。

これはこの地域に、自分の仕事を持ちながらも、そのうえに児童の指導に
当たられるよきリーダーの方々がおられたからにはかなりません。学校とし
てもこの方々に対して厚く感謝すると共に強い敬意を表します。

今後は三十周年にむけてさらに頑張って頂きたいと希望しております。三
十周年になると最初六年生だった児童は四二才になるわけですから、そのメ
ンバーたちの中からまたリーダーが続々と生れて来るでしょう。

たちばなキッカーズのますますの発展を期待いたします。

二十周年を祝して

高田小学校長 清 水 英 男



私の家は県立三つ池公園の近くにあります。
私は、休日の朝、食事前に三十分ぐらい池の
周りをジョギングや散歩をしたりしています。
池の周りのジョギングコースを一周すると
千五百メートルです。百・二百・三百メー
ルと百メートルおきに標示されていますので、たいへん走りやすいです。

三つ池公園に行くと、いつも、ジョギングしたり体操をしたり散歩をした
りしている人たちに出会います。小学生から初老の人までいろいろな人がい
ますが、中年から初老の男性が多いのはどういう訳でしょうか。

中年や初老の人は、体を動かすことが少なくなるので、これからの生涯を
健康で充実したものにしようという体力づくりを始めたのでしょうか。

ところで、もっと長い人生を生きていく子どもや青年の場合はどうなので
しょうか。「ぼくたちは勉強が忙しくてそんな暇はないよ」という子どもがい

るかもしれません。「テレビを見すぎて朝はねむくてとてもできない」という子どももいるかもしれません。

でも、勉強が忙しければ、なおのこと、少しの間でも運動することが大切なのです。

昔から、よく学びよく遊べとは、実によいことを言っていると思います。今日、ややもすると、べんきょう、勉強と口にはするが、よく遊べ運動せよとは言いません。よく学びよく学べ、これが、今日の子どもに対する親の言葉ではないでしょうか。

最後になりましたが、ちばなキッカーズの二十年の歩み、たいへん、すばらしいことと思います。強健な身体とたくましい意志をもった子どもたちの育成をめざして今後もがんばってください。

ちばなキッカーズ

創立二十周年に寄せて

日吉台西中学校 秋山 幸一



日吉台西中学校の創立前より、現在学区となっている下田の地で長年地域スポーツの振興に尽力されてきました、ちばなキッカーズが創立二十周年を迎えられますこと、心よりお祝い申し上げます。

十年をひとむかしという単位で数えるならば、既にふたむかしにわたる少年サッカーの活動、この間指導にあたられました関係各位の変わらぬ熱意と団結には、ただく敬服いたす限りです。また、広く世に出られたOB諸氏

「チー ム」

慶大サッカー部 川田 修



私はこれまで十年間サッカーをしてきた。今考えるとサッカーを通じて学んだものは非常に多い。中学生の頃、先生になぐられながらブツ倒れるまで走り続けた事もあった。高校の時、コーチと言ひ合いになったり、試合に負けて初めて泣いたのもこの頃だった。大学に入ってから色々なことがあった。一年生の頃、朝から晩までグラウンドにいる生活に、「もうやめよう」と思ったこともあった。しかし、こうして今結局僕はサッカー部にいる、当然サッカーが好きだからだ。

しかしもう一つ大きな理由がある。サッカーで学んだことは多いけれど、僕が思うに、一番大切なものは、「仲間」だと思う。まったく知りもしない奴等が、サッカーが好きというだけで一つの所に集まる。勝って笑い、負けて泣く、そこには苦楽を共にした仲間がいる、そこで培われてきたものは、何事にも替えがたい本当に大切なものなのだ。

僕は今まで色々なサッカーをプレーし、見てきた。自分たちのチームが弱かった時であれば、日本一になったこともある。弱かったチームに必ずしもそれがなかったとは言わないが、強いチームには共通するものがあつた。それは「団結」である。「チーム一丸」ということだ。

「サッカーは何人でやるスポーツか？」誰もが十一人と答えるだろう。キーパー、バック、フォワード、どんな陣型をとろうがグラウンドの中でプレーするのは確かに十一人かもしれない、しかし、試合を見て応援する者は、グ

はもはや社会の中堅・戦力として、あるいは地域・学校スポーツの良き指導者として大いに活躍されているやに聞いております。誠に頼もしい限りです。

本校サッカー部にあつても、その歴史の輝きの中には、ちばなキッカーズの栄光に負うところが数々あります。対外試合に出ても『西中サッカーイコールキッカーズ』との認識が広く浸透しており、その誰もが長年サッカーに親しんできたことによるボールタッチの良さ、サッカーセンスの高さを指摘し、羨望の声を洩らします。私が本校に赴任して二年目、そんな形で西中サッカー部の「ものすごさ」を知らされているようなありさまです。

ところで、私は常々子供達に「スポーツは決して強制されてするものではない。しかしせつかく取り組むのなら、心・技・体・すべてを鍛えよう」と伝えていきます。とかく技術の向上だけに片寄りがちな世の趨勢ですのになかなか難しいところでしょうが、アマチュアスポーツの立場からは是非とも目指してほしいものです。

さて、終わりに名門ちばなキッカーズが更に研鑽を積み、大きく飛躍し、地域スポーツ・少年サッカーの良き手本として熟成されることを祈念し、創立二十周年のお祝いのことはといたします。



ランドに立つ十一人を信じ、その十一人はチームの代表として、他のチームメイトの気持ちを胸に全力を尽くす、勝利というものは、こうして得られるのだと思う。全員の力なのだ。逆をかえせば、見ているものもプレーする者も、チームの誰か一人でもかかってしまえば、勝利は遠ざかってしまうのだ。勝利を胸にした仲間があつたのが、チームであり、チームの全員の力をぶつけるのがサッカーだと思う。

ちばなキッカーズとの交流

島根県 大社少年サッカークラブ

理事長 大谷 佳弘



「継続は力なり」という言葉がありますが、二十年もの長い間、曾田監督を中心に少年サッカーを育ててこられた「ちばなキッカーズ」歴代の関係者の皆様に心から敬意を表し、お祝い申し上げます。

私たち「ちばな」との最初の出会いは、昭和四十八年の夏でした。當時は他県チームと交流することは滅多にない時代でしたから「横浜から少年サッカーチームが来町する」ということを聞き、地元少年たちは「都会のチーム」と交流することに興奮気味でした。保護者たちも「どのように迎えられるのか」などと心配していました。確か五日間ぐらいの滞在だったと思います。その間、交流試合や合同練習、日本海での海水浴や夜には相互に招待したりして友情を深めました。このことは当時、地元新聞に報道されました。いよいよ「ちばなチーム」が帰省するとき、お互い

に別れがとて辛そうだったのが、今でも頭の隅に残っています。

二度目の出会いは、昭和五十四年の夏、全日本少年大会に県代表として初出場したときでした。読売ランドでの暑いたたかいが終り閉会式の後、曾田さんの案内で「たちばな」のホームグラウンドへ行き親善試合をしました。その時は、セルジオ越後氏にクリニックしてもらったり、歓迎パーティを開催していただき、子供たちだけでなく親同士も大いに親睦を深めました。今でも当時の保護者たちが寄ると、交流しあった思い出話に花が咲きます。

昭和六十年の夏にも二度目の県代表として読売ランドに行きましたが、そのときにも「たちばな」の諸君が大勢応援にきてくれました。

また、昭和六十年の正月、大社高校が全国高校サッカー選手権大会に出場したとき、曾田さんのご尽力により大会前に旭高校と練習試合をすることができ、おかげで三回戦まで駒を進めることができました。その時、旭高校には大場君とか末山君とかがいて、かつて少年時代に交流した者同士が、再び成長してのめぐり合いができました。

このように、サッカーを通じて遠く離れたチーム同士が何度も「出会い」ができたということは、曾田さんに縁結びの役割をしていただいたからとはいえ、何かしら因縁からぬものを感じます。

曾田さんご夫妻は、私たちと同じく出雲大社のある大社町のご出身であり、曾田さんは私にとっても大社高校サッカー部の先輩にあたります。また同じ少年サッカーの指導者として指導方法など意見交換したり、教えていただいたり、サッカーを通じてのふれ合いは今もずっと続いています。

「たちばなキッカーズ」の数々の輝やかしい実績と伝統は一朝一夕でできるものではないと思います。指導者のご苦労は並大抵なことではなかったと思います。今までの豊富な経験を生かされて、これからも伸び伸びとした「たちばなキッカーズ」のチームカラーと、優れた技能を、層々深々されますことを祈念いたします。そしてまた、いつの日か交流のできる日を願っております。

たことと思う。

夏の真盛りの七月三十一日、当時の国鉄大社駅へ、たちばなキッカーズイレブンを、出迎えに足を運び、翌日からお互い自己紹介をしい、練習でボールを蹴りあった。一日一日少しずつ目に見えない所で交流の輪が広がっていったようで、ポジションをたずねたりボールリフティングが何回できるかどうかの位ボールを蹴るのかなどで会話ははずんだ。時には宿泊している旅館に夜な夜な自転車を走らせて夜遅くまで話し込んで、旅館の人や、監督さんらに叱られ、一緒に布団にもぐりこんだことを今でも思い出す。そうした楽しい日々も刻々と過ぎ、たちばなキッカーズの合宿も大詰めを迎え八月三日には炎天下、A・B両チームに分かれて交流試合をし、終了のホイッスルが鳴るまで汗まみれとなって、ボールを追いかけた。交流の輪がいつしか友情の輪となり、お互いの試合をたたえあったと思う。この交流を通じ、私達にとって一生の思い出となったことはもとより、遠方の都会のチームのサッカー仲間と初めて汗を流しあい、たたえあったことで友情を再確認できたのではないだろうか。

いつしか時が経ち、当時のみんなは今どうしているのかなあと思いつつ、私は教職の身につきサッカーを指導している。ボールを蹴るサッカーだけでなく、同じサッカー仲間とふれあえるサッカーにも、と考えるとともにあの頃の仲間といつか酒でもくみ交わしたいなあと思う今日この頃である。

たちばなキッカーズとの思い出

大社少年サッカークラブOB

現島根大学三年

高橋

実

月日の経つのは、はやいもので、私がたちばなキッカーズと出会ってから

我がスポ少時代を思い出す

―たちばなキッカーズとの交流―

大社少年サッカークラブ

昭和四十八年度主将

神田

智



私が大社少年サッカークラブに入学したのは、小学校三年であった。当時、学校体育では、ボールを蹴る姿はあまりみられなかったものの、スポ少の大社少年サッカークラブには多数の男子児童の興味・関心が集まり、人気のまゝであった。そんな折、すでに入学していたクラスメート二人の、分厚い毛糸のサッカーストッキングに魅了させられ、私も入部を決心した訳である。練習は毎週日曜日、少ない練習時間ではあるが土曜の夜はワクワクして眠れず両親を困らせ、今まで履いたことのないサッカーシューズを買ってもらい、うれしくて学校の登下校にもよく履いていたものである。

最上級生となった昭和四十八年、私は主将に任命され、そしてその年の八月、初めて県外の遠方のチームとサッカーを通して交流を深めあうことになった。監督さんから、「この夏、横浜のたちばなキッカーズが大社にきて合宿しながら、お前達と一緒に練習や試合をしたり交歓会をして交流を深めるぞ」という連絡がありみんな顔を見あわせた。横浜といえば大都会、「ぼくやちゃ（僕達は）、横浜のチームとちゃんと（うまく）試合ができればいい（できるだろうか）？でも横浜のチームと試合やあのは（するのは）すげのお（すごいなあ）」とみんな思ったのに違いない。それまでお隣りの広島県や鳥取県のチームとしか試合経験がないので、今回の交流を含めたたちばなキッカーズの大社合宿はみんなの驚きや喜びを、ひととき大きくし

九年が過ぎました。九年前の夏（昭和五十四年）、第三回全日本少年サッカー大会に出場した折、たちばなキッカーズと交流試合をしました。炎天下での全国大会で、子どもながらに肉体的、精神的に疲れ果てて、閉会式後、先生の言われるままに、横浜へ向かいました。「早く地元へ帰りたい」「当分サッカーはしたくない」と車の中で思っていました。

試合は、雨上がりの草丈の深いグラウンドで始まった。全国大会という重荷から解放されたせいも、みんなの足は軽かった。結局2対1で負けたように記憶しているが、後で「神奈川県で準優勝したチーム」と聞き、びっくりした。なるほどそれで試合に負けても、先生の機嫌が悪くなかったと、今考えれば納得できる。試合後の歓迎パーティでは、試合前のゆううつさは消え、「たちばな」のみんなと、楽しい時を過ごした。カレライス、プレゼント交換、なつかしい思いが頭を横切る。数時間の滞在でしたが、私の貴重な思い出の一つとなった。

それから五年後、再び「たちばな」のみなさんと、会うことになった。高二の冬、全国選手権出場の前、旭高を訪れた。東京駅到着から曾田氏、末山氏は我々に付き添って応援して下さいました。旭高には「たちばな」の卒業生が数人いましたが、昔の面影は、すっかりなく、プレーも我々と全く違い「さすが関東」と驚いたのは、まだ記憶に新しいところです。こうして昔のサッカー仲間と再会し、再び試合の機会をもたということに、私はこの上もない感激と、スポーツにおける友情のすばらしさを実感した。

現在、私は島根大学三回生となり、サッカー部の一員として、最後の青春を過しております。将来は、サッカーの指導者となり地元のサッカーの向上に努めるつもりです。再び私のチームと「たちばな」が対戦することになれば幸いだなあと思っています。

特
集

「これからの少年サッカーの在り方」

あいさつ

二十周年を迎えて

たちはなキッカーズ監督

曾田 弘 治



止めて、練習風景を見てくれるだろうか。

たちはなキッカーズが誕生した一九六八年は、日本サッカーが、メキシコオリンピックで銅メダルに輝いた、日本ではマイナースポーツであったサッカーが、オリンピックの大舞台で、アジア代表の心意気を示し、世界の注目を集めた記念すべき年である。あの当時の子どもたちの眼にはサッカーが、何よりも新鮮に見えたに違いない！ プレーの一つ一つが子どもたちの、限らない好奇心の対象であった。あれから二十年。いま、小学生の人気No.1のスポーツは、サッカーであるという。現在の子どもたちの眼には、サッカーがどのように映っているのだろうか。

日々に新たに、次から次へ、子どもたち自身が、自由に発想し、自由にプレーするような土壌を維持するには、何と何が「肥やし」になるのだろうか。



いわゆるリフレッシュを計るのに、どんな「方法」があるのだろうか。

幸い、現役父母・OB・OB父母等から成る『たちはなサッカー愛好会』が軌道に乗り、たちはなの活動を後押しすると同時に、老壮若入り交じって、みんなで、スポーツを楽しむ方向に進展している。年輪を経て根を下ろすことにより、子どもたちの活動が、益々のびのびとしたものになるよう願ってやまない。

子どもたちの活動を契機に、サッカーを媒体として、大人たちも交流を深め、それがまた子どもたちを刺激して、チームワークや発奮の材料となれば、根は、しっかりと大地に伸びていくだろう。

少年サッカーを問う

少年サッカーの在り方

松 本 育 夫



—プロフィール—

昭和十六年十一月 宇都宮に生まれる。
昭和三十九年 早稲田大学政経学部卒業。
同年 東洋工業(現マツダ)入社。
現在 同社リクルートセンター課長。

・メキシコオリンピック 銅メダリスト
・第五回アジア大会 銅メダリスト
・天皇杯全日本選手権 優勝四回
・日本サッカーリーグ 優勝五回

・海外遠征：サッカー選手、指導者として七十回

・海外留学：昭和五十六年～五十七年の一年間西ドイツ留学

・指導者：全日本代表コーチ、ジュニアコーチ、ユース代表チーム監督歴任

・解説者：NHK、民放各社サッカー解説者

・著 書：「燃えてみないか今を！」 ばるす出版社

・昭和五十八年十一月二十二日、『つま恋』のガス爆発事故に遭遇、手足骨折全身火傷の傷を負ったが、奇跡の復活をなしとげた。

それは、遊びたいとの人間本来の欲望を満足させたいためにサッカーを行っていることです。特にサッカーは、ゲームの中で同じ場面が二度とないといわれる変化の多いスポーツです。この変化の多いことが子供達を楽しませています。

しかし前記したようなサッカーの目的が違うために、面白く行動できるサッカーができないようになっていくのではないのでしょうか。

また、指導者が勝利を求めるために少年達の練習時間、日数、そして試合数とも過剰になってはいないでしょうか。一週間のうち六日間も練習を行い、そして時には朝の練習まで行われ、年間の対外試合が相当数組まれ、マイクロスで遠征に出掛け疲労した状態にはなっていないでしょうか。子供達が練習を休んだりしたら友人に迷惑を掛けてはならないと思い、無理をして練習を行っていないでしょうか。このような状態の中からサッカーに最も必要な自ら工夫をし行動をする楽しさが失われ、楽しいはずのサッカーを止めてしまう現象が出てくるのです。

私が監督をしていたユース候補の年代の選手が、グラウンドに出てきた時に、監督、コーチから言われたことだけのプレーを行い、自ら新しい工夫、また何か意識してプレーする選手が少なくなってきたことです。

そしてさらに恐れた現実、今から数年前に行われた高校サッカーの決勝戦に臨もうとした選手達二十二人のうち十三人の選手が、「今から君達は何を行いたいのですか？」との質問に対し、「サッカーで疲れた、これからはサッカーを止めてのんびり生活したい」と答えていた事実を知った時、何故だろうと考えざるを得なかったのです。

私は、高校一年からサッカーが一番面白いスポーツと知り、行ってきました。

小学校、中学校では他のスポーツを多く行い、サッカー中心であったが遊びで行っており、本格的に自分の意志で開始したのが高校一年です。

たちはなキッカーズを創立、運営されてこられました皆々様に、輝かしい二十年の歴史を心より御祝い申し上げます。
少年サッカーが、日本で一番競技者の多いスポーツとなった現在、たちはなキッカーズは、その先導の役を果たし少年スポーツの基盤を確立しました努力と創意に心より敬意を表します。

さて、今年は、オリンピックの年でありながら我日本は、残念ながら予選敗退となり、本大会に出場できないことは少年達の夢を破って誠に残念ではありません。しかし、少年達が必ずや世界へ仲間入りをしてくれることを確信しております。それでは、世界に仲間入りするために少年サッカーがどうあれば良いのか小生の体験を通した中から少しばかり述べてみたいと思います。先ず大切なことは、少年サッカーを単にサッカーとしてとらえるのではなく、スポーツとして考えなければならぬ時期にきております。

スポーツとは、その語源をたどれば「DIS PORT」港から離れる」からきております。つまり港から離れ洋上に船を浮かべのんびりと自由な時間を持つことによって、明日そして将来への鋭気を養い、人々を豊かにするための一つの手段であり、本来は、楽しく遊ぶことなのであります。

ところが日本に於いては、スポーツでなく、「体育」として発達してきたために、楽しむことよりも、スポーツを通した体験の中から何かを得ようとする傾向が強いと感じられます。

例えば、スポーツを行えば団体生活の中から他人との協調や驍を学びとり、社会生活に役立つことがあるだろう。あるいは全体で行動することによって辛い練習に耐え、耐えることを体得し、生きて行く中で何か役に立つことがあるだろう等々。つまり楽しい行動より、スポーツを行うことによって何かを学ばせようとの考えが、近年強くなりつつあります。

しかし、少年サッカーは、この様になってはいけないことと思います。少年達が何故サッカーを選択したのだろうかを理解してあげる必要があります。

高校三年間を無我夢中で行っても高校卒業する時には、まだまだサッカーに燃え尽きていることはなく、さらに追求度は高まっていったのでした。

しかし前記した高校サッカーの決勝に残った選手達は、既に燃え尽きてしまい、面白くなるのはこれからであるのに、サッカーを止めてしまいたいとの意志表示をしている事実をつかんだ時、少年スポーツの在り方を今こそ、親として指導者は考えなければならぬ時期にきているようです。

子供達が面白く、楽しくサッカーをしようとする意志を素直に受け止めてあげる必要があると思います。サッカーに疲れたり、サッカーを止めたくないということは、つまり、子供達にサッカーの面白さ、楽しさ以外の何かを大人が求めようとしているからではないのでしょうか。

子供達が大人になった時に、サッカーを行って良かった。そしてこれからはサッカーを続けていきたいとの欲望を持たせてあげられることが、少年サッカーの一番大切なことであると思います。大人になった時の勝利者になれる準備こそ最も大切なことだろうと思います。

スポーツ道とは、生涯スポーツを通した者のみが獲得できるものであると思います。素晴らしいサッカーを生徒行えるようにしてあげようじゃありませんか。



少年サッカーに期待する

岡村 新太郎



プロフィール

一九四八年四月二十一日（昭和二十三年）静岡県藤枝市生れ。藤枝中よりサッカーを始めて、県大会優勝。藤枝東高にて、三冠優勝（昭和四十一年度）法大にて、大学選手権優勝（昭和四十五年度）。

日本鋼管に入社（昭和四十六年度）、三年間選手（MF）としてプレー。昭和五十年に鋼管コーチに就任。

昭和五十六年～五十九年、日本ユース代表コーチ（リエカ優勝）

昭和五十九年～六十二年、日本代表コーチ。

・メキシコワールドカップ最終予選（森 監督）

・ソウルアジア大会（石井監督）

・ソウルオリンピック最終予選（石井監督）

昭和六十三年一月、日本ユース代表チーム監督。

「私たちはキッカーズ」、創立二十周年、誠におめでとうございます。継続は力なり、と申しますがサッカー少年と共に二十年間歩み続けてこられた指導者の方々はじめ関係者の皆様方の情熱に對しまして心より敬意を表します。

我々サッカーマンにとりましてサッカー仲間が一人でも多く増えることは誠に喜ばしい限りです。このような御努力が日本サッカーの発展に寄与していることは言うまでもありません。

メキシコオリンピック以降の日本サッカー界最大の業績、それは普及活動であると思います。これ程までにサッカー熱が広まり今や小学生年代では野球をしのぐ人気スポーツに成長しました。これは少年サッカー大会、高校選手権、JSL、トヨタカップ、ワールドカップ放映等がその要因でしようが、なにかなく、少年団の活動が最も大きなウェイトを占めていると思われます。

しかしながら、どうして日本代表のトップチームがアジアを制し世界へ参加できないのか？プロリーグが確立されていない。日本のサッカースタイルが確立されていない。日本代表の強化スケジュールの問題。他国の積極的な強化策。ハングリー精神や競争意識の低下、学校体育の限界、各年代層での指導ポイントが不明確。個性を重視した指導がなされていない。国際交流が少ない等様々な意見が出されておりますが、各々納得する要素であります。

二〇〇二年には日本でワールドカップを開催しようと日本サッカー界が動き出しています。実施に至るまでには先の問題以上に課題が山積みされていますが、我々の最も重要な任務は、「良い選手」の発掘と育成です。二〇〇二年は現在の小学校四・五・六年生が最も充実したサッカー年齢になりますが、少年達は日本サッカー界の大変貴重な資源であり財産であると考えます。その中からより多くの「良い選手」が輩出されることを期待致します。

良い仕事はできないでしょう。

二十一世紀に向けて「私たちはキッカーズ」が更に充実され、発展されることを大いに期待して二十周年記念の祝辞とさせていただきます。

その「良い選手」とは？

(1) 正しい状況判断ができる

自分の判断でプレーができること。そしてその判断は状況に合ったプレーであり「場違いなプレー」ではないこと。そのためには周囲がよく見えていないと良い判断ができません。また、アイデアが豊富であることも大切です。コーチから言われてやる選手では、大人になってから伸びません。自分で判断させる。

(2) 正確にプレーができる

ボールコントロールが自由にできる。ボールを止める、蹴る、ドリブルすることが「試合の中」で正確にできることが大切なのです。自分の得意な方の足で結構です。

(3) スピードのある選手

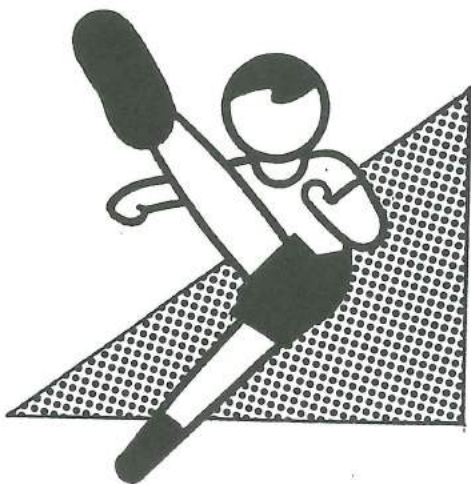
走るスピード、プレーのスピード、判断反応のスピードがありますが、特に判断、反応等の動作のスピードが重要です。

(4) 武器を持っている

人にはない自分の最も得意とするプレーがあること。また、負けん気の強さ等も将来は大きな武器になると思います。

以上が主に挙げられますが、これ等を指導者の方々はよく認識された上で子供達に接して戴きたいと思えます。そうすれば「良い選手」はより多く輩出されてくるものと確信致しております。

サッカーは創造のスポーツだと思います。この少年期に感性を豊かにし、自分の判断で対応することを習慣化しなければ成人してから何事に於いても



たちばなキッカーズ 二十周年記念に寄せて

セルジオ 越後



プロフィール

一九四五年七月二十八日、ブラジル、サンパウロ市に生れる。ブラジル国籍の日系二世。
 小学校一年生でサッカーを始め、十八歳の時サンパウロのプロサッカーチーム（コリンチャンス）に入り、フォワードとして名声を得た。
 東京オリンピックの時、ブラジル代表に選ばれた。

一九七二年、藤和不動産サッカー部（現フジタ工業サッカー部）に招かれて、日本サッカーリーグ一部で、二年間プレー。
 一九七四年の九月永大産業サッカー部（日本リーグ一部）のコーチに就任。このころ少年サッカーの普及を決意。
 一九七八年から財団法人日本サッカー協会専任指導員として、公認の「さわやかサッカー教室」をはじめとして、全国くまなく行脚指導にあたり、「サッカーの伝導師」といわれている。
 一九七九年二月、「株式会社リオカッパ・スポーツクリニック」（サッカー教室などの企画、運営、指導を業としている）を創設、代表取締役就任。
 著書に「水をやりすぎた木は枯れる」他多数。

たちばなキッカーズの二十周年を心よりお祝い申し上げます。
 早いもので、私と曾田監督や皆様とおつき合ひも十年以上になります。最初に出会った子供達も、大学生や社会人になっているはず。私は「さわやかサッカー教室」等の指導活動で各地を巡回するようになって十一年目になります。日本のサッカーも当時と比べれば、とても盛んになり、特に少年層の普及は目ざましい程です。
 広場でボールを蹴って遊んでいる子供達の姿を見ますと、サッカーも市民権を得ることができつつあると思います。

少年サッカーの大会も数多くなりました。理解者も増えてきました。嬉しいことと思いますが時折、心の痛む思いもあります。指導者の罵声を聞いた時や、子供達が罰でグラウンドを走らされたり、等。

スポーツは本来、楽しみでやるべきであると思います。また、子供達もうまくなりたい、強くなりたいと思っているはず。

当然チームを統率していく上で必要なマナーは、指導すべきで、叱るべきは叱る、時に鉄拳も私個人としては、反対ではないのです。親が子を教育する過程で、やむなく手を上げることもあるように。

私は子供達にサッカーを通じて、スポーツの楽しさを伝えることが大切であろうと思います。楽しむためには、上手になりたいと子供達に自主性が出て来るように指導者は心掛けるべきでしょうし、子供達の心理や生理についても理解を深めることも大切なことだと思っています。

子育ては時間のかかるものですし、面倒なものです。我々大人にとって永遠のテーマであり、チームの指導についてもしかりです。

指導の中には、教える、伝えることは沢山ありますが、見守ることもそれに匹敵する位に大切なことです。私自身、サッカーを愛し、今指導する立場で、少しづつそんなことが分かりはじめてきました。

たちばなキッカーズの今後のご発展を心より祈念いたしております。

座談会「サッカー協会役員を招いて」 —これからの少年サッカーの在り方—

出席者

片岡 次夫

横浜サッカー協会会長

横浜スポーツ少年団本部長

藤木 隆明

横浜サッカー協会理事

堀内 正明

横浜サッカー協会理事

横浜サッカー協会少年委員会委員長

篠原つばめスポーツ少年団代表



池畑健一郎

横浜サッカー協会理事

横浜サッカー協会少年委員会副委員長

駒林サッカークラブ創立者

曾田 弘治（司会）

たちばなキッカーズ監督

曾田 今日はお忙しいところをお集まりいただきありがとうございます。私たちは二十一年目を迎えてこれまでの思い出を記録しておくことも必要なのですが、それよりもこれを機会に初心にかえって、これからの「少年サッカーの在り方」といったような事を考えてみるのが大事なんではないかと思ひます。私たちはキッカーズは横浜で一番古いチーム

という事で、古いチームには古いチームなりに率先して色んなことを考えてゆかねばならないんじゃないかと。そこで今日は長年横浜のサッカー、県の少年サッカーを支えてこられた皆さんと一緒に広く考えたいと思います。ご存知のように日本の代表チームはたいへん低迷している。ちょっと口はばつたいようですが、二十年前に我々がクラブをつくった頃は丁度日本のサッカーはむしろ最高の状態ではなかったかと。オリンピックでめざましい活躍をして世界中の人を注目させた。それから二十年たつて、日本の底辺、少年サッカーはものすごく拡大したわけですね。にもかかわらず、逆に今の代表チームはどうも世界に通用しない。何故だろうか、我々の方にも一端的責任があるのではないだろうか。まあそんなことも含めて、我々のチームをもう一度見直して発展させたい。また横浜、神奈川のサッカーを発展させたいという気があるわけです。現在少年サッカーのチームが非常に多くなって、そのめんどろを見る皆さんの苦勞は大変なものだと

思いますが、二十年前に既にかかわっておられた片岡さんにその頃のお話を。

クラブチームが多かった横浜

片岡 そうですね。あの昭和三十九年の東京オリンピックが契機となって、スポーツというのが広く国民に浸透していったと思いますね。四十三年にたちばなさんができたのも、そういう流れの中ですね。私は丁度会社を定年になったところで、たまたま県の体育協会のお手伝いをしていた。そしたら、当時、日本にスポーツ少年団という組織がありました、神奈川県ではなかなか育たない。片岡さん一つこれをやってくれといわれまして四十六年にそこに入りました。県に大きな組織ができたのはそれが初めてですね。当時あったチームは、たちばなと、セントジョセフ、朝鮮学園、中区、東戸塚、クスの木、東希望ヶ丘、山王谷など八チーム位ですね。横浜のスポーツ少年団はここからスタートしたといえます。

曾田 今でもそうですが、当時から横浜のチームは学校チームより、クラブチームが多くて他とちょっと違っていたように思えますが。

片岡 学校の先生で子供のサッカーのめんどろを見ようとする人が非常に少なく、社会人の方が子供やまわりから頼まれて、ということが多かったですね。スポーツ少年団としても学校とは別の地域ス

ポーツ振興ということを前面に出していたこともあります。

曾田 現在横浜に何チームあって、その中で学校チームはどのくらいありますか。

片岡 全部で百十三チームで、学校チームといえるのは七チーム位です。

大きな目での指導が必要

曾田 多くのチームをまとめるのは大変な苦勞があると思いますが。自分のチームだけでも大変なのに……。

堀内 私が思うに、組織をまとめるのに自分の気持を全部ぶつけたのではまともでない。というのは以前にも言ったのですが大会が多すぎる。前に仕事で二年程南米に行つて帰つてきてみたらまた大会が一つふえていた。大会がふえればやはり勝利に皆向かつちゃうことは目に見えているわけですね。年に一つぐらいであれば勝ったチームを大きく表彰しても良いが、三つもあると大きくやればやるだけまた次のをもう一つ作ろうという話になる。残念ながら今はだましながらやっている。それからチーム数が非常にふえてサッカーの底辺のレベルが上がったと皆さんおっしゃいますが、私はそうじゃない。たまたま人口がふえただけだ。

いってみれば日本人は器用だから、経済や技術を高度

成長させたのと同じようにサッカーもびよーんときただけで、今負けただけで当然だと思ふ。土壌がない。

僕らも二十年たつて自分のチームから晴れ舞台に立てるような選手を育てなかつたことに責任を感じなければいけない。やはり、その原因は勝負にこだわらずにそつちで選手を育てられなかつたのかも。それでも二十年前の子供達の方が伸び伸びとやらせてきたので今でもまだサッカーに残っている。十年前の子供は残っていないのが多い。そういうことも考えなければいけないと思う。もう一ついましてもらうと、最近の代表者の人達は色々忙しくてなかなか集まらない。かつての十チームぐらゐの古い時の方が皆熱心でした。今の代表者はやとわれの人が多いのではないかと。そういった人をリードしてゆくというのは非常にむずかしく、政治家じゃないけれども気持と裏腹にしなければならぬ。もう少し話のわかる人達が、意見をぶつけ合つて、自分のチームにこだわらず大きくもつてゆきたい、というのが私の夢なんです。

曾田 堀内さんは自分のチームのめんどろを見る暇は全くないでしょう。

堀内 全くないです。昔の人達はよく分かつてくれて、自分のチームはちゃんとやるから、横浜のために頑張つてくれと。今はぶつちやけた話どうもそうではなくて……。今の人は自分のチームだけでなくサッカーそのものについて大きな夢を持って

いない。

曾田 藤木さん、昔のチームと今のチームをくらべてどうですか。

藤木 昔は子供の数も多くなくて、本当に手作りの感じがしました。さつきいわれたようにたしかに今は試合が多すぎる。当時はこんなにサッカーが広がるとは思いませんでした。四十五年頃から「国際チビ子」に参加したんですけど、チーム数が少ないのですぐ終つてしまふんですよ。それじゃつまらないからというんで、今のスポ少大会をはじめたわけですね。当時は底辺を拡大しなくては行けないということばかり考えていましたけど、逆に今みたいにチーム数がふえて試合が多くなつてくると、今度は勝たなくては行けない。十年位前に私は曾田さんにいったことがあるんです。「こう大会が多いと皆勝ちにかかつてくる。どうもこういうのは良くない」。曾田さんにいわれたのは「その勝ち方にもよるんじゃないですか」とね。たしかに勝ち方も必要なのでね。子供なら子供らしいサッカーをやつて勝てばいいわけでしょう。それが勝つためにトレーニングをして体力をつけてやれば当然勝てる。ただパワーがつけば勝てるわけですよ、子供だったからね。そのへんでね、少年サッカーの曲がり角がきやつたと思ふんです。以前はもつとのんびりやつていましたよね。たちはなさんなんかの子供のキャラクターもすごかつた。

曾田 そうですね、子供達に我々が引張られてゆくという風でした。

藤木 ところが今は段々個性的な選手が出なくなつてしまつた。そこに何か問題があるんですよ。

曾田 かといつてあともどりはできないわけですよ。多いなりに全体を引っぱつてゆかなければならない。

勝つことに執着しすぎる

藤木 それでね、僕も少年委員会に抵抗を感じているし、矛盾も感じているんですよ。さわやか新聞や神奈川新聞が優勝したチームだけにパーッとスポットライトを当てちゃうわけですよ。そういうのは絶対よくないと思う。そこにゆく過程なんかを余り見ないで結果ばかりを見ようとする。だからなるべくサッカーは遊びだ遊びだと口を酸っぱくしていうんだけど、大会をやる以上勝たなくては行けないと……。

片岡 私が今一番感じるのはスポーツということにたいする日本人と西洋人の感覚の違いですね。日本人のは全て勝負勝負なんですよ。まあ昔からの武道の真剣勝負の流れがあるからでしょうけど。外国の場合はそうでなくて、あくまでも自分の健康維持のためにスポーツをやる。サッカーもやるしバレーもやるということですね。日本ではお母さん達に

してもスポーツは勝たなきゃいかんという考えが強いですが、藤木さんのいったように、勝負にこだわるなといってもそういえない。一番問題なのは指導者でしょう。これから我々指導者が何をしなければいけないか、頭の中を切り替えてはいけない時代に来ているんじゃないか。要するに勝負にこだわるんではなくて、健康ということで考える時代に…。

別々になっちゃう。勝負だけじゃなく助け合いとか色々あるんですから色々な子供達が一つのチームに入ってゲームをすれば何も問題はないんですけど、やはり勝負にこだわるから必ず編成上の問題がおこるんです。それと僕がみてることややはり学校体育ばかりでなくて、学校の特別クラブも社会体育の分野に少しづつ入りはじめているんですけど、やはり勝負にこだわるのは大人である指導者だということです。

曾田 そうですね、何かさわやか新聞なんかで、片岡 池畑さんなんか小学校で体育というものを主としてやっているわけですね。ところが最近日本では体育とスポーツがごちゃごちゃになってよく分からないままに進んでしまっている。スポーツをやるのはいいんですが、今は部活的なスポーツになってしまっている。そのへんから改めてゆかないとむずかしいんじゃないか。

曾田 子供の勝ちたいという気持はもう飾り気も何もない、自分の思ったことをそのまますぐ顔や行動に出すわけですから、大人がそれを押さえるべきであるのに、大人が率先して勝負にこだわる場所に問題がある。

池畑 そこを開かれると辛いんですが、体育の指導要領というのがあるんですね。低学年では基本の運動の中に「ボール操作」というのがある。でも先生たちはよく知らないものだから子供達にボール一個与えてゲームをさせてしまう。一番問題になるのはチーム編成なんですね。勝ちたいから、いかに有利なチームをつくるかにこだわるんですね。ちょっと気の利いた先生なら男女混合とか均等化を考えるとでしょうけど、あぶないからという気持が働く

池畑 こだわってもいいんだけど、そこに子供にたいする言葉の選択を全く考えずに自分の感情だけで言っている姿にがっかりするんです。いわゆるサイドコーチをやっているのを見ると、子供達への悪口雑言が大部分を占めていて、次に何をすべきかというコーチをしていない。子供達への非難が多いということはやはり指導者が勝負にこだわっているといえるんじゃないですか。

藤木 本日はそうあるべきだと思うのです。協会の考え方は少年サッカーの普及だけで、どういう風に普及するかという点では全日本少年サッカー大会みたいなことをやればいいと思っている。協会も指導方法などもっと独自の方針を打ち出していと思う。子供達に基本だけをきちんと教えるのが指導者で、それができなければ指導者ではない。試合でもってあしろこうしろと絶対に云うべきではないと思う。試合は子供達が勝手にやるべきものなのに基本を教えないで試合の時にガミ云う指導者が多い。

曾田 悪口雑言というのは好ましくありませんね。片岡 端的な例でいいますと、アメリカのリトルリーグでは試合に勝つと親が子供を肩の上に乗せてグラウンドをまわるんですね。日本では監督を胴上げしますよね。

藤木 セルジオもいっていましたね。子供が大人を胴上げするなんて全くおかしいってね。

片岡 あれは監督が勝ったわけじゃないんですよ。そのへんのスポーツの観点を大人が改めていかなきゃだめなんじゃないですか。

基本と獨創性が大事

曾田 私は子供の時代は獨創性を大事にしてあげたい。勝つことは楽しいことですから勝つために色々な獨創的なプレーを自分で見つけてするのはいいことです。ただ大人の考える型にはめて勝負勝負というのかえって子供をスポイルするのではないか。それと基本が大事なんじゃないですか。よその国では結構基本をちゃんと教えてると聞いています。

片岡 私も昔はやったんですが、今はボールを蹴るにしても蹴り方の基本を一つも教えてないんですね。例えば蹴るとき足のひき方、上体をどうするか、どこで踏み切ってどこに当たるとかね。今はそういう基本のしごきが非常に少なくて、むしろ数重ねればうまくなるという考え方でですけど間違った技術を何回くり返してもうまくならないですよ。そういう基本をちゃんと教えらる指導者が少ないということが大きな問題ですね。

曾田 小学生の時に最低身につけておいてほしい

というサッカーの指導要領のようなものを協会の方で示したり、その獨創性についてこういう点を特に伸ばしてほしい、とかいうアイデアを協会ですとめるというわけにゆきませんか。

堀内 それともうひとつは練習時間の差です。正月も休まず練習したんで優勝したって誇らしげにいらしたチームがありましたけど、そんなのは当たり前です。時間をかければ、横浜はチームが多いけど、この頃は一週間に練習が二日なんていうチームは少ない。これは非常に残念です。極端なことをいえば、試合なんていうのは、週一日のチームの大会、週二日のチームの大会などと分けたらいい。これが一番ユニークで面白い発想だと思う。(笑い)

片岡 いやその話はスポ少の中でも出ていますよ。週一日のところと週四日のところを同じに扱うのはいけないと。

他のスポーツもやらせる

堀内 昔は人数も少ないせいもあって基本を教えていました。たとえば砂を敷いて素足で蹴らせて、足跡であだこうだと、そういうやり方をしてましたが今はそんなことはやっていない。サイドキックさえまともに教えないで、何であのときサイドキックやらなかった、とどなつても無理ですよ。ただ基本ばかりやっていたんでは試合に勝てない。応用編をいっぱいやらないと勝てないでそっちにいつちやう。

曾田 話はすこし変わりますが、週一回サッカーをやるとして、残りの六日間をどうやって遊ぶか、他のスポーツとのとり合わせということが必要ないように思います。私が指導をはじめた頃には、三沢のサッカー場(陸上の方)などにゆきますと、子供達はサッカーだけでなく巾跳びをしたり、試合後他の遊びをするのが普通でした。ですから当時は子供達はサッカーだけにとらわれないで生き生きといろいろな事をやってきていたと思う。今から考えるとむしろその方がいいんじゃないかという気がするのですが……。

藤木 いろんなスポーツをやった方がよいというけれど、今の子供はそんなにやる機会が無い。だからサッカーだけでもやってくれればよい。

藤木 子供を勝たそうと思つたらフォーメーションなんかを教えた方が早い。

池畑 今の子供達は自分では町の中で何もできないですね。だから大人がサッカーなどを組織してやらなければならぬ。我々の子供の頃は海や山へ

行っていくらでも遊べたのに今の子供は塾にでも行くしかない。それに学校の現場で親にいわれたことがある、「サッカーをやって下さると助かる」と。だから「ためにするサッカー」になる面もある。

曾田 ためにするのではなく、子供時代は、自分が今やりたいことを自由にやれるという環境が最高だと思う。

片岡 低学年だったらドッジボールなんかもいいですね。ボールに対する反応がよくなるし、フェイントもうまくなってサッカーのためにもいいですよ。

池畑 他のスポーツという意味だけでなく、子供の時に身につけておかなければならない基本的な運動能力をいろいろなスポーツを自由の中で身につけるとするのが大事ですね。初期のちびっこの子供達は水泳も陸上も万能でしたけど、最近のサッカー少年は水泳が苦手です。

片岡 子供時代にあるスポーツだけに片寄ると、野球ひじとか、特有の障害が出ることもあるのでいろんなスポーツをやった方がよいし、その方がいい選手が育つと思います。

曾田 ただ今のスポーツ少の環境の中でサッカー以外のことをやらせようと思ってもなかなかむずかしい……。

片岡 毎年横浜でフェスティバルやりますね。あの時は全くボールを持ってこさせない。いわゆる遊びですね。その時の子供を見てみると、ものすごく

感激するんですね。たとえば同じランニングでも後向きとか、横に走るとか、変ったことをやるとか、そういう中で競争意識とか、勝つイメージとか、感激とかがいんですよ。

堀内 今のフェスティバルでも、うちやちびなさんは毎回参加していますけど、全体としては意外に参加するチームが少ない。サッカーのクラブが何であんなことをやんなくちゃいけないんだ、という意見があるんですね。ちゃんと理解していない指導者が多い。クラブが大事なのか、子供が大事なのか、それから日本のサッカーに何とか強くなつてほしいと思うのか、そういうことを合わせて考えなくちゃいけない。一つだけ考えるとこれでもいいじゃないかという事になる。もうひとつ、多い試合をさらにふやすようなことになるのですがやはりリーグ戦を多くしたい。試合数が多くなれば子供達の出るチャンスが多い。どんなチームでも五試合あれば全員を大会に参加させることが可能なのです。ただそうしてほしいと思っても下手な子まで出すと勝てないものだからどうしても……。「あすなる」にしても普段出れない子供を対象にやった大会なんだけど、やっぱり勝ちに走ってしまう。一軍がきて大会に出たといつてもめたという話も聞いていますけど……。

片岡 その考えは非常にいいと思いますね。大会は多くても、二軍や三軍にチャンスを与えるためにあるのならね。要はそれをわかってくれない指導者

の問題だと思う。

藤木 だから優勝にスポットライトをあてるから勝ちたくなる。試合は練習みたいなもんだから多いのはいいんですよ。優勝にこだわるのは大人の自己満足みたいなもので、おかしいんじゃないかと思う。

池畑 うちのチームが優勝した時のことですが、優勝したチームの十四、五人はいいんですよ。同じクラスにその倍以上の子供がいるんですが、その間その子供達の練習がお休みになってしまふ。上が活躍するほど休みが多くなってしまう。レベルがどんどん下がってしまうんですね。僕は少年サッカーの目的はチームをつくったり、そのクラブが強くなったりすることではなく、子供達一人一人を育てるのが目的じゃないかというふうに考えを変えてきたのです。

曾田 要するにどんなに子供が多くても、指導というの是一对一なのです。

池畑 自分の子供がいたらチームに迷惑をかけるからといってやめさせる親がいるという話を聞いてものすごくさびしい思いをしました。どんな子供でも好きでできているのですから、それなりに指導をしてやらなければいけない。試合に出られない子供達にたいする指導者の目の向け方に一つの問題があるような気がします。

燃えつき現象に問題

曾田 東大の浅見先生が、いわゆる「燃えつき現象」ということについて前に話をされていましたが、この間松本育夫さんに会ったら松本さんもやはりそういうことをいってました。松本さんが、一・二年前の全日本高校サッカー選手権の決勝をやった二つのチームの二十数人の選手に会って、将来もサッカーを大いにやるのか、と質問したら、十三人もの選手が「もうやりたくない」というような返事だったそうで、慨嘆していました。結局「燃えつき」ということなんですよけど、実際はしばらくすればポロポロになっている。これは一寸異常ではないでしょうか。

片岡 今は小学校でもその現象が起きています。六年生で、もうあんなつらいものはいやだと、楽しめるべきスポーツが苦しいものだというイメージになっている。やはり指導者に、スポーツは苦しくなくては駄目だという観念があるのではないかと思えます。繰り返しさえすればうまくなるという発想が強すぎて、どうしたら楽しく、自分で繰り返しようになるか、という発想が無いのだと思います。

曾田 さっき独創性ということをいいましたが、独創そのものが楽しいから独創性が出てくるし技術も進歩して行くというのが本来ですね。

片岡 自分でスポーツをやりますと、好きなプレーは努力もするし進歩するんです。しかしきらいなプレーはなかなかうまくならない。それを自分で解決しないですぐに指導者に聞くというのがいけない。だから皆さんにお願いしたいのは、指導者は自分を売りこんではいけません。そしてスポーツの好きな子供を育ててほしい。教える人、教わる人という発想を切替えてもらいたいですね。

曾田 自分で進んで楽しくやる、というのが燃えつきない方法なんじゃないでしょうか。

藤木 僕はね、バーンアウトというのがよくわからないですね。皆さんは二十年間子供の指導をやつて決して燃えつきていないわけですから、日の丸をつけることを目的に頑張っているのがありますし、下から歯をくいしばって上がってゆく、そういう人がいなくなったことなのかな。

片岡 アメリカのある人が、日本の野球は永久にアメリカに勝てないといった。何故かという、日本では二百七十三条のルールの他にチームの中にルールがある。例えば監督のいう事はきかなければならない。練習は強制、先輩には従うなど、高校野球球だった一人が万引きでもすれば全員が出場停止。こういうことが自分の首を締めているわけなんです。

池畑 日本のスポーツというのは「道」、いわゆる「どう」をめざしやすいんですね。

片岡 だから日本の場合、マナーにつながるんです。スポーツにマナーを良くするようなルールはないんですけどね。そのへんを改めないと日本のスポーツはだんだん弱くなる。スポーツはクラブのためとか会社のためにやるものではなくて、自分でやるもので、それが結果的にオールジャパンの選手になるということですね。

池畑 燃えつき現象というのはスポーツばかりでなく、受験生にもあると思いますね。例えば大学に入ったら、何もしない。勉強もスポーツも。

藤木 松本育夫氏の年代は小学生からサッカーをやつてたわけではない。中学・高校からやつたから燃えつきなかった。

堀内 我々の時代は、今子供に教えているような事はほとんどやっていない。残っている部分がいっぱいあったから燃えつきていない。

曾田 「燃えつき」という言葉も必ずしも適切でないように思える。サッカーのボールでいえば空気の流れ過ぎではないかと思えます。皮のボールならどんどんふくらんで、もっといれるとパーとふくらみ過ぎて、ついにははすまなくなってしまう。あとはパンクするしかないですね。

藤木 でも自分の能力を見て、日本のトップレベルまで行けそうかどうかはやりやす。途中でやめるといふ人はいない。ただいえることは曾田さんがいうように、詰め込み過ぎということは絶対あ

るね。指導者が自分がやらなくて済め込んでしまうから、選手はいやになっちゃう。

池畑 例えばトレーニングでも、いたいけな二年生に向かって、三十米位離れたところからロビングボールを蹴って、それをトラップしてドリブルしろ、なんていうことをやっているわけです。私はそれでは子供がボールをこわがって伸びませんよ、というんだけど、これは「しごき」に近い。指導者達に、子供達の今の段階がこうだから、こういう指導をしたら楽しくやれるんだ、ということをおぼえてもらうことが先のような気がしますね。

指導者はほめるのが下手

片岡 日本の指導者の欠点は、ミスにたいしてきびしくて、上手にやったことにたいする「ほめかた」が下手なことですね。

堀内 ラグビーの日本代表のキャプテンだった石塚選手がイギリスに行つてラグビーのクラブに入つて、その中でいろいろなトレーニングを見たそうです。そうしたらそこではコーチが選手にたいして「ありがとう」という。何だと思つたら自分のいっただことを選手がやってくれたから「サンキュー」なんだと。日本は逆でコーチにありがとうという。そうではなくて、コーチが選手にお礼をいうという気が持が大事なんだということですね。

も、やめさせたり塾に行かせたりするんじゃないで、もっと頑張んなさい、私もクラブの手伝いをするから一緒に頑張ろうと。そういうお母さんが素晴らしいんですね。よろしく願います。(笑い)

しつけは基本的に家庭のもの

曾田 もう一つの問題として「しつけ」や「心の探求」ということをクラブに期待する、ということについてはどうですか。

堀内 必要最低限はやっているつもりです。こういう例があります。うちの合宿で、ある母親から「子供達がおはようございますをいわないんですが、何でこのクラブではやってないんですか」といわれたんですね。だから私は「やりました」って。あなたのお子さんは私と廊下で会ってもおはようございますっていわないよ。それを他の子供にやってくれというそういう期待感の違いです」と。ちょっときつかったんですが、やはり「しつけ」というのは家庭が基本ですね。

池畑 さきほど藤木さんの云われた「おおらかな指導」と、家庭のしつけの両方うまく働くのであって、それをクラブだけに要求するというのは学校に道徳教育とか礼儀とかを要求するのと同じでまですきませんよ。

堀内 町の道場と間違えているのではないですか。

池畑 子供を指導するのに僕も「あゆみ」というのを書きますが、要するに我々大人は人の欠点は沢山見ぬけるけれど、良いところはなかなか見つからない。だから「あゆみ」に四行の言葉を書いた時に三行のほめ言葉を書ける先生は素晴らしい。最後の一行で注意するんだけど、ここは駄目と書かないで、ここをこう直すともっと良くなりますよ、という書き方をしてほしいと言いつづけているんですけどね。いい点を見つけてそこをほめてやると子供はもっとやる気を起すんです。

片岡 さっき曾田さんがオールジャンプの選手が強くならないと言いましたが、端的にいうと日本のコーチがクラマーさんみたいなコーチにならないといけない。クラマーさんというのはほめ上手なんです。釜本だつて杉山だつて全部ほめられてあれだけになった。それなのにそれでそれを教わった人達がいじくんだらうと思う。だから日本の選手は絶対に強くない。クラマー式の教え方のできる人は日本では松本育夫さんだけです。要するに教え方が問題なんです。いかに子供を好きにするか。日本のコーチは知っているはずだけど、どうしてかしごく方についてしまう。

藤木 日本でサッカーの中道といったら高校サッカーでしょう。そこまでに詰め込み過ぎてしまう。だからヨーロッパのクラブみたいなものがあれば、のんびりできるのではないか。

たしかに道場ではそれもひとつの売物になっていると思いますが、さっきいった、スポーツを道と考えているというのと似ています。

片岡 しつけというのは指導者が、自分でできないことを子供にいわないことです。例えば信号を守りなさいというならまず自分がきちんと守らなければいけない。それから「スポーツの上でのしつけ」はできますよ、やっているのだから。ですが、おはようございますとかごちそうさまなんていうのはスポーツには関係ないことです。ただ指導者はできたら挨拶はまず自分からすることですね。これをやらないで子供に強いたらいけない。しつけというのはまず指導者が自分で模範を示すということだと思います。

藤木 サッカーのクラブの中で自然に覚えてゆくものが大事で、ことさら子供をいい子にしようがないと思います。

池畑 最近のサッカーの試合前後のしつこい程のエールの交換とかいうのはゆきすぎのような気がしますけどね。

藤木 最初と最後にグラウンドに礼をするのもやめようといったんですよ。グラウンドではなくて設備をやってくれたチームに挨拶するのはいいと思いますけどね。

曾田 うちが強かった時代に特にそうだったんですが、伸び伸びと試合をやるといった評価の半面、

池畑 急がないですむわけです。

堀内 それと日本人はルールにこだわりのすぎている。ルールの規則でしょ。例えばグラウンドを提供しますね。そうすると、このグラウンドでは狭くてだめだとか。時には左右の寸法が違わざるを得ない場所もあるんですが、子供は何にもいわない、本能的に使いこなす。大人がいうんですね、危いとかだめだとか、ルールがあつてスポーツだと思つていて。ルールなんか本当はいらぬ。

池畑 学校の現場ではね、やりながらルールをつくってゆくんですよ。

片岡 それが一番いいですね。チームを決めるのも監督が決めでないでジャンケンで決める。SLなんていうのはミスしたらすぐ交代する、そういう方が子供はよく考えると思う。

藤木 日本協会では今一番の急務として、指導者の養成をいっているが、そういうおおらかな心を持った指導者をつくるようにしなければ駄目だと思います。勝つことに血道あがるようなのではなくてゆつたりと構えた。セルジオもいってましたが、サッカーの指導者はコートサイドからどくと、ラグビーのようにスタンドの一番上にあげてしまえと、そうすればもっと面白いサッカーができるのではないかと。堀内 ここにもお母さん方がおられるけど、僕はお母さん方の考え方も我々と同じようにならないと駄目だと思うんですよ。自分の息子が出られなくて

行儀が悪いというのがいつもありまして……。

堀内 子供だつたらしょうがないと思いますね。行儀が悪いというふうにとらえないでよいと思います。子供らしくていいですよ。

地区選抜で新しい選手の発掘を

曾田 もう少し話題を大きくしまして、日本サッカーを強くするというようなことに関してですけど、今さわやか杯の市対抗で横浜の選抜チームをつくっているんですね。ところが東京について人口の多い大横浜の代表チームをひとつつくることに大分無理があると思いますね。それで横浜の各区とまではゆかないでも、いくつかの拠点をもうけて、そこを中心としたいくつかの選抜チームをつくる。その中心には古くからの有名チームから選手を選ばないで、なるべく新興チームからこれは面白い、といった選手を集めて、他の区の選抜チームと試合をさせる。そうやって新しいチームの中からいい選手を引張りあげる必要があるんじゃないでしょうか。各地区の選抜チーム同士で勝ったところを横浜の代表にする。そんなやり方が、これからの少年サッカーを発展させるのに有効じゃないかと。まあ清水みたいにはゆかないと思いますが、横浜は大都市ですからいくつかに分けて考えた方がいいと思うんですが。

堀内 この前もそんな話が出たんですが、横浜大会も今のままでは無理だと思っんですよ。だから区を中心にしてね、その中で予選をしてそれで勝ち上りを中央大会にするというように持ってゆく。だからブロック別の拠点をつくらなく駄目だと思いますね。十チーム位でリーグ戦をやって、そのブロックの中でいい選手がいればそれを選抜チームに入れて……。

曾田 将来ね高校でも活躍するような隠れた人材がいるんじゃないかと思っますね。それをどうやって発掘するか、ということですね。

堀内 もうひとつは日本のサッカーをどうするかということですね、今までのいろいろ話も出てきたけれども、指導者がもう少し変わらなければ駄目だと思っんですよ。この前も岡村新太郎氏とちょっと話した時にね、試合に文句をいう指導者は駄目だと、試合をだまって見ててね、そういう指導者をつくる。サッカーのやり方もそうしなければ、子供の自主性が出てこないというんですね。一番最初に曾田さんがいったように今ここに二十年のつけがきてるんですね。大会をやれば勝ちたくなる。勝ったチームにやたらスポットライトを当てないで、賞状の一枚もやればいいと思っんですよ。子供の時は勝つことが一番大事なんじゃないんですから。地区毎の選抜の話は僕にいわせれば益々複雑になりますね。横浜の場合は特にね。各チームの人が、自分の試合がある

から選抜には出さなくとか。

藤木 そういう傾向はありますよ。

池畑 それと選抜チームに選ばれるとか特別な人間になったような気がして、親が天狗になったりするんですね。もっと大らかな集団にしてゆかないと。

堀内 去年の横浜選抜では困りましたね。親の天狗もともかく、どこかのタレントの芸能パパ芸能ママと同じですよ。荷物をお持ちしようとか、どうですこうですか、子供を殿様にしてしまってるんです。(笑い)

曾田 そういう問題も含めましてね、横浜をひとつに考えないで、いくつかのブロックをつくって、その中でサッカーが盛り上がってくるような形を考えたいですね。もう一つは子供のサッカーを通じて大人のサッカーも盛んになるような形ができればと思っんですが……。

堀内 大人っていうのは社会人？

曾田 たちばなにはですね、子供のサッカーを通じて親しくなった父母が集まって「たちばなサッカー愛好会」というのをつくっているんですね。そこではほとんどサッカー経験の無い大人たちが集まっ楽しくボールを蹴っている。こういうことは大変好ましいことだと思っますね。親子共々サッカーを楽しむという形になるわけですね。

堀内 いいですね、あの河川敷のグラウンドを是非

他チームに学ぶ

二十周年記念誌特集「これからの少年サッカーの在り方」を中心とした次のアンケートを、たちばなキッカーズに深いつながりのあるサッカーチームに寄稿をお願いしました。

① 試合数の多さについて

チームを強くするためには、きびしい試合を数多く経験させる必要がある。しかしそれが過度になると、非常に「忙しい」サッカーの習性ができ、少年時代に身につけてほしい基本やサッカーの素養(身のこなし、独創性等)を欠いてしまうような恐れがあることについて

② 少年時代は他のスポーツも大いにやった方がよいか

日本のトップチームの指導者やスポーツドクターの中に、少年時代は単一種目にかたよらない方がよいという意見を持つ人が多い。しかし現実には、当方でも他のスポーツはほとんどやらせていない。この点について

③ いわゆる「燃えつき」現象について

東大の浅見先生や松本育夫さんは、あまり早くからしごかれ続けると、高校卒業までに「燃えつき」で、意欲を失い、かえって大成しないと主張されているが、これについて

④ しつけ、心の鍛練について

少年スポーツは楽しくのびのびとやらせるのが本道である。しかし「のびのび」と、行儀の悪さは隣合わせしている。一方、スポーツクラブに個人的しつけや心の鍛練まで期待する親も多い。この問題に

使っして下さい。我々もやりますから、一緒に大人も子供もやりましょう。

曾田 そろそろ時間ですので、今日は貴重なご意見をいろいろありがとうございました。たちばなを含めまして二十年という年月が過ぎて、ひとつの曲がり角にきているということをつくづく感じるんですね。ここまで少年サッカーの在り方をいろいろと話し合っただけですが、これを契機に少しでもいい方向に進んでゆければ、と思っています。どうもありがとうございました。



ついて

- ⑤ (1) 創立年月 (2) 現在の学年別会員数 (3) 会員の所属する小学校数
(4) 大会優勝または準優勝の実績

山王谷サッカークラブ

高田 勇

① 子供は一番試合を望んでいるのは事実で、練習のときにも紅白戦を待ち望んでいる。いくら練習をしても試合の裏づけがないと教えられたことが身につかない。同じサッカーであっても各チームがそれぞれ、といっても優秀なチームに限られるが、個性のあるサッカーをやっているのに驚く。

試合の度に指導者から具体的に良かったところをほめられたり、悪かったところを指摘されたり、子供だけで反省会を開いたり、作文を書いたりすれば、なおいっそう試合の成果がある。ただし、試合が過度になり、個性でやるようになれば危険である。また、感激がなくなっっても効果は薄い。少年時代には確かにいろいろなことをやった方がよい、スポーツもまたしかり。しかし、それは少年が少年らしく生きてる社会でのことであって、現在のように学校・塾のしめつけがきびしい時には、あてはまらない。グラウンドへ降りたときだけスポーツをやるようではすべてが中途半端になる。

現状では一つのものに熱中する喜びを得る方が意義がある。

③ 「燃えつき」現象というのはスポーツに限らず何にでもあると思っ。けれども、逆に遅く始めたら効果的かというとなんかそうではない。やりた

こと少年サッカーに関する限り「燃えつき」現象などは寡聞にして知らないし、起こりえない気がする。

- ④ スポーツクラブが個人的しつけをやればそれにこしたことはないと思うが、昼夜接している親がやれないことがそう簡単にできると思うのはあまりに楽天的である。まず親からしつけをしなくてはと思うことがしばしばあるのではないか。

但し、サッカーをやっているうちに心の鍛練は肉体の鍛練と同様にできるだろうし、仲間への思いやりなど形式的なしつけ以上にすばらしいことも身につくことがあると思う。

- ⑤ ◎創立一九六八年四月

◎六年 十一名、五年 十二名、四年 十九名、三年 十四名、二年 十九名、一年 十三名、幼稚園 五名。

◎所属小学校数

主な学校は三つ。一人しかいない学校を入れたら十近くになるだろうか？
当方のモットーは、「来る者問わず、去る者追わず」なので、地域は限定しない。

◎大会優勝の実績

神奈川県選手権、横浜スポ少大会、新人戦、国際ちびっ子、YBS（山梨テレビ）大会、船橋大会、芳川大会、名張大会その他多数。



あざみ野FC

村上源也

- ① スポーツに興じる子供達のお目当ては、何といってもゲームをすること

るのも指導者にあたえられた義務の一つかもしれません。

- ④ 私どもの少年時代には、学校の先生から朝夕のあいさつの仕方まで細かく注意されたものでした。しかし、最近では比較的その傾向は緩やかです。良くいえば子供の主体性、自主性が大切にされているということでしょう。しかし、個人が自分の考えだけを優先させていては団体としてのまとまりを欠きます。特に、複数の人の総合力が要求される団体スポーツでは、個人のわがままはゆるされません。このような機会にある程度の「忍耐」の強要や人間関係に必要な「しつけ」を行うのは、許されて良いと思いますし、子供の将来においても悪い結果になるとは思えません。

- ⑤ (一) 創立 昭和五十五年十二月二十一日

(二) 会員 一年 二十名、二年 三十四名、三年 三十九名、四年 三十六名、五年 三十七名、六年 三十五名、女子部 三十八名、合計二百三十九名

(三) 学校

(四) 実績

昭和六十年 準市民大会準優勝（L）
昭和六十二年 スポ少大会優勝（LL）
昭和六十二年 スポ少大会優勝（SL）
昭和五十九年 国際ちびっ子準優勝（SL）
昭和六十一年 国際ちびっ子優勝（LL）
昭和六十二年 キリンカップ優勝（LL）
昭和六十二年 キリンカップ準優勝（SL）
その他

です。筋力トレーニングによる体力作りや反復練習による技術の習得は、子供達にとって決して楽しみなものではありません。子供の集中力が最も充実している時間に、彼らが一番興味をもつゲームを通じて、自分の身体で、自然に技術や戦術を身につけるのが最良と考えます。また、上手な選手のプレーを見て、それを自分達のゲームの中で真似をすることも必要だと思います。私は、練習試合だという考え方を基本に、あらゆる練習に「ゲーム性を持たせる」ことも必要だと思います。

- ② 我が国は多くのスポーツが楽しまれている国は、ないと思います。しかし、その中で最も自分が興味を持つものは、一つしかありません。自分が好きだと思ふものに全力を傾注するのが当然のことです。練習の中に他のスポーツの面白い部分を取り入れるのは良いでしょうが、多くの種目を経験させるというのは「子供の集中力を養う」という面で歓迎されることではないと思います。

- ③ チームがあり、試合があつて勝ち負けがきまるとすれば「勝ちたい」のは、当然だと思います。しかし、勝つことがチームの全てであつた場合、選手は、そのチームが勝つためへの努力だけを強いられます。そこに育つのは、そのチームでしか通用しない選手ではないでしょうか。少くとも少年スポーツの指導者は、子供の個性を無視したチーム作りはさけるべきだと思います。子供を指導者の好みにあつた選手に育てるのではなくて、指導者は、子供達の個性を総合して何ができるかを考えることだと思います。全国高校サッカー選手権大会には多くのすばらしいチームが参加します。しかし、チームの数に比例して良い選手が出てはいないように思います。私には、指導者があまりに選手をいじりすぎるのが原因のように思えてなりません。自分のチーム用に完成されてしまった選手は、他の指導者にとってはそれほど魅力を感じないのではないのでしょうか。

選手の個性を大切に、将来に多くの可能性を残した選手の育成を心がけ



富士見丘SC

斉藤

勇

私たちはキッカーズ二十周年、おめでとうございます。

少年サッカーにたずさわる一人として、お喜び申し上げ、永年の努力をしてきた関係の方々に敬意を表する次第です。

少年サッカーについて語る。夢中になってボールを追いかけるサッカー少年のように胸がはずみ、夢中にくれる。これが私にとってのサッカーである。

少年サッカーは、東京オリンピック以後、急速に伸び発展してきた。チームの増加による底辺の拡大をもたらした。以後、少年サッカーが盛んになり、レベルアップをしてきた経緯については、まちがいないように思われる。一方においては、少年大会の数や規模が拡大の一途をたどり、優勝を目指したばかりに、少年たちに過重になる練習法や体罰的な行為をもつてして選手を発奮させる練習光景が見られるようになった。

さて、このことから近年、ますます盛んになってきた少年サッカーにおいて、果してよりよい方向に進んでいるだろうか。コーチとして寒心の思いがしてならない。

- ① 自チーム（三年から六年生まで）においては、当然のことだが六年生を中心としたゲームが数が多いことには、まちがいない。ある面では、やむを得ない面がある。問題は、量と質の関係であり、発達段階と指導過程とを十分に配慮しながらコーチできるかが重視される。

自チームのある年度の三、四年で、試合数が多かったために、高学年になって全く振わずチーム作りが根本的にまちがって指導したことがあった。

例年は、低学年でサッカーを好きにさせるために、ふんだんにゲームを取り入れ、サッカーは、楽しいという雰囲気作りをしてきた。

技術面では、ボール慣れという初歩的な技を習得するのに留め、ミニゲームを主としてきた。もちろん、ゲームというのは、紅白ゲームのごとである。

さて、その年度のチームのことだが、チームに勢いがあって、めずらしく低学年で強かったのも、他のチームがよく試合を申し込んできた。やれば、大体勝てたので、異常なほど試合が多くなってしまった。ところが、学年がすすむにつれて、けが人が続出してきて、その上に致命的なボールコントロールができない欠点をさらけ出してしまった。基礎的な練習を長い間かけて練習をしてこなかったこと、子供の体力以上に試合をこなしてきたため、慢性疲労におちいり、ひざの成長痛をはじめ、関節に痛みを訴える子があらわれてきたこと、二年後にやり過ぎたそのつけがまわってきたよい例であった。コーチは適時性（タイミング）が大切であると改めて感じている。

② 結論から言えば、サッカーを少年たちにやって欲しい。

理由は二つ。サッカーでの活動は、全身運動であり、全身を使って様々な運動能力を育てるから。他は、学校教育に委ねればよい。

理由のその二は、サッカーは残念ながら、まだマイナースポーツである。学習塾やおけいこ塾、あるいは他のスポーツ少年団で活動するよりは、一人でも多くの少年にサッカーをやらせたい。

子供時代に様々なものを体験させ、その子に合ったものを発見したり、能力を見出していくことには、異存はないが、現在の社会の環境においては、あまりにも金銭的な臭いがし、また、モザイク作りから人間が形成されていくような風潮であることを察するとき素朴なサッカーをさせていく方がよいと考えている。

法は見つかっていない。

② 我チームは悲しいかなサラリーマンが指導するチームで教育者とか、スポーツ医学に精通している人とか、輝かしい選手生活をおくった人などないため、それらのテーマについて話しあったことはない。

外国のスキーヤーがサッカーをやるようにサッカーのない時、水泳、スキー、スケートなどやった方がよいかもしれない。ただチームが指導して、他のスポーツをやらせるべきか、その時の指導は、どうするかなどの課題も多い。

サッカークラブの母親が「子供は多面的な要求があるのだから、サッカーだけでなく他のものもやらせるべきだ」といって練習を休んでいたが、結局やめていったケースがあった。

③ 程度問題であるが、基本的には賛成である。チーム全体がどう考えるか、どんな練習のぞましいか、格闘技にむき、ふむきの分類など、今だからやってやったことがないが問題点としては存在している。

④ この部分で楽しくのびのびさせ、どの部分で躓や心の鍛練をするかであり、コーチの人間性、クラブ全体の運営と大きく関連している。

我がクラブでは技術指導、躓など含めコーチまかせであり、最低限の躓、人に迷惑をかけないことなどおしえている。と同時に長い時間少年と生活している両親に日常生活の中での対応を要望している。

⑤ (一) 創立年月 昭和四十七年一月（十六年四ヶ月）

(二) 現在の学年別会員数

一・二年 十二名、三年 十三名、四年 十五名、五年 十五名、六年 二十名、計 七十五名。

※今までで一番少い。

(三) 会員の所属する小学校 四校

主に団地から移転したが、なお通っている。

紙面の都合で、他の課題については、記すことができないのが非常に残念です。

一つだけ追記すれば、わがチームでは、「いつも少年らしく、伸び伸びサッカーを目指そう」が目標である。

反面、東京代表をねらえる強いチームを作りたい。かたや一人でも多くの子にサッカーを。そのためには楽しみながらのサッカーを。代表チームを作るには、きびしいサッカーを。我がチーム作りにおいては、毎年、このことが交錯していて、ある矛盾を感じ悩みながらチーム作りをしているのが現状です。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

浜見平ジュニアSC

広瀬

法

① 強いチームをのぞむか、楽しむだけでよいのか永遠の課題であり、現在までたんに勝つだけを求めたり、楽しむだけでよいとした設定はしていない。

練習および試合は、各コーチにまかされている。試合が多いために練習（基本）ができないあるいはやれないといった状況は、でていない。コーチは、練習と試合のバランスを考えて行っている。

茅ヶ崎は、神奈川の中でもそれ程強くなく、レベルも高くないので、試合をやるとすれば市外の違ったチームカラーを考えると考える。昨年の六年生は、練習以外に一〇五試合をこなしている。少年を選定せずにクラブに入れて、会費も安く、コーチも無料で、グラウンドもせまい所でやっている現状で、時として勝たねばならぬ時、日常的にどうすればよいのか、まだよい解決方

四 大会優勝などの実績

神奈川県大会

昭和六十二年度夏優勝、昭和六十二年冬準優勝、それまで準優勝一回、三位一回。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「現在の少年サッカーを観て」

日産SS

野地芳生
樋口靖洋

サッカースクールを開校して、今年で四年目に入り、日産らしさというものが、できつつあるのではないかと考えております。

選抜クラスを創設し、大会に参加するようになった頃、選手の父兄から「他のチームは、整列してグラウンドや本部に挨拶するのに、どうしてしないのか」とよく聞かれました。私は「本部の御世話になる方々には、各自で挨拶をすべきですが、グラウンドは道場ではありませんから、する必要はないと思っています」と答えてきました。

日本のスポーツ界は、現在に至るまで学校を中心に成長してきました。学校教育の枠の中の部活動には、本来のスポーツの楽しさを見失ってしまうほどの、いろいろな制約で形作られている場合が少なくありません。その日本的一般のスポーツ観を、小学生の年代にも持ち込むことが「しつけ」や「心の鍛練」に必要であると考えたら、純粹で、無限の可能性を持っている子供達を、画一的で自主性の少ない大人として、育ててしまうのではないのでしょうか。

① より多くの試合に参加させてあげたい。駒林サッカークラブは、各学年単位にチームを編成しております。その数、それぞれ三十名前後。二チーム強の子供をいかに楽しく練習・試合をさせてあげるか、これに頭を悩ませます。サッカーはゲームを楽しむスポーツです。ゲームができるようになるために、基本的な練習をします。その練習を土曜日に行います。そして日曜日、多くは遠征して試合を組みます。学年単位で、また二学年一緒に、それでも一人の子供がゲームをやるのは三試合位です。そのゲームの中から、その子供の良さ、欠点を我々は見つけます。そして土曜日、補うために練習します。土日が活動日のクラブに通う子供たちにとって、それ程の忙がしさは感じていないようです。

② もちろん他のスポーツ経験も大切だ。駒林はサッカークラブです。スポーツ少年団として他のスポーツもやってあげたいが、土日の活動日に時間的余裕がありません。狭いグラウンドで、短時間のサッカーメニュー、子供たちには、クラブにきた時はサッカーを一生懸命やろうと約束しております。平日、子供たちはいろいろなスポーツで遊んでいます。

③ 「燃えつき」る程やる子が少なくなった。駒林では学年に応じた指導課程をモットーに指導しております。そこで燃えているのは大人であるコーチであり、以前のように子供ともどもという姿は少なくなりました。

④ 「しつけ」は大切にしております。スポーツ少年団である以上、スポーツの綱領にある「ルールを守り、他人に迷惑をかけず、進んで奉仕し、りっぱな社会人になります」を子供たちに団体競技であるサッカーを通して教えております。遠征時の往復の電車・バスの中、グラウンドでの様子等を我々は大切にしております。合宿などの時、一切親と離して、全体の中でやっていたいことを特別指導することもあります。

⑤ 一九七四（四十九）年十二月二十九日創立、一年 二三名、二年 二七名、三年 三三名、四年 三一名、五年 二五名、六年 三二名、合計一七〇名

時の試合は強烈な印象として、今でも残っています。初対戦はG Pが辛くも2対0で勝たせていただき優勝（七勝一分）、二位たちばな（七勝一敗）という結果でした。以来「たちばな」は忘れられない存在となりました。そして、ライバルチームとして常に注目してきました。個人技を大切にしたい力強いサッカーは、サッカー経験のない私にとって大変参考になり勉強させていだいたものです。

二十年と一口に言いますが、いろいろな苦労があったことと思います。曾田監督の人柄、サッカーに対する情熱、子供を思う心の賜ではないかと敬服いたします。これを機にたちばなが益々発展されることを期待します。

さて、「少年サッカーの在り方」のアンケートについてですが、日頃感じている指導者の役割を思いつくままに述べていただくと感じ取っていただければと思います。

へ指導者の役割へ

子供達に夢を持たせることが指導のスタートであると思います。それは、サッカーそのものに賭ける夢であり、生きがいのある人生を送るための将来に向っての夢です。次に、その夢を実現させるためにはどうするのか、何をしたら良いのかというところへの関わりが、指導者としての役割であろうと思います。サッカーの技術、戦術の向上、スピード、体力作りは夢実現のための一つの方法だと押さえています。

自分を鍛えるのは監督・コーチではなく、自分自身であるという自覚をさせ、いかに努力させていくかが大きなポイントだと思っています。

指導者は常に新しい指導法を考え、その年その年に賭ける情熱を奮い起こさねばなりません。毎年同じような強化法、同じような練習試合、遠征を繰り返したところで、前年よりも進歩はないと、少しでも前進するチーム、クラブ作りを目標としてG Pは取り組んではいるつもりですが……。なかなか思うようにはいきませんね。

駒林小を中心に近隣十校から集ってきている。

一九八七（昭六十二）年度の成績

春のスポ少大会 SLの部（二年）優勝、LLの部（四年）準優勝

こどもの国キリンカップ大会 低学年の部（二年）優勝

秋の国際チビッ子大会 SLの部（二年）準優勝、LL1部（四年）優勝

優勝

冬の県選手権大会 低学年の部（四年）優勝

今後とも、弟分の駒林サッカークラブをよろしくご指導ご鞭撻くださいますようお願い申し上げます。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

おめでとう二十周年

G P

小 俣 基 行

たちばなキッカーズ創立二十周年おめでとうございます。

たちはなとの初対戦は、もう十六年前になるでしょうか……。昭和四十七年十一月のことです。当時、厚木地区にはサッカーチームは無く、ぜひ試合がしたい、大会に出場したいと横浜リーグ戦への出場をお願いいたしました。そして、三ツ沢会館での会議に参加させていただきました。そこで、曾田監督に初めてお会いしましたことをなつかしく思い出します。G P創立二年目の年のことです。

大会出場チームのたちはな・つばめ・山王谷・本郷・東希望ヶ丘・YMC A・セントジョセフ・サントスの中で、たちはなが一番の強敵でした。あの

サッカー指導の中で一番の目標であり課題としているのが「創造力」「判断力」の育成です。サッカー指導でオーバークーシングで指導過多となれば、自主性、主体性を育てる場がなくなってしまう創造性どころではありません。だから、指導者は子供の創意工夫、つまり自発性を育てるようなアドバイザーでなければならぬと考えます。

指導の中で、とくに力を入れたことに「意志」のトレーニングもあります。指導者が集中力・やる気・意欲を育てようとする気持ちで常に子供達に向かうことが、その出発にあり大きなことと思ひ常々練習に臨んでいます。そして、とくに高学年の子には、意志のトレーニングの適期（徹底しておかなければならない年令）と考え厳しい要求もしています。

へG P紹介へ

ゴルフランタースサッカークラブは昭和四十六年に誕生、今年で十八年目を迎えます。団員は小学一年生から六年生まで百三十名です。創立時は緑ヶ丘小学校の子供だけでしたが、現在は四・五校から集ってきています。

全日本チャンピオンズカップ優勝・全国大会出場三回・都市対抗三連覇と先輩達の作った輝かしい記録の上に新しい伝統を作ろうと今年もがんばっています。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

勝 田 S C

佐々木 栄五郎

① 試合数は多くてもかまわないと思うが、きびしい試合はない方がよい。いま過密といってもよい程に公式戦が多いが、問題はないだろうか。公式戦の場合は、コーチ、子供たち、御父母、三者揃って一つでも多く勝ち進

んで「優勝」と、勝つことを最優先する。従ってベンチをあたためているのがいつでも同じ子供たちですが、他チームとの親善試合ともなれば上手も下手もこぞって試合に参加させることができる。その時の子供たちのうれしそうな顔もみられコーチにとってもうれしいことです。

子供たちに正しい基本を身につけさせるには、まず指導者自身が正しい基本をマスターしていなければならない。私たちがみていてうまくいっても基本ができていないと言われることもありますので、単に基本といっても大変むづかしいことだと思ふ。

いったん、野球の岡岡さんの守備の基本を偶然にみることでできたが、単純なことであっても基本とはそういうものか改めて基本のむづかしさを教えられた。

身のこなし、独創性なども子供たちのセンスもあり、画一的には定められない。試合に出してもらって、そこから身につくものではないだろうか。子供たちの将来を考えるなら少年時代から自分の好きな形にしない方がよいと思う。何故なら私共はクラブといっても小学校六年生までで、それから先は中学・高校・大学と各々指導者が変わって行く。自分がよいと思っても次の指導者は好きでないかも知れない。

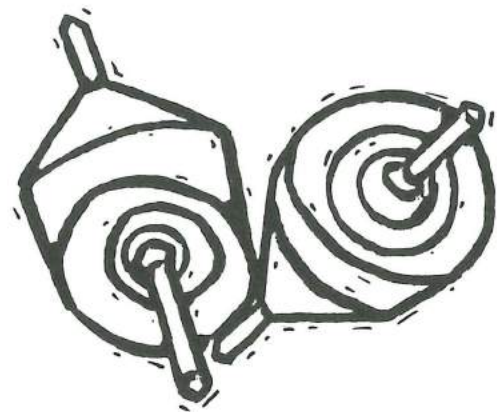
スポーツ少年団の理念に「一、平和への二つの道」から始って、「五、時代の要求と新しい少年像」まで約十五頁に亘ってスポーツとは何か、スポーツの遊び、スポーツと友情、スポーツの中のルール等々述べられています。勝つことにこしたことはないと思いますが、それだけが目的ではなく、いかにして次代の青年を育成するかということが述べられている。

② 少年時代は他のスポーツも大いにやった方がよいと思うが、御同様に私も休日にはサッカーしかやっておりません。単一クラブで多種目を指導することは困難だと思う。

③ 燃えつき現象はいろんなところできますが、受験戦争と関係はないだ

ろうか、野球の場合も甲子園で燃えつき、プロへ入るのも一握り、更に一軍で試合に出れるのも一握りですから、深く追求すると何もできなくなってしまうでしょう。

④ クラブとして行なわなければならないものに団体生活のなかのしつけがあるのではないだろうか。例えば××チームの子供や○○チームの子供が、良いマナーで見られた場合はよいが(余りないが)、悪いことであった場合は、指導者として恥ずかしいことです。



「たちはなOB座談会」 後輩のそのむスタイルは「自由なサッカー」

たちはなのOBで現在、大学・企業で活躍されているの中から次の方を選び大いに語ってもらいました。

出席者

笠松 文雄 (司会)

四期 たちはな↓日吉台中↓旭高↓横浜市大↓ワールド

旭高時代は中心選手として、昭和五十二年(高二)、昭和五十三年(高三)のインターハイに連続出場。全国ベスト8まで進出、現在の旭高の基礎をきずく。ポジションはMF。

増山 高広

十一期 たちはな↓日吉台中↓寛政高↓東邦チタニウム(日本リーグ二部)

昭和五十九年・高校二年のとき横浜高校選抜FWとして中国遠征。小中高を通じ俊足FWとして各チームからマークされる。

末山 靖

十一期

たちはな↓日吉台中↓旭高↓東農大昭和五十九年・高校二年で神奈川県代表に選ばれ、MF・DFとして奈良国体に出場し、全国優勝。旭高では状況判断抜群のMFとして注目される。

村上 晋也

十二期

たちはな↓桐陰中↓桐陰高↓慶應大中学・高校時代は強力チームではなかったため目立った実績はないが、攻撃的MFとして頭腦的プレーが光る。慶大のホープ。

曾田 弘治

たちはなキッカーズ監督。

笠松 今日忙しいところを皆さんお集まりいただきましてありがとうございます。ちばなの二十周年ということで、OBとしての我々にもいろいろな感慨があるわけで、そのあたりをいろいろ話してもらいたいと思っています。最初は皆の自己紹介からやりたいと思いますが、とりあえず僕からゆきます。

僕は遅い方だと思うんですが五年の時にちばなに入り、キャプテンもやらせてもらいましたので非常に恵まれていた方だと思います。日吉台中学に進んでサッカーをやりました。旭高校でもやりました。今はワールドという会社、非常に忙しい会社なんです。そこで経理をやっている、入社して六年目になります。サッカーをやっていた人間が非常に多くて、今も自分達のサッカークラブをつくってやっています。たいして強くないのですがずっとこれからはサッカーを続けてゆきたいと思っています。

末山 僕は小学校の四年の頃から賢ちゃん（大場賢治）とか、ここにいる増山君などと一緒だったせいか、つられてというか、サッカーに興味をひかれてちばなに入ったわけです。ちばなの比較的強かった時代にいられたということが自分にとって光栄というか、よかったなあと思っています。そのあと日吉台西に進んで、そこでも県大会で優勝したりして、好運だったと思います。それから旭高校に進んで、全国大会には決勝で敗れられなかったけ

れど、実力的には一番といわれた時期で、小中高とすべてめぐまれた時代にいられたことは本当に幸せだと思っています。今は東京農大でまだレギュラーではないんですがあと二年間ありますから、これから精一杯頑張ってレギュラーを取りたいと思っています。

増山 ちばなに入ったのは三年の時、親は反對したんですけど、泣き泣き頼んで入れてもらったことを覚えてます。いろんなタイトルも取りましたけど一番の思い出というのは、全国まではいけなかったんですが、関東大会で優勝したことで、それが一番嬉しかったですね。日吉台西中の時代も強かったのですが残念ながら全国大会にはゆけなくて、それでもいろいろやれてよかったと思います。高校は寛政高校という新設校でサッカーは全然強くなかったんですが、自分の力で何とか強しようという心構えではいって、そこそこの成績を残せたので自分では満足しています。今は東邦チタニウムという日本リーグの二部にいる会社でやっているんですが、なかなか認めてもらえないのが悩みです。まあサッカーは好きなのでいずれにしても続けてゆきたいとは思っています。

村上 僕は兄貴（村上祐也・十期）とか賢ちゃんとか、本間さん（本間真一郎・十期）とかがサッカーをやっていたので影響されて、下田小で遊んでいるうちにいつの間にか入ってみたい感覚で、結

局幼稚園の頃からやってたんですね。四年の時にキャプテンやって、新人戦の時に受験をしようということをやめちゃったんです。それがまず一番の何というか……。でも中途半端にやりたくなかったんで……。ちばなでの一番の思い出は、全日本の県大会の決勝で負けたくらい思い出ですね。

◆背番号でうらんだことも

村上 当時皆がやたらに気にしていたのに背番号というのがあって、僕はまずLの時に四十五番がはしくて、まず四十五番をとったんですよ。Lにいた時は九番が欲しかったけど十一番やれといわれてすごくショックで、曾田さんをちょっとうらんだりして……。笑。そして中学は桐蔭中学、高校も同じとこでしたけどその時は納得できるほどサッカーがやれなくて、今は慶応大学のサッカー部にいます。慶応にはいって、まわりからもいい選手がはいってきて、やっと何か面白い味が出てきたなって感じがしています。

曾田 えーと、その十一番をやったということの弁解をさせてもらいたいですよ。

村上 兄貴は十一番だったんですね。

曾田 あーそうそう。兄貴と同じ番号というのは新鮮味がなかったかもしれないけど、晋也のプレーは左のキックが素晴らしくて、左からの攻めが非常に

特徴があった。あの当時、左で十一番という選手の代表が杉山で、その活躍がめざましかったから、僕

も十一番にこだわっていたんだよね。だから晋也にも十一番をつけて活躍してもらいたい、という気持ちがあったんだね。でも子供の背番号にたいする憧れというようなものにはたいする配慮はちょっと欠けていたかも知れない。それだけ言っておこう。（笑い）

末山 僕は四年の時に遅くはあったので七十三番、五年の時が十三番で、六年の時も十三番でした。

曾田 それもちょっと弁解させてもらいたい。

（笑い） 当時の背番号はスポーツ店でピシッと貼りつけたもので、一度はがすと次につけるのが非常に大変だった。だから五年と六年で番号を変えるのは大変だし、愛着のある番号をそのまま使う方が良くということもあってなるべく変えないようにしていた。君の場合はたまたま十三でまだ良かった。当時のミュンヘンのワールドカップで優勝した西ドイツの得点王がゲルト・ミュラーで背番号が十三番だった。君にそういう選手になってもらいたいという気持ちもあったんだよね。でもその後背番号についていろいろ苦情が多かったもので、その年度毎に一番ふさわしい背番号に変えることにしたんだよね。

増山 僕は始めた時九十番で、当時長嶋が巨人の監督になって九十番つけてたので、他のチームの連中から「長嶋、長嶋」っていわれた覚えがあるんですよ。そのあとが八番。やっぱりあの高学年用の

ユニフォーム、あれをもらう時が一番嬉しかったですね。

笠松 僕らの時はユニフォームが一枚しかなくて、よく話に出るんだけど、アクリル百パーセントで全く汗を吸わなくて、夏も長袖だったしね。今は背番号を決めてユニフォームの授与式があるけど僕達の時はなかった。僕が八番になったのは、入った時三番と四番と八番がいていけるけどどれがいいかっていわれて、自分としてはフォワードをやりたいからだったので、じゃあ八番っていうような感じで決まった。（笑い）

◆自由なプレーがスタイル

曾田 少しちばなの現況を話すと、人数は去年が最高で百六十数名、それでもあざみ野よりはるかに少ない。このあたりは子供の数がだんだん少なくなって、ちばなも今年は百二十数名にガクッと減った。ちょっと少ない気もするし、サッカーがやりたくてしょうがない子供ばかりというわけでもない。で、強いチームをつくるというのがなかなかむずかしい。君達の時代のようにはいかないってことだ。でも今年のチームはなかなかチームワークが良くて、新人戦の時はまったく駄目だったけれど、お別れ試合では卒業生と互角になり、春のスポ少大会ではベスト十六、最近始まった全日本の予

選でも勝ち進んでいて、なかなかいい勝ち方ができるようになってきた。

笠松 今のチームの話があったんですが、皆の時代のサッカーのスタイルはどんなだったか話してもらいたいんですが。

村上 僕達の時は曾田さんが、一とか三とかサインを出していたでしょう。一の時はパスをまわせとか。

曾田 そんなことやってたかなあ。

末山 やってたやってた。（笑い）

村上 三本指したらもう自由にドリブルして好きなようにやれみたいな。

曾田 出したっけなあ？ それじゃ一時期やってたのかも。

増山 何にも記憶ないなあ、何か感じがいいじゃないの。

曾田 あの当時はいろんな新しいことを、その場で思いついたことをよく君達にやらせたからね、やってたかも知れないね。

村上 僕の代はあまり勝ちませんでしたけど、いつも上の代に入って最年少でやって、タイトルはずいぶんとりましたよね。ライバルはいつも東とか山王谷とか村岡などだね。僕達の時は学校が終わると自然と下田小のグラウンドに集まるんですよ。陽がくれるまで皆でずーっとゲームをやって、その後が一番強くなったと思います。ちばなはシュート練習

がすぐ下手で、他のチームからこんなチーム弱いだろうと思われるんだけど、ゲームになると、ほんと皆自分の持味出して、ドリブルしたいやつは好きのようにドリブルするし、高ちゃん（増山）みたいに足の早いのはタッタターといくし、僕とか末山さんはチョコチョコとドリブルとか、本当に好きなようにやらしてもらいましたね。だから別にスタイルっていうスタイルはなかったですね。

増山 やっぱり僕なんかは、縦に蹴ってもらったボールを足を活かして持ってゆく、もうこれしかなかったですね。あとはキーパーと一対一で点を入れるような感じで…。

村上 中盤は末山さんから僕にきて、僕が高ちゃんか賢ちゃんに出て、バシッと入れるんだよね。

末山 中盤もバックもそれなりの技をもってたし、抜け目がないというか、そういうチームでした。

曾田 要するにスタイルというより、好きなようにやっていたという方が…。

笠松 僕なんかの時は、バック三人、ハーフ三人、フォワード四人という形でしたけど、今もそうですか。

曾田 LSではそんな形でやってもかも知れないが、LSの場合は僕は三・三・三という配置にして、一人をリベロという形で好きなようにやらせている。

笠松 僕のことをいわせてもらえば、やり始めたのが遅かったこともあって、まずテクニックという

ようなものはなかったですね。フォワードに僕と小管という百六十センチぐらいあるやつが居て、キックアンドラッシュという戦法が全盛でした。それでもやはり自由にやらせてもらったというのがたばなの一番いいところじゃなかったかと僕は今でも思っていますね。

◆ 合宿の思い出

末山 僕はちばなの一番の思い出といったら、やっぱりあの全国大会の県予選の決勝で浜見にPKで負けた時、最後にトントン（岩村君）だっけ、蹴る時に、下向いて目をつぶってシュートが見られなかったっていうのが、一生忘れられないでしょうね。

曾田 まあその前の年も、いずみで0対1でやぶれたから、本当にくやしなかったろうね。

笠松 僕の頃は合宿もなかったんですよ。僕の次から島根県の大社に行ったんですよ。

曾田 その後はずっと富士緑の休暇村だね。

末山 合宿は修学旅行なんかよりもっと気の合う友達が多かったからね、夜も寝ないで遊んだっていうか、そういう思い出がありますね。それとキャンプファイヤーでしたね、面白かったのは。

村上 僕は一番印象に残っているのは、最終日にやった部屋別対抗の試合ですね。六年生から四年生までが縦割りになって部屋別になってましたから、

その日までは仲良くしてるんだけど、試合になったとたん、皆文句の言い放題になって、五年の時に末山さんと同じ部屋だったんですけど勝てなくて、二人ともカリカリきて、もういいかげんにしろとか下級生にカッコ言うって、結局優勝してまた仲良くなっちゃたりして。（笑い）

笠松 僕の時合宿はなかったけれど、丁度ちばな杯というのがあった時で、やはり学年の縦割りチームをつくりまして、エキサイトしましたね。確かホワイトとかいう名前一回目は優勝した記憶があります。

曾田 その前は多分通学区で分けてね、北下田とか、中下田とか、公団とかね。

笠松 ちばなの合宿には大学の時にコーチとして参加したけれど、やっぱりいいなと思いましたが。子供達の性格が一目で見られるし、普段見れない面もわかるんですよ。それに連帯意識も出てくるし。逆に曾田さんの方には苦労が多いと思いますけど。

曾田 合宿の時にはね、普段練習している時には感じられないことがよくわかるんだよね。あれっこの子にはこういう面があったのかというね、驚いた感じがしたりすることが結構あるわけね。だから合宿っていうのは子供にとってはもとより、指導者にとっても大変意義があるんだね。

◆ 嬉しかったこと、くやしかったこと

村上 最近で一番サッカーやってよかったなあと思ったのは、去年の大学の関東選手権で、早稲田と延長をやって最後PK合戦で勝った時で、なんか皆素直に「ワァー勝った勝った」と喜んでんだ。皆一緒にの気持ちだったと思うんですけど、サッカーしてて良かったなあって、皆で泣いちゃったみたいなのが一番思い出に残っています。

増山 僕はやっぱり高校の時ですね。小中と上のレベルでやってきて高校に入ったら全く弱いんですよ。こんなチームじゃサッカーやりたくないな、やめようかなと思ったんですけど、いろいろ考えてこのチームを自分でどれだけ強くできるかっていうチャレンジ精神みたいなものでやって、最後は県で十六校に入るまでになった。これは自分の自信にもなったし、まあ確かに自分のプレーは向上しなかったんですけど、それだけのチームになったことが自分では嬉しいというかよかったなと思いますね。

曾田 寛政高校のようなところから東邦チタニウムのサッカー部に入ったんだから立派なもんだね。

末山 僕は自分で言うのもなんだけど、高校一年の冬から高校二年の夏にかけてが一番サッカーがうまくなった時期だと思うんですよ。二年の時に神奈川県代表に選ばれ、奈良の国体で、半分位しか出られなかったけど、優勝できたっていうのは嬉しか

ったなあ。くやしかったのは高校三年の時、勝てるといわれていた県鎌（県立鎌倉高校）に決勝でPK戦で負けた時、僕もPKは少しちゃったんですけどくやしくて、世話になった監督さんにも申し訳なくて…。

笠松 僕もさっき言ったけどPKは少ししてね、決勝で。どうもちばな出身者はPKだめだね。

曾田 なんか責任を感じるなあ。（笑い）

笠松 やはり思い出の中では高校時代は強かったっていうのがあるんですけど、PKは少しして負けた時、サッカーの試合で初めて泣いたんです。三年生で一人だけはずしただけっていうのもあったけど、とても涙が出てきて声をあげるような感じで泣いちゃいましたからね。いい思い出も結構あるんですけど…。

◆ サッカーで得たもの

増山 サッカーで得たものっていったら、やっぱり他のチームでいろいろな友達が出来たってことだと思う。

笠松 僕もね、小学生の時の市の大会で三ツ沢に集まった時などに、つばめなんかも来るわけよ。お外で友達が多くなって、友達意識っていうか、学校以外で友達がいたっていうのがよかったと思いますけど。会社の後輩でも広島でサッカーやってた

のがいて、そいつと話すワールドカップなんかの話になって共通の話題がありますから、サッカーに限らないと思うけどいいですね。

末山 今は東京農大でやってるけど、マネージャーが決めた練習のメニューをこなすというか、何か情性でやっているようなところがある。小学校や中学、高校のときはそういう感じじゃなくて、練習が終わったら、今日は練習やったっていう充実感があるんですけど。これだけ熱中してスポーツをやっている人間にしかわからないような充実感が得られる。そういう普通の人は違う人生の歩み方っていうのができたのが自分にとって光栄だと思います。

村上 僕が得たって一番感じるのは友達ですね。同じスポーツをやっている同士のつながりみたいなものがすごく良くて、いろんな地方へ行っても考えられることは一緒だみたいなことですね。でも、まずサッカーをすることが中心になって生活が動いているようなところがあるので、別に得るとかいうよりも、サッカー自体が生活のような感じで…。

曾田 空気がいいもんだね。

笠松 皆にはわからないかも知れないけど、会社で勤めていると、人間関係とか、精神的プレッシャーとかいろいろあって苦しい時もあるわけね。高校の時の先生がよく言ってたんだけど「自分が苦しい時は相手も苦しいんだ。そういう時に頑張るやつが勝つんだ」って。だからやっぱり自分がつらい時

こそ頑張らなければいけない、それを逃げてしまったりしたらおしまいだから。そういうことをサッカーを通じて教えられたっていうか、自分の生きてゆく上での指標というか、基本みたいなものにしていきたいと思っています。

◆大学のサッカー社会人のサッカー

笠松 話は少し変わるけど、よく大学のサッカーは面白くないっていわれるけど、高校であんなに盛り上がるのにどうしてなんだろう。

末山 むずかしいなあ。小学校と高校はね、曾田さんと伊藤監督が僕が思うにいい指導者だったと思うんですよ。他はよく知りませんが今の大学の指導者は忙しいせいとか、たまにしか練習や試合に顔を出さないとか、そういうことが大学サッカーの低迷している原因のひとつかもしれないね。

笠松 さっきマネージャーがつくった練習メニューをこなすという話があったけど…。

末山 毎年やる決まっています。試合前はこうとか、それ以外の時は走り込んであと決まったメニューをこなすっていう感じですね。

村上 慶応っていうのは監督とかスタッフが全部サラリーマンで週末しかこないんですが、グラウンドマネージャーという学生監督みたいのがいて、監督と連絡をとって練習メニューなんかを決めているん

です。他の大学のことはわかりませんが、僕が思うには結構熱心にやっていると思う。他と較べて選手の層は薄いし、名前の知れてる選手も少ないんですがそれをうめてゆくのに一対一では負けても、三対三とか四対四では負けないサッカーにしようとしてるんです。それがやっとなんかいい結果に結びついたと思うんですけど、ただよく日産とか日本リーグの住金とか試合をするんですけど、向こうはプロだからしょうがないんですけど体制が全然ちがうなと思います。トレーニングとか自己管理とかの面があるっていうか、きびしさがないという…。試合なんかやってもアピールするし、気迫とかが違っていて、全然目指しているものが違うっていう気がしますね。

◆何故サッカーを続けているか
笠松 ところで皆何で今もサッカーを続けているんだろう。
末山 何でといわれると困るし、自分でもはっきりとはわからないんだけど、やっぱり何よりもサッカーが一番好きだから続けているんでしょね。
曾田 高ちゃんも不平はいっぱいあるけどやめられない…。
増山 いままで費した時間が一番長いから、やっぱりどうしてもやりたくなっちゃうんじゃないですかね。
村上 時々何でこんなにサッカーばかりやってるんだろうとか、他にやりたいことが一杯あるとか思うんですけど、長期オフがあったりして他のことしてるとやっぱりボール蹴りたくなっちゃうんですよ。考えてみると結局好きだからって…。

笠松 昔は大学も強かったですよ。
曾田 中央も早稲田も日本リーグのチームを相手に天皇杯をとったことがあったしね。今弱くなったのは大学に行く選手の心構えとか意気込みというのが当時と違うということかね。指導者の問題とか…。

増山 今社会人は強いっていう話が出たけど、社会人のレベルにもいろいろあると思います。ただパワーみたいのは確かに違いますね。

やないかと思うんですね。アメフトや野球のように分業じゃないし、一つの流れがあって、一つのゴールがある。試合が均衡している時の一点というのがすごく嬉しくて皆で喜び合える、それが魅力ですね。会社のチームでもずっと続けてゆきたいし、自分でできなくなっても曾田さんのように指導者になって下を見てゆきたいと思っています。

曾田 確かにそうだね。他にもあるだろうけどサッカーは自分が出せるという点かね。
笠松 いくら監督にこうしろといわれても、やろうと思えば自分の好きなようにやれる。

曾田 そうできないチームは結局最後に負けてしまう。瞬間的に自分で判断できる選手のいるチームが勝ち残れるわけだね。

◆たちはなに望むこと

笠松 旭の伊藤先生もよく言うんだけど「たちはなからくる選手は型にはまってなくて非常に面白いって、やはりたちはなの良さは自由にやらせてきたというところがあったと思う。しかし最近昔ほどのいい成績はあがっていないようにだけど、だからといって勝つことだけにこだわるのどうかと思う。最後に皆から、たちはなという少年サッカーにどうか、望むことを一言ずつ。

村上 父がたちはなからのれん分けをしたチーム

を持っているんですが、とにかくまず自由にやらせて、そこで見つけた個性を伸ばして、サッカーの楽しさを教えてやるのが一番大事だと、そういうことを父と話しています。それとたちはなでは、どこに行っても誇りに思っていたことは、個人技だけは負けないということ。だから小学校時代は、セルジオとかああいうまい人を招いて、刺激を与えて皆でまねをして、個人技を中心にしてやれば上にいくに従っていい選手になると思う。
増山 僕も同じですけど、まずは伸び伸びやらしてあげるのが第一条件で、指導者は、その子の持っているいい所をひとつでも捜してあげられたらいいと思うんですけどね。まあ僕としては小学生ですからね、基礎だけはしっかりと自分のものにしてほしいですね。
末山 試合に勝つのも大事だけど、やっぱりサッカーの楽しさというか、ボールを蹴る楽しさを小学校の時に知ることですね。
笠松 サッカーは小学生時代は遊びが原点だと思うんですけどね。僕なんかも最初はボールがうまく蹴れなくて、それがインステップキックがピシッと決まった時の面白さが何ともいえないんですね。そういう面白さを遊びの中から引き出してゆくというのが大切だと思います。他のチームで監督にどなられてシュンとなっていたり、「集まれ」という掛け声でピシッと並んだり、丸坊主だったり、そういう

のはいやですね。たちはなは「集まれ」といってもダラダラしているところが昔からありますけど、規律を重視するというよりも、連帯感のようなものを大事にしているってほしいと思います。
曾田 そろそろ時間だけど、なるほどと思う話が沢山出て良かったと思う。最後の話は大事なことで、子供達が行儀が良いとか、整列がうまいとか、見た目にきれいなチームがあるよね。うちはそういう点は得意じゃなくて、私も八十点位にはなっていないと思うけど、でもその子らがいざ試合になると、ちゃんと自分のチームメイトのことを思って、一人が失敗したらカバーに行くとか、皆がシュンとしている時に一人ですごいファイトを出して皆を元気づけて試合をものにしたりとか、やることをちゃんとやるんだね。だから子供は体験を通じて充分いろんなことを学んでいるし、一生懸命やった結果が自分に返ってくるということもわかると思うんだけどね。それ以外は皆が言ったように、楽しくボールを蹴って、好きなことを思う存分やる。そういうサッカーを今後も続けさせたいと思っています。マナーの点はね、父母の方と連絡をとりながら協力してということが必要だね。サッカーのテクニックということでは、フェイントにしてもキックのやり方にしても、教えるというより、本人が好きで自分で考えて工夫するという方向に育てたい。なかなかむずかしいですが…。

笠松 皆も就職しても是非サッカーを続けてほしい。チームがなければたちばなで。

曾田 是非そう願いたい。私も年には勝てないの
で若手のコーチが育ってほしい。長年やっている
マンネリにもなるし、環境はととのえるから若手で
たちばなをいい方向に引っぱってほしい。

笠松 僕が思うに、たちばな出身者がコーチにな
ったら、監督なんか何もないわなくても、たちばな
の指導方針を受け継いでくれると思うんですね。と
いうことで今日は長い間ありがとうございました。

◆ 当日出席できなかった

次の方にインタビューして

小山さん（二期生、日本リーグ日立）

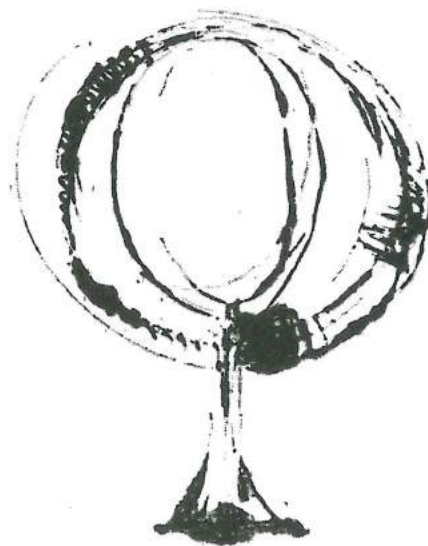
大場さん（一期生、日本リーグ日産）

小山 自分達の少年時代は試合がほとんどなく、
やりたいときに、やりたいことをやった。子ども時
代はボールになれることが大切。ボールが丸いこと
を理解する、足を出しただけでは（ボールは）止ま
らないことを知る、面白くなる、次の段階（対敵動
作等）へ進む・これでいい。

大場 少年時代はなれること、そのためのリフテ
イング・ドリブルそしてミニゲームを多く。自分達

のときは、好きなようにやらせてもらった。あれで
よかった。

（曾田記）



たちばなの指導方針

監督 曾田弘治

習うよりも会得する……

わがたちばなキッカーズの恒例の入会受付の
際に、よくこういう説明をしてきた。

「ここでは、音楽や習字などの、所謂お稽古
事を習うように、手とり足とりで教えるやり
方はとっておりません。むしろ、子ども達に
できるだけ自由にやらせ、遊ばせるという考
えかたです」と。これを聞いて、やや拍子抜
けといった顔をされるお母さんも多い。たし
かに、この程度の口頭説明では不十分だし、
また、指導方針にかかわる大切なことでもあ
るので、たちばなニュースの紙上を借りて、
スポーツクラブの在りかたや指導の実際につ
いて、思いつくまま述べ、ご理解の足しにし
たい。

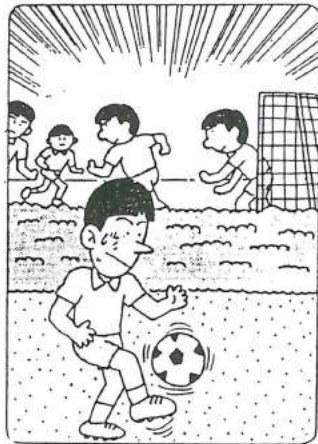
少年サッカークラブとしてスタートした十七
年前のころを振り返ってみると、サッカーを
楽しむために集まってきた少年達を、まとめ
一緒にボールを蹴り、試合に連れてゆくのが
仕事といえば仕事であつたし、当時から教え

本稿は、「たちばなニュース」に昭和六十年七月、
昭和六十二年四月まで連載されたものである。

る、教えられる関係とは縁遠かった。

下田小学校庭を根拠地として発生した「草野
球」ならぬ「草サッカー」チームがそのまま
大きくなり、年数を経て地域に根を下ろし、
卒業生の父母まで包容するほどになったわけ
で、その点、学校の先生が、自分が勤務する
学校の生徒を組織して作った、所謂「学校チ
ーム」の行き方とは対照的だと思う。（たち
ばなキッカーズ創立十五周年記念誌参照）

この間、日本スポーツ少年団にもいちはや
く加盟し、また、神奈川県サッカー協会少年



部への登録も早い。古顔チームのひとつであ
るが、サッカースクールに発展せず、少年達
が自分等でサッカーを楽しむ、みんながファ
イトを燃やす、草サッカーのチームカラーを
捨てないクラブといった方がいいであろうか。

こうして「たちばな」に定着したチームカ
ラーのもとを強いていえば、子ども達が、本
来、のびのびと過ごしたい日曜日に、長時間
ボールと過ごすわけであるから、型にはめる
指導ではなく、できるだけ楽しく、思い切り
発散できるスポーツ活動の場をつくる。こと
も達にとって、休日は貴重な自由時間である
から、鍛えるとか、ものを習得するとかいう
目的意識も、できれば捨てて、夢中で好きな
こと（サッカー）をやりながら、自然とサッ
カー技術も、サッカー以外のことも、自分で
会得するように仕向ける——ここでサッカー
以外というのは、子ども達でつくる「小社会」
ともいふべきもので、仲間意識や、どうして
も従わなければいけないきまりなどを含む人
間関係で、この関門を通過しながら自我を形
成してゆくと考える——これが指導方針で、
習うのではなく、会得するという考え方であ
る。

まずボールを足で さばく楽しさを!

スポーツの最大の効用は「心身の浄化」をもたらすことだと私は思っている。これは非常に感覚的、主観的なところを方で、スポーツと「心身の浄化」を結びつけて、或る人は純真な高校野球を思い起こすだろうし、別の人はマラソンのアベベを連想し、また別の人はゴルフ場で、緑に包まれて、無心にクラブを振る瞬間を思い浮かべるかもしれない。ただ、ここでは、「浄化」という言葉をあまり観念的にとらえないで、「最高にリラックスした状態で、スカッとする実感」として受け取っていただきたい。

こういう「実感」は何かのスポーツに没頭したことがある人なら、誰でも経験されていると思う。

さて、幼児期を脱した少年(少女)時代というのは、何にでも夢中になる時期だと思う。遊びでもスポーツでも、ゲームでも読書でもそのときに入ったことに夢中になる。そして興味が持続するようになる。(近頃は何に

たいしても関心を示さず、夢中になれず、しかも機械のように従順な子がいると聞くが、これは悲劇です!)

現在、ちびなキッカーズでは、小学一年生から入会を受理しているが、この時期は我々の経験からすると、また幼児性が残っており、移り気でサッカーに集中できず、すぐに砂遊びなど他のことに関心が移りやすい。従って指導者は、ボールへの興味を、いかにして長くつなぐかに苦心する。この段階では、ボールに足で触れるのが楽しくてしようがないという程になれば成功である。

ボールは丸くてほどよくはずむ。これを手でもてあそぶだけでも面白い。ましてや、手よりはるかに不器用な足でうまくさばけたらどんなに楽しいか(試しにお母さんもやってみたらいいが!)

こうして、最初に、ボールのこのころよい感触、ボールを足で自由にさばくことの楽しさを頭の奥にしっかりと刻みつけることが大切と思う。サッカーの面白さは、それを出発点として、一対一で相手を抜く楽しさ、複数で相手のウラを取る楽しさ、相手のボールをカットする楽しさ、複数で相手の攻めを封じる楽しさ、ゴールネットをゆるがす快感、自分

余談になるが、日本では、ご年配の方の中には、ヘドが出るほど走らなければいけない、苦しいスポーツがサッカーである、と決めている人がいるが、これは全くの誤解である。

確かに、テレビなどで、足の早い選手が、ものすごい早さでドリブルして攻めるのも、見ていると、胸のすく思いであるが、サッカーのダイゴ味は、むしろそういう場面に付随する緩急のかけひきにあるのではなく、うか。

相手選手を、(また観衆をも)とっさにあざむく意表をつくプレーとそれに伴うスリルが見る者の心を奪う。走る早さの勝負はせいぜい30mまでであり、よみとわざのかけひきは虚々実々、局面が変わるたびにでる、瞬間的な判断力と実行力が勝負どころとなる。苦しいのを我慢して走ればかりいたら、瞬時に発揮すべき、高度のわざも力も期待できないだろう。そして、真に爆発的な力やスピード、意表をつくわざが発揮されるためには、試合中に適当なリラックスをおこなう必要がある。日ごろサッカーを徹底的に楽しむ素養がないと、試合で、この効果的な「リラックス」はあり得ない。

さて子ども達の問題にかえて、わがたちはキッカーズのわらいとする

「楽しさ」⇕「サッカー技術」⇕「活力」

を無理なく自然に身につけさせるにはどのような指導方法があるだろうか。お母さんの立場からすれば、我が子が丈夫でたくましく育ってほしいためにサッカーを選択するケースも多いと思うが、ここでは焦点を少し変えてみていただきたい。

かつて、昭和49年から55年頃にかけて、ちびなは、いつものびのび試合をする(10周年会報、15周年記念誌参照)とよくいわれた。それは、お手本になるようなフォーメーションで相手チームを圧倒するのではなく、球を持ち過ぎたり、いきなりロングシュートをしたり、自分達のやりたいことをやりながら、相手を自分達のペースに乗せてしまいう試合ぶりが目についたのである。前々回で記したように、もともと「サッカースクール」の意識はなかったし、当時の下田小の子ども達の中にのびのびムードがあり、子ども達が自主的に行動し、チームづくりをする背景があったことが第一の原因と考える。そして、もうひとつは、我々の方で、大人のサッカー(組織プレー)はなるべく教え込まないようにしたこと、つまり、或るレベルに達した個人技のある子どもには、なるべく球を持

達で団体戦術を駆使する楽しさetc……と無限に発展してゆく。

サッカーの楽しさを全身で感じとった子の中には、日曜日になると早朝一人で目をさまして朝食をとり、自分で支度をして出掛ける者もいる。いわゆる自立の芽生えである。

子ども達が主役……

前回は、ボールを足でさばく楽しさを覚えることが出発点という話をした。「好きこそ物の上手なれ」……サッカーに限らず、何事も、好きになり、夢中になることによって上達が加速する。ただそれだけではない。子ども時代に根づいた、好きなことに全身で打ち込む習慣が、その人が本来持つ「活力」をよび起こし、育てる。時を忘れて無心で遊び、夢中で競い合うスポーツは、このような「活力」を養うという意味からも大きなプラスである。

たせ、自分の考えで試合をすすめるように意図したことである。

その延長線上の最大の行事が、富士山麓の合宿での班対抗戦である。合宿が定例行事になる前は、居住地域などでグループ分けした「ちびな杯争奪戦」が、昔の運動会のように熱気をはらんだ。現在では、合宿の班対抗戦で興奮がピークに達する。これが同じ子どもかと、立ち合う大人が目を見詰めるほどエキサイトする。自分達で戦術を立て、自分達でありたいだけの力を出し合っているのだから目の色が変わる。試合結果が吉と出るか凶とでるか。どう転んでも自分達がかぶるほかない。ここでは、すべて子ども達が主役である。



大人のコピー でない独創性を!

自分達が主役であることが、これだけ子どもの様相(すがた)を変えてしまうとは、本当に驚くべきではない。

「最近の子どもの生気がなくなった」とよくいわれる。無論、私はプロの教育者ではないが、サッカーを通じてこの17年間子どもと接している私の目にも、それが顕著である。もっとも、地元の下田町も、かつて人口増加に悩んだ時代を通り越し、逆に子どもの数の減少をかこつほど、町自体が沈黙化してきた反映も考えられる。しかし、この合宿での子ども達の、子どもらしい生々とした一面を見て「まだ大丈夫」と感ずると同時に、色々と教えられることも多い。

合宿のすすめ方について、当初、もう卒業だから同じ6年生を、親しい者同士を同じ部屋に、という声もあった。一方、指導する側としては、目ごろ十分やれない技術指導を、広い場所であつてみたりしてみたい気もしたし、この際、きびしさのある団体生活を味わってもらふ案も頭を過つた。また強い地元チーム

との親善試合で、チーム力の強化を計るなどのメニューはいろいろある。しかし、この素晴らしい環境の中で、親善試合にウエイトを置くには、相手選手と複食を共にするぐらいでなければ意味が薄らぐし、盛沢山の技術指導やきびしい団体訓練を、短時間で強行することは、彼等の自主性を奪い、子どもの本性をゆがめることになりかねない。合宿のプログラムについては、子どもだけではなく、大人も、もっと楽しめるアイデアはないかと、いまだに思案中である。

さて、子ども達が、自分達の城を築き、自主性をとりもどす意図で始めた、高学年、低学年込みの部屋割りと、部屋(班)対抗戦が、かつてのドキュメンタリー映画のように、思わぬ興奮を呼んでしまった。部屋対抗リーグ戦では、子ども達は、「良い子」の仮面を脱いで、「自然児」にもどり、ハダカとハダカでぶつかり合う。幼い低学年生までが、火事場のような働きをする。それにまた刺激されて高学年生が、とっさに頭腦的なプレーを敢行する。ハーフタイムには真剣な作戦会議だ。その作戦がウラ口に出たり、意外な成功をもたらしたり、汗と涙がこっちゃんになるほど泣きわめいたかと思つと、貴重なゴールを奪つて地球の引力に反発する。

このむきだしのスピリットが、応援のお母さん達に伝染しない筈はない。時ならぬカラフルな大声援が富士山をびっくりさせてしまふ。

もし、卒業を間近に控えた6年生同士を同じ部屋にため、以下学年ごとの部屋割りをしていたら、それなりの楽しさはあるにしても、このようなエキサイティングなドラマは、多分生まれないだろう。合宿の内容がどうあろうと、大人の目が十分行き届くようではないから、大人の目が「管理」を考え過ぎて、初めから子どもの手足や頭にワクをはめるようなやり方や、力士に真綿を着せるような発想は、なんとしても除きたい。

サッカーのプレーの上でも、幼い子はそれなりの自然のプレーで、大きい子は相手にせいっぱい戦うし、大きい子はバワフルではあるが、こういう場合、時々頭の回転が柔軟に働き、巧技が光る。また、目ごろどこにいてもかわからないような、おとなしい6年生が、身体を張って相手のエースを封じたり、まとめ役を演じたりして我々を感激させる。大人の干渉の少ない状況下での子ども達の世界は、意外と紳士的(?)でバランスがとれている。ここでは、それぞれ役割があり、持場があり、つまり、誰でも自発的な意志を発露できる場

が作られている。

長幼が混ざるからこそであると信じている。

サッカー技術(作戦等)は未熟でも、臨機応変に、思う存分個性を発揮できる試合は、単なる大人のサッカーのコピーとはならず、自分の判断でプレーし、自分で開発したフュイントや作戦をおりませるので、選手はもとより、観衆も最高に楽しい。

新春の夢……

力のタメ・懐の

深さ・連続技……

新春に当たり、今回は現在熱戦中の大相撲初場所から、何かヒントを得たい。(初場所11日目現在でこれを書いています)

年が改まってすぐの初場所は、お力士さんの気合が一段と乗りまくる場所だと思うが、特に今度の場所は、キラ星の如き若手が順調に伸びて、激しく競り合うので目が放せない。8日目の北尾対保志の攻防は、決着がつくまで、瞬間的な変化が、また次の対敵動作を呼

び、素早いわざの応酬で、またたくまに出来なかった。「もう一度やれといわれても出来ない」と保志が言ったという。

大乃国を除く横綱、大関総ナメの旭富士は、10キロも肥つたのに、逆に「フトコロが深く」なった。そして、この旭富士に一敗したとはいえ、軽量の横綱千代の富士の安定感はまだまだ抜群である。かつて飛えんの早技で大向うをうならせた名力士栃錦の春日野理事長は、千代の富士には「力のタメがある」という。

「力のタメがある」とはどういうことだろうか。

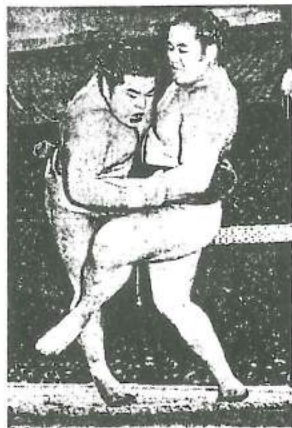
いつでも発揮できる力が蓄えられていて、勝負どころで、一気に爆発させる期待感がある、といった意味だろうか。勿論、防御の網も十分という自信がなければできないことではない。防御の基本は、相撲では、腰の備えと足の運びだろう。それにしても、あの狭いスペース内で、あれだけ余裕が持てるとは大変なことだ。「経験+アルファ」……即ちこの「ブラサルファ」が問題だ。今日の大力士になる前の、幕内に上がったばかりの若き千代の富士が、どんな相手にも、自分の倍もある大男に対しても、勝っても負けても、大

技で勝負をいどむ力士であつたのが印象に残っている。

「フトコロが深い」というのは、手や足や胴の長さの表現ではなく、相手に与える或る種の圧迫感という。いい形でまわしを持たせず、相手の力を吸収し、分散させてしまふ「懐の深さ」である。身体的特性の上に、技術や戦術が自分のものになって初めて備わるものだろう。

懐の深さでは北尾が有名だが、旭富士の場合、彼の師匠の大島親方は、「攻めの巾が広がった」といっている。

「もう一度やれと言われても出来ない」・正に死闘を尽くした攻防のありさまをよく言い得ている。



保志、よけたおして北尾を破る

文字通り必死で、ありったけのわざを繰り出して相手の攻めを封じ、得意の型にはさせないぞとねばり抜く。自分のペースに持ち込んでおいて、スキを見て勝負をかける。必ずしも体力、資質に恵まれているとは思えない保志が、見事な連続技をタイミングよく出せるのは何故だろう。平素どんな稽古をし、修業をしているのか。あるいは腰痛でケイコ不十分のため、返って氣力を蓄え、頭の回転やスピードが促進されるのであろうか。

あの理にかなった、一筆書きのようにすらすらと出る技の秘密を知りたい。「精神力」だけで片づけるわけにはゆかない。

入門したばかりの童顔そのもののお力士さんの顔と、サッカー少年達の顔をダブらせてみる。入門してから何年で大きく開花するのであろうか。ある少年が15歳で新弟子になったとして、花開くのは5年後か10年後かそれは誰にもわからない。その間、弟子も師匠も「しんぼう」の競争である。開花、開眼のときが、突然やってくることも多い。そして童顔が消え、精悍な、たくましい一本立の力士が誕生する。

サッカー少年は、プロでないだけに、別の広い世界の、果てしない夢がある。

思い思いの曲線 を描いて変身……

今年も、卒業の春が間近である。今年は十一人が卒業していく。久しぶりに卒業生の少ない年で、おとなしい子が多い点でも、いつもと違った感慨がある。

A君、B君は、サッカーをやりながら、目立って身体が大きくなったが、二人共、大きい子にありがちな、パワーを見せつける構えがなく、弾発力とスピードの不足分を、早い判断力で補うコツを会得したようだ。プレッシャーの少ない内々の試合では、すばらしい読みで、バスでもシュートでも、くろうと好みのプレーが、バランスよく、自然に出る。

A君B君に比べ、肉体的成長のおそいC君は、三、四年のころ、ピョンピョンと飛び上がるような走り方で、幼さをたっぷり残していたが、そのころからインステップキックの正確さが光っていた。五年生になったころから、スピードとたくましさ加わり、常にクリーンシュートをねらう、自分のサッカーを楽しむ、卒業を前にして、今度はヘディング

シュートにも著しい進境をみせる。まだ胸が細いが、入ってきた当初のひ弱なイメージは消えてしまった。

たちはあの技の伝統を引き継ぐD君は、ボールフティングでも、トラップでもヘディングでも、いわば模範生であるが、ただ一つ、バチンとミートするキックがない。これはサッカーに対する興味が、先ず、ボールをトラップする（本来は「わなにかける」という意味）ことに向かい、その楽しさにどっぷりつかつた結果だと思ふ。ミートもパワーも変化、技も、肉体的、精神的成長に合わせて、また、自分の関心が出た時にものにすればいいので、あせることはない。

E君、F君はみんなより遅れて入会、どのように追いつくのか注目していたが、二人共非常に熱心であったため、近頃では、タクティク（戦術的）面では、技術の進んだ子を上回るほどで、試合中、五年生に適切な指示を与えている。他の六年生も、みなそれぞれの道を、ちがったカーブをたどりながら進み、いつの間にか独自の武器をつくり上げた。そして、試合でおおむね百パーセント近い力を出したことを、いま振り返ってみて感心している。

さて、少年サッカーの最高のイベントであ

選手を好きになる……

——岡村新太郎氏

の談話から——

桜のつばみがうずうずしていた4月5日夕、日本代表チームコーチの岡村新太郎氏を囲む懇談会がついに実現した。岡村氏は、5年前から全日本ユースチームのコーチ及び監督、代表チームのコーチを歴任され、海外の事情にも明るい日本のトップ指導者の一人である。年中、日の丸組の試合やユースの指導などで外国や日本各地をたびまわり、ご自分のお子さん（小学生二人）とボールを蹴る余暇もとれないほどの忙しい身体を、たまたま、私たちは愛好会会長の大滝さんの義甥に当たるご関係から、今回貴重な時間を割いていただいた。同氏のお話をすべてここに記すわけにはゆかないので、少年サッカーの指導に関係のあるお話の中から、いくつかのポイントをひらいてみた。（以下文責は曾田）

このような風潮の中で、たちばなの子どもたちは、どちらかといえばあっけらかんとしている。試合会場へ行っても、高校野球の選手のような、整然とした行動とは正反対の無秩序さで、いつもハラハラさせられる（これは指導者として責任を感じている）。しかし、

る、全日本少年大会は、毎年七月末から、東京の読売サッカー場で行われる。全国の有力チームの、熱意に燃えた指導者は、この大会に焦点をしばっているに違いない。逆算してゆくと、この大会へのパスポートを獲得するには、その前に行われる各地方（都、道、府県）の大会を勝ち抜かなければならない。そのためには春の段階までに、かなりの実戦をこなし、ある程度仕上がっている必要がある。また、トーナメント戦（二本勝負）を勝ち抜くには、どうしてもパワーの養成（技ではなく）が優先しがちとなる。

かくして、五年生以下の幼い肉体や精神を堅り立て堅り立て、「ボールを持つな、パスを出せ、蹴れ、走れ！」の声が繰り返され、個人個人の発育の度合には関係なく、一様にチームとして高いレベル、強いパワーへ到達させるよう、短気速成をねらっているかのようだ。そして「団体訓練」が金科玉条とされる。

このような風潮の中で、たちばなの子ども

① 子どもの「自然性」を尊重し、生かす指導者は大人の感覚を捨てたほうがよい。子どもの目線まで下がるのが大切。指導者が

一生懸命になるのはよいが、自分の意識だけで（大人の目で）やらせることは、子どもを人形化し、ロボット化することになり、「応用性」を無くしてしまう。

注意したいことがあって、もなるべく我儘して言わない。そのかわり、よく観察し、子ども一人一人の特徴をつかむ。

② 叱るよりほめる

人間誰しもほめられれば元気が出て調子づく。ほめて貰おうと思つて、自分の判断でやったプレーが、結果的にうまくゆかなかった時、いつもコーチからガチンとやられたら、子どもは、ついには自分の判断によるプレーをやめ、言われたことしかやらない、受け身の人間になってしまう。

③ 「思考の回路」を活性化させる

大人の考えた作戦（パターン）を教え込み、詰め込み、子ども自身の判断の余地をなくせば、柔軟な感覚は育たず、中学高校へ行ってから伸びるべき芽を摘むことになる。例えば間違っている、大人の感覚にないものを大事にする。子ども達の感覚（判断）で戦い、それがウラ目にて負け、くやしい思いをすれば、それが養分となり、負けたことも将来の成長に役立つ。小学校高学年時代から、このような自主的で活発思考の回路をつくってほ

しい。なお、かつて、堀内氏（横浜サッカー協会少年委員長）の依頼で、各チームからピックアップされた選抜選手を半原で指導したことがあるが、その中で、オヤツと思う意外性のあるプレーをするのは、オレンジのユニホーム（たちばなの選手達）であった。

④ ヨーロッパの少年サッカーについて

西ドイツのサッカークラブ（下は小学生から上はブンデスリーガまでつながっている）では、少年の指導は、自由に遊ばせ楽しませることが主で、練習といえば小人数の試合中心である。しつけとしては、ストッキングをしつかりあげること等がきびしく注意される。（怪我の防止がねらい）

ヨーロッパではどこでもサッカーが最大のスポーツであるが、日本ほど組織化された少年チームの多い国は無さそうである。

⑤ キックについて

身体が成長し、筋肉が強くなれば、必ずおおく飛ぶようになる。子どもどときは蹴るフォーム、ボールの当たる場所（足の）などを覚えさせるのが先決。プラティニ（ヨーロッパ最高のプロ選手）も少年もキックのフォームは同じである。なお、お隣の韓国では、少年時代からキックの基本はきびしく指導している。

⑥ 腰の位置を低く

このごろの子どもは足が長い。そのため腰が高くなる欠点が目立つようになった。一流選手は、背が高くても、蹴り合ひではヒザが深く曲がり、腰の位置が低くなる。昔の子どもは、日常生活の中で、山野を駆け回ったり、鬼ごっこをしたりで、膝に柔軟性があった。今の子どもはそういう遊びをしないので、よけいに腰が高い。練習の合間に相撲や鬼ごっこを取り入れるのもいいと思う。

⑦ 選手を好きになる

現在の日本の学校では、クラスの中に、非常に扱い難い生徒がいた場合、「問題児童」又は「はみ出し子」として扱われるかも知れない。我々は問題児といえども、チームのために生かさねばならない。その子の能力を発掘し、それを全開させることを考える。そのためには、その選手を、まず好きになることである。

さて⑦の話を聞いたとき、私は、さる回しのさるの調教（？）の方法を思い出した。さるに芸を仕込むのに最も大切なことは、人間の方が、さるより強いことを印象づけることで、そのため人間がさるを歯でかんでこわがらせるのだそうである。

恐がらせて芸を覚えさせる指導と、選手（子ども一人一人）を好きになる指導とはどう違い、どのように相反する結果が出てくるのだろうか。

「選手を好きになる」という言葉が、スポーツ少年団の指導者からではなく、また、星霜を経た老人からでなく、日本のトップチームの、若々しい指導者の口から、自然に出たことに、限らない頼もしさと心強さを感じた。爽快感に満ちた一夕であった。

手綱をしぼる

全日本チームコーチ岡村新太郎さんを囲む懇談会で「子どもの自然性を生かす」ことが特に強調された。正に「我が意を得たり」の思いである。

笠松時代（昭和47年）から瓜田時代（同55年）にかけて、よくもまあ「自然児」が、入れ替わり、たちかわり根拠地下田小校庭に集まったものだ。実力以上の勝負強いサッカー

をやり、また、点を取られ取り返す、ハプニングの連続の面白い試合をよくやった。第2期黄金時代（52〜55年）を思い出すと、大筋の作戦は授けるが、試合では、キープ力のある選手には「ボールを持つな」とは言わないので、局面での攻防は、彼ら自身での判断でやるケースが、他のチームより多かったと思う。従って、自信がある時ほどむしろ選攻になる。廻りを見ながらやるからである。こういうときは、失敗も結構あって、見ていて舌打ちもしたが、彼らは身体と一緒に頭をフル回転させて戦っている、そういう時は失敗してもドナれない。彼らにとって、日曜日は仕上げないしまとめの練習であり、試合日は、覚えたてのテクニックや戦術をテストしてみる日であった。ウィークデーは、早朝でも放課後でも、じっとしていないで（これが子どもの本性）、自分達でサッカーを楽しみながら、身体や頭のトレーニングを、彼らのやりかたで、しっかりやっていたのである。

もちろん、下田小生徒として、小学校の先生の指導もあったが、ワクにはめるやり方ではなかった筈で、また、幸いにも、校庭管理もゆるやかで、ただ昆さん（元下田小用務員、昭和58年死亡、現在高校生以上の下田小OB

には忘れられない存在）が子ども達の行儀面の憎まれ役を買っていた。

ところが、この数年の間に、子ども達の「生活」が確かに変わってきた。サッカー遊びだけでなく、子ども達が徒党を組んで遊ぶ姿が見られない。気のせいかな、子どもらしい生き生きとした精気を感じる時が少ない。我々の立場で、やる気満々の選手達の「手綱をしぼる」ことも忘れかけているほどである。山王谷の高田氏の「（最近のたちは）優等生的になり過ぎていく」という評が、的を得ているのではないか。ここでのいう優等生的なのは、「学校の勉強が……」ではなく、「たちばなサッカーが……」である！

子ども達の生息の変化については、たちはなの子ども達だけではなく、最近は一種の社会現象として、いじめや自殺に関連してマスコミも取り上げるようになったし、行政も教育上の立場から対策を検討している。

それはさておき、我々としては、かつて行く先々でオレンジ旋風を起こした、たちはならしい生きのいい、そしてこのびのびしたサッカーが目に見える付いており、わずか数年の間に、このようなたちはなカラーが薄らいできたのが物足りない。あの当時と比べ、指導陣

がちよっぴり年取った他は、指導内容に大幅な変化は無い。変わったところを強いてさがせば、下田町界隈が、住宅地として落ち着き、町が静かになり、子どもが戸外で遊ばなくなった(?)ことが原因と思われるのではない。

家庭の保護者はどう考えておられるだろうか。こうありたい子どものイメージが、御両親や学校の先生や我々指導者間で違ふのであれば、その相違点について、みんなで雑論を交わしたい。保護者にも先生にも、我々に對しても、それぞれ違った、世間からの強いプレッシャーがあるので、なかなかテーマ通りにはいかないが、できるだけ同じ考え方で進みたい。私としては、度々述べるように、自発的で生き生きとした、のびのびしたスポーツ活動を子どもたちに期待し、そのことを優先させたい。あえて言えば、はやる駿馬の手綱をしぼることをいつも夢みている。

ハングリ―とはおよそ縁遠い、飽食の時代であれば、尚更それにこだわりたい。

自己中心性は そのままに……

今回は主として低学年に焦点を当てながら指導のあり方について考えてみたい。

子どもが集団でスポーツ(遊び)をやれるようになる以前、つまり、乳児期から幼児期にかけての期間は、いってみれば、保護者の庇護のトンネル内にあるようなものである。トンネル内の小さな空間が宇宙であり、ひとり遊びに明け暮れして力を蓄えながら、トンネルの出口に近づく。法律はトンネルの出口を一律に年齢(満6才)でカットして、学齢期が始まると考えて、わがたちばなでも、トンネルを出た者を入会可能として受け入れているわけである。

従って、この時期(6〜7才)では、足腰はしっかりしてきたとはいえ、精神的に未分化というか、まだ、自分と他者を分けて考えられない。夢中でスポーツをやっている間はおそらく自己中心である。また、ひとつのことに関心を示している間は、別のことに関心が及ばないし、眼に入らない。丁度、子猫

が動くひもにじゃれつくようなもので、ひもを二つにすると関心が分散して、じゃれなくなる様と似ている。

このような、精神的成長過程にあるものに對して、始めからサッカーの団体戦術やチームワークを強調するわけにはいかない。サッカーを団体スポーツの代表的なものとする「大人の眼」で見れば、彼らの試合ぶりは、まさに支離滅裂で、われがちにエサに群がる鳥合の衆と変わるところがない。そこで見かねて「ダンゴになるな!ボールに寄るな!」ときれいに間隔を保つよう指導したくなるし、大人が考えたフォーメーションを押しつけ、カッコをつけたくなる。たしかに団体戦術をパターン化して教えこめば、子どもでもすぐに覚えて、攻めの形が出来るようになる。一見、団体プレーがうまくなったように見えるが、それはパターンを覚えただけで、自分の意図が入っていない。

逆に、パターンを教え過ぎることによって起こると思われる問題点として、次のようなことが考えられる。

①入会したばかりでは、ボールを追って目いっぱい動いていた子が、ボールを取りに行こうとせず、来るのを待つようになる。

②素直な子ほど、教えられたパターン通りに動き、プレーしようとする。つまり応用が効かなくなる。

③思い切ったプレーが影をひそめ、個性的な芽も育たない。

④教えられた通りをやればいいので、試行錯誤をやめ、自分で工夫する習慣も育ち難い。

⑤チームワークの必要性を自分で悟る機会がかえって少なくなる。

子どもは、心身共に柔軟で吸収力が大きいだけに、型にはめるのは容易であるが、その結果、大切なものを置き去りにしないよう注意したい。

昔の子どもには、集団で山野を駆け回って木の実を採り、トンボを捕り、野うさぎを追い、また海に潜って、さざえを取り魚を突く、といった胸がわくわくするような遊びがあり、また、街では、日の暮れるまでかくれんぼをしてスリルを味わうなど、自分達でルール作りをする遊びも沢山あった。このような「遊び」と所謂スポーツは、もちろん次元が違いますが、子どものスポーツには「遊び」の要素を取り入れることが大切であり、昔の遊びの中にあつた、野性的な感激やスリルや創造性を、



サッカーに求めることは間違ひではないと思う。

遊びにも、自然に出来たルールがあるように、サッカーにも無理のない最小限のルールがある。子どもたちが、熱中のあまり、ルールからはみ出さないようコントロールすることとが、「遊びの方向づけをすること」と共に「大人」の第一の役目であると思う。ルールに違反しない限り、最初は自己中心的なプレーにも、できるだけ眼をつむり、思う存分やらせてみる。いかに自主性を育て、集中を持続させるか、難しいことではあるが、そこから出発したい。

それでは低学年の初心者、先ず覚えて欲しいこと、感じてほしいこと、身につけてほしいことは、どんなことがあるだろうか。

ボールの感触を

味わう……

前回は「自己中心的なプレーをそのままに(最初のうちは)」を提唱したが、それはあくまでもプレーの上であって、サッカーのプレー以外の場で、協調性のない行動があれば、その都度注意すべきことはいくまでもない。ともかくサッカーは、個人プレーにせよ、複数による戦法にせよ、「自分のアイデアで」「自分で工夫したプレーで」「その場のひらめきで」やる——という基本姿勢を、子どもの中に身につけさせることが大切で、その便法として、最初は、ある程度の自己中心性はそのままに、「思う存分やらせてみる」とことを主張したわけである。

さて、子どもが、サッカーのとりこになるのは、特に6〜7才以下では、先ずボールが丸いこと、足で蹴飛ばしていいこと、足でさばく感触の良さ、などがきっかけである。グラウンドに危険物が無ければ、ボールの感触を楽しむために、素足でやらせたいぐらいである。素足のプレーが、或る意味では理想で

あることは、厚い手袋をはめてドッジボールをやる不合理を想像していただければ分かりやすい。勿論、足のどの部分を使って球をさばき、どこに当てるべきか、力の配分はどのくらいにするか、を自分で体験して、自分の脳髓に刻み込む。足首の使い方を覚える。また昔の話になるが、戦時中に育った者は、皮靴はおろか、ズックの靴も貴重品なので、私など、一時期はだしてボールを蹴ったが、うまくミートすれば、インステップで40メートルぐらい飛んだ記憶がある（中学3年頃）。はだして遠くへ飛ばすには、足の甲の、一番いいポイントでボールをとらえざるを得ないので、自然と足首も曲がり、蹴る瞬間、足首を固定するコツを会得する。

残念ながら、はだしてやれる練習場や試合場は今の子どもには望めないし、時代も違う。しかし、今述べた理由から、初心者にはできるだけ素足の感じを残し、足首も自由に動かせる運動靴が望ましい。なお、我々の身近にあるクラブでは、洋光台SCが、6年生まで全員、試合でもズックの靴しか使わせない。一般には、ズックでは足が痛いというイメージを、ことさらに拡大して、せがまれるままに、始めから皮靴を買い与える親も多いと聞く。

その親心が、却ってサッカーの基本の修得を困難にすると思う。皮靴は少なくとも、インサイド、インステップ、アウトサイドなどキックの使い分けができるようになるまで取っておきたいものである。

少し脇道にそれたかもしれないが、ボールの感触を、目ごろしっかり味わっている子どもは、間違いなく上達する。

さて、丸いボールを蹴飛ばす快感から始めて初心者靴のことまで、たまたま、足、それも足首から下のみをとり出して、サッカーを考えてきたが、周知のとおりサッカーは、「手」以外ならどこを使ってもいいので、相抵抗した試合では、頭や上半身を使った、一瞬の技で勝敗が決する場合もしばしばあって、サッカーをさらに楽しんでいる。虚々実々の対的動作の中でのからだの使い方（フェイントやブロック等）についてはしばらく置いて、ここでは、頭、胸、モモを使ったプレーについて考えてみたい。プレーといっても、ヘッドイング（頭）以外はトラップ（ボールを静止させ、自分のものにする）である。一流の試合をテレビで見ていると、空中に飛来するボールを、胸やモモで、いとも簡単にさばいているが、これはボールの勢いを殺す技

空中のボール

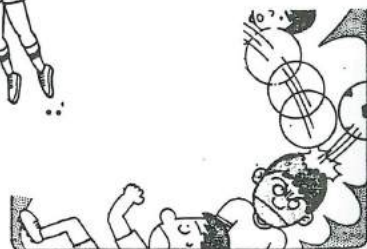
になじむ……

昨年は4年に一度のWカップの年で、多少でもサッカーに縁のある人は、地球の反対側からの、深夜のテレビ中継に吸い込まれた。がっちり四つに組んだ試合展開の中、何気なく出す球が絶好のスペースに送られ、受け手の選手がまたあざやかな球さばきを見せる。レベルの高い試合は、グラウンダーのパスが流れるように続くことが多いが、クロースアップされる選手は、例外なく、浮球の処理もうまい。頭でも胸でも、ごく自然に、敵に取られないところへ落としたり、ワンタッチで敵のウラをかいたりする。日本でも、1960年代に入って、サッカーのテクニクが多様になり、ヘッドングや胸トラップの技術も大幅に変化した。それ以前は、「ヘッドは痛いのを我慢するのが当たり前」といった考え方が幅をきかせており、ヘッドングを特技とする選手もいるにはいたが、むしろ「精神力の結晶」につながるもので、「テクニクの1つ」として重視されてはいなかった

ように思う。

さて正しい指導を受けていない子供にヘッドイングをやらせてみると、大抵、目をつぶり、下を向いて、頭のテッペンでボールを当てようとす。日常生活では、空中から飛来するものは手でさばくのが習慣になっているから、それを頭部で受けるとなれば、恐怖心が先に立つのが当然で責められない。しかし、そのまま放っておいて、下を向き頭のテッペンで打つものと思込込入ってしまうと、困ったことになる。その後繰り返し練習させても、ボールがくると、体を固くし、肩を上げ、腰が引けて、スムーズな動作が出てこない。足の位置を自然体にして、球をヒタイでねらって、上半身全部にウエイトかけ、リズムカルに打てば、痛みもほとんどないし、球が気持ちよく飛んでくれる。最初に、「痛い」という先入観に取り付かれてしまうと、なかなか、空中のボールになじめない……や

術が必要で、初心者には大変難しい。特に子どもの場合、空中から来るボールには恐怖心が先に立つ。



をしなやかに、自然に、またリズムに乗って使えることが大切で、それが対敵動作の効果的なフェイントにもつながる。前述したように、いまは誰でも、テレビで素晴らしいお手本を見ることが出来る。子供たちは反応が早い。きつとかっこいいプレーを真似（まね）したくなっているに違いない。足先だけでなく、胸でも、頭でも、ももでも、楽しそうに、無意識に使って、ボールをさばく子が、たちはなでもどんどん増えるようになってほしい。

たちばなキッカーズの

あゆみ・記録・思い出

たちばなキッカーズ 二十年のあゆみ

45 ～ 43 年度				年度
45	44	43		年
4	11 9	8	11	月
11月23日（祭日）朝下田小学校校庭に5年生16名が集まり初練習を行なう。当時日吉町にあった「若草クラブ」（故石垣一雄氏指導）から挑戦を受け、下田小で初試合、初戦を5対0で飾る。校庭に初めてシュート板設置さる。初めてたちばなの呼びかけで日吉地区少年サッカー大会を開催。朝日、南日吉、たちばな、若草クラブが参加。朝日 優勝 たちばな 3位 第2回日吉地区少年サッカー大会。 1位 南日吉 2位 たちばな 3位 若草 （資格は小4～中1のため年長者の多いチームが有利であった）				こ と が ら

47 年度	46 年度				
47	46				
7	3	12	11 12	11	7 6
横浜サッカースポーツ少年団結成に加わる。宮西FCほか12チーム加盟。 第5回全国スポーツ少年団サッカー大会。横浜地区予選に出場（公式戦初出場）山王谷と共に横浜代表となり、県大会進出。準決勝で鎌倉おなりと1対1、PK戦で惜敗。（おなり優勝） 初めてスポーツ傷害保険に加入。 初めてユニホームを決める。 シャツはオレンジ パンツは白（後に紺） 第3回横浜国際チビッコサッカー大会に初参加。 リトル（現在のLL）準優勝 ジュニア（現在のL）予選4位 初めて東京遠征（中山先生紹介） たちばな0対0浜田山小 たちばな（4年）0対1浜田山小（5年） 第1回港北区少年サッカー大会 小学生の部 優勝 中学生の部 優勝 第6回全国スポ少サッカー大会 横浜代表として山王谷、つばめと共に県大会に出場したが、秋葉台に大敗（1：8）					

48 年 度		47 年 度	
11 12		48	
7 4		3 1 11 5	
初めて千葉県に遠征（2年生以上） たちはな4対0常盤平団地 低学年も勝つ 第1回たちはな杯リーグ戦 各学年を通じ学校の組分けを利用し て4チームに分ける。 第4回横浜国際チビッコサッカー大会 Lの部 準優勝（この年だけ厚木の GPが特別参加し、優勝をさらう） LLの部は参加せず。 第2回港北少年サッカー大会。 小学生、中学生共に優勝 横浜少年選抜チーム韓国遠征。 当クラブから笠松、小菅、菅沼（以 上6年天場（兄）、坂本（以上5年） 参加 横浜少年サッカー大会 準優勝。 クラブの規約をつくる。 第7回全国スポササッカー大会 県予選で強豪秋葉台に1対0で惜敗 （秋葉台優勝） 島根県大社町で初めての合宿を行う。 参加者5・6年生30名 第5回横浜国際チビッコサッカー大会 LLの部 3位		第2回横浜スポーツ少年団サッカー大会 Lの部 4位 LLの部 準優勝 第9回全国スポーツ少年団サッカー大会 会。強敵善行に4対0で敗れる。 富士緑の休暇村で合宿 第2回団地少年サッカー大会。 A、B共に3位 たちはな杯を、子どもの国サッカー場 を借りきって盛大に行なう。 第7回横浜国際チビッコサッカー大会 LLの部 3位 第3回港北区新春スポーツ大会 第1回横浜少年サッカー大会。 この年から5年生以下の新人戦とし て、又学校チームも含めて開かれる たちはな 3位 第3回横浜スポーツ少年団サッカー大会 Lの部 準優勝 LLの部 優勝 第10回全国スポーツ少年団サッカー大会 会。 富士緑の休暇村で合宿 第3回団地少年サッカー大会	

49 年 度		48 年 度	
50		49	
3 1 11 12		8 4 9 5	
第1回港北区新春スポーツ大会 たちはなレッド（5年） 2位 たちはなホワイト（6年） 3位 第1回横浜スポーツ少年団サッカー大会 LLの部 準優勝 （Lの部はこの年なし） 第8回全国スポーツ少年団サッカー大会 会。準優勝の六会（藤沢）にPK負け 第1回団地少年サッカー大会。 A（高学年）B（低学年）共に優勝 この時TBSテレビで放映される。 こどもの国サッカー場こけら落としに 参加。模範試合を行なう。 ベレ、少年サッカー指導のため2度目 の来日、11月23日東急本店屋上にた ちはな全員ベレの指導を受ける。ベレ にはめられ 感激！ 第6回横浜国際チビッコサッカー大会 LLの部 優勝 （Lの部はベレ騒ぎで調子を崩す） 第2回港北区新春スポーツ大会。 小学生の部 優勝 横浜選抜チーム韓国遠征（2回目） たちはなから中村、吉原、早川、岩 村、池沢（兄）、川村（以上全部6年 生）及び川村君のお母さん参加。		第2回横浜少年サッカー大会。 準優勝 第4回横浜スポーツ少年団サッカー大会 Lの部 優勝 LLの部 3位 第1回全日本少年サッカー神奈川大会 4位 富士緑の休暇村で合宿に際し、セルジ オ越後氏の指導を受ける。 この時の合宿は浜見平と一諸に行う。 純益金約16万円 テント購入 高学年は羽鳥に敗れる 低学年 優勝 神奈川県少年サッカー選手権大会 レッド（5年） 3位 ホワイト（6年） 2位 第4回港北区新春スポーツ大会 LLの部 準優勝 Lの部 3位 第8回横浜国際チビッコサッカー大会 たちはな杯を新日鉄ランドで行なう。 第2回横浜スポーツ少年団サッカー大会 LLの部 3位 第9回全国スポーツ少年団サッカー大会 会。強敵善行に4対0で敗れる。 富士緑の休暇村で合宿 第2回団地少年サッカー大会。 A、B共に3位 たちはな杯を、子どもの国サッカー場 を借りきって盛大に行なう。 第7回横浜国際チビッコサッカー大会 LLの部 3位 第3回港北区新春スポーツ大会 第1回横浜少年サッカー大会。 この年から5年生以下の新人戦とし て、又学校チームも含めて開かれる たちはな 3位 第3回横浜スポーツ少年団サッカー大会 Lの部 準優勝 LLの部 優勝 第10回全国スポーツ少年団サッカー大会 会。 富士緑の休暇村で合宿 第3回団地少年サッカー大会	

51 年 度		50 年 度	
8 8 7 5 9 6		51 50	
2 1 10 4 11		4 6	
第2回横浜スポーツ少年団サッカー大会 Lの部 4位 LLの部 準優勝 第9回全国スポーツ少年団サッカー大会 会。強敵善行に4対0で敗れる。 富士緑の休暇村で合宿 第2回団地少年サッカー大会。 A、B共に3位 たちはな杯を、子どもの国サッカー場 を借りきって盛大に行なう。 第7回横浜国際チビッコサッカー大会 LLの部 3位 第3回港北区新春スポーツ大会 第1回横浜少年サッカー大会。 この年から5年生以下の新人戦とし て、又学校チームも含めて開かれる たちはな 3位 第3回横浜スポーツ少年団サッカー大会 Lの部 準優勝 LLの部 優勝 第10回全国スポーツ少年団サッカー大会 会。 富士緑の休暇村で合宿 第3回団地少年サッカー大会		第2回横浜スポーツ少年団サッカー大会 Lの部 4位 LLの部 準優勝 第9回全国スポーツ少年団サッカー大会 会。強敵善行に4対0で敗れる。 富士緑の休暇村で合宿 第2回団地少年サッカー大会。 A、B共に3位 たちはな杯を、子どもの国サッカー場 を借りきって盛大に行なう。 第7回横浜国際チビッコサッカー大会 LLの部 3位 第3回港北区新春スポーツ大会 第1回横浜少年サッカー大会。 この年から5年生以下の新人戦とし て、又学校チームも含めて開かれる たちはな 3位 第3回横浜スポーツ少年団サッカー大会 Lの部 準優勝 LLの部 優勝 第10回全国スポーツ少年団サッカー大会 会。 富士緑の休暇村で合宿 第3回団地少年サッカー大会	

52 年 度		51 年 度	
8 7 4 5		52 51	
2 1 10 5 11		9	
Aクラス 準優勝 Bクラス 優勝 たちはな杯を新日鉄ランドで行なう。 第8回横浜国際チビッコサッカー大会 Lの部 3位 LLの部 準優勝 第4回港北区新春スポーツ大会 ホワイト（6年） 2位 レッド（5年） 3位 神奈川県少年サッカー選手権大会 低学年 優勝 高学年は羽鳥に敗れる バザーを行なう 純益金約16万円 テント購入 第2回横浜少年サッカー大会。 準優勝 第4回横浜スポーツ少年団サッカー大会 Lの部 優勝 LLの部 3位 第1回全日本少年サッカー神奈川大会 4位 富士緑の休暇村で合宿に際し、セルジ オ越後氏の指導を受ける。 この時の合宿は浜見平と一諸に行う。		第2回横浜スポーツ少年団サッカー大会 LLの部 3位 第9回全国スポーツ少年団サッカー大会 会。強敵善行に4対0で敗れる。 富士緑の休暇村で合宿 第2回団地少年サッカー大会。 A、B共に3位 たちはな杯を、子どもの国サッカー場 を借りきって盛大に行なう。 第7回横浜国際チビッコサッカー大会 LLの部 3位 第3回港北区新春スポーツ大会 第1回横浜少年サッカー大会。 この年から5年生以下の新人戦とし て、又学校チームも含めて開かれる たちはな 3位 第3回横浜スポーツ少年団サッカー大会 Lの部 準優勝 LLの部 優勝 第10回全国スポーツ少年団サッカー大会 会。 富士緑の休暇村で合宿 第3回団地少年サッカー大会	

53 年度		52 年度							
		53							
		52							
7	2 5	3	1 2	1	12	10 11	9	8 9	第4回団地少年サッカー大会。 A・B共に優勝 (この年から中央大会はよみうりグランドで開催) 国立競技場で、全日本対コスモス(ベレ出場)の試合を観戦。 (小・中学生45名) 第9回横浜国際チビッコサッカー大会 Lの部 優勝 LLの部 優勝 読売少年サッカー冬季大会に初出場 2回戦でアストラジュニア(準優勝)に敗れる。 第5回港北区新春スポーツ大会 3位(L・Aチームは県大会と重なったため出場せず) 第4回神奈川県少年サッカー選手権大会。 高学年の部 4位 低学年の部 優勝 第1回大京杯少年サッカー大会出場 第3回横浜少年サッカー大会(新人戦)優勝 第2回全日本少年サッカー神奈川大会準優勝 (優勝は逸したが藤沢の壁を初めて破る)

54 年度				53 年度						
				54						
5 8	7	3 4	2	1	12	10 11	8 10	8	8	4 7
				第5回横浜スポーツ少年団サッカー大会 Lの部 優勝 富士緑の休暇村で合宿 第2回関東少年サッカー大会優勝(於藤岡市) 第5回団地少年サッカー大会 Bクラス 準優勝 Aクラス 予戦で敗退(関東大会のためL・A出場せず) 第10回横浜国際チビッコサッカー大会 Lの部 優勝 LLの部は準々決勝で敗れる。 12月17日創立10周年記念行事を行う 第1回全国少年ミニサッカー大会 神奈川代表(横浜港北選抜、横浜東、駒林・つばめも含む)として出場 優勝 第4回横浜少年サッカー大会(新人戦)優勝 なの花カップ(館山)優勝 読売旗争奪読売少年サッカー夏期大会5対5でPK負け 第3回全日本少年サッカー神奈川大会準優勝						

55 年度		54 年度							
		55							
		54							
5 7	2 4	1 2	1	1	10 12	8	8	8	第3回関東少年サッカー大会 初戦で葦崎(山梨)に4対5で敗れる この年葦崎優勝(於千葉) 富士緑の休暇村で合宿 全日本で優勝した甲府FCの選手9人を持つ玉諸チームと親善試合 4対3で敗れる 第6回団地少年サッカー大会 Aクラス 優勝 第11回国際チビッコサッカー大会 L 3位 LL 4位 港北区少年サッカー大会 第2回全国ミニサッカー大会 ベスト8(於宇都宮) 第6回神奈川県少年サッカー大会 4回戦まで進出 FC504に1対1でPK負け 第5回横浜少年サッカー大会(新人戦) 3回戦で夏山に4対1で敗れる 第4回全日本少年サッカー神奈川大会 ベスト8 (中央大会で前年度優勝の浜見に4

56 年度		55 年度							
		56							
		55							
6	4 6	2 5	1	1	10 12	8	8		対2で勝ち前年度の雪辱を果たしたが、 準々決勝でG・Pに敗れる) 富士緑の休暇村で合宿 第7回団地少年サッカー大会 Aチーム準々決勝で浜見平に3対2で敗れる Bチーム優勝(決勝は港南台と1対1でPK勝) 第12回国際チビッコサッカー大会 優勝(決勝は黒滝に5対0で完勝) 港北区少年少女スポーツ大会 たちはなホワイト 準決勝で大曽根SCに敗れる 第3回全国少年ミニサッカー大会 3位 爪田と大滝が優秀選手賞受賞 (於静岡三島市) 第7回神奈川県少年サッカー選手権大会 宿敵浜見にPK負け 第6回横浜少年サッカー大会(新人戦)優勝(1対0港南台) 第8回横浜スポーツ少年団大会 決勝トーナメント一回戦で横浜東にPK負け 第5回全日本少年サッカー神奈川大会

58 年 度									
58									
2 5	5	4 7	5 7	7	8	8	8	8	8
第8回横浜少年サッカー大会(新人戦) 3位 5月8日 バザー開催 第10回横浜市スポーツ少年団サッカー大会 4位 第7回全日本少年サッカー神奈川大会 ブロック 2位 第5回全国子どもミニサッカー大会 神奈川予選優勝(於伊勢丹屋上) 全国大会1回戦 たちはな4対3 仲ノ木(埼玉)ただし合宿と重なるた め以後の試合を棄権 富士緑の休暇村にて合宿 あさみのFC、八潮SC(埼玉) 中西バーバリアン(東京)と親善試合 を行う 二日目昼食は飯ごう炊飯 読売少年サッカー夏季大会 2次リーグで2位(準決勝進出できず) 第10回団地少年サッカー大会 Bチーム 予選リーグ2位 Aチーム 決勝T 1回戦西上尾に敗退 9月18日たちはなキッカーズ創立15周年 記念式 第15回横浜国際チビ子サッカー大会 LL-A 決勝T 準優勝									



▷ 第7回全日本少年サッカー大会
神奈川県大会



◁ 第7回全日本少年サッカー大会
神奈川県大会

57 年 度					56 年 度				
57					56				
7	7	6	4 6	2 5	1	1	10 12	8	8
57年度読売旗争奪読売少年サッカー夏季大会 第4回全国子供ミニサッカー大会神奈川予選トーナメント(於伊勢丹屋上) 準決勝でOSジュニアに負け全国大会に出られず。 第6回全日本少年サッカー神奈川大会 予選ブロック準決勝で鶴ヶ台AにPK負け。 第7回横浜少年サッカー大会(新人戦) 4位(準決勝で横浜東にPK負け) 3位決定戦では山王谷にPK負け) 第9回横浜スポーツ少年団サッカー大会 準々決勝でFC本郷に敗れる 第8回神奈川県少年サッカー選手権大会 Lの部 1回戦で敗退 LLの部 4位					2回戦で村岡Aに敗退 富士緑の休暇村で合宿 第8回団地少年サッカー大会 第13回国際チビコサッカー大会 LLのA Bブロック優勝 第4回全国少年ミニサッカー大会 準々決勝でPK負け(対仙台向山)				

57 年 度									
57									
2	1	1	11 12	10 12	9	8	8	8	8
第2次予選リーグ 3位 富士緑の休暇村にて合宿 第9回関東団地少年サッカー大会 Aクラス 準々決勝で山崎ZにPK負け。この 年山崎Z優勝 第2回子ども国キリンカップ少年サッカー大会 第14回横浜国際チビコサッカー大会 4位(3位決定戦で駒林に敗れる) 57年度読売旗争奪読売少年サッカー秋季大会 第2次リーグ3位のため決勝トーナメントに進出できず。 (国際チビ子3位決定戦と重なりLB LIBで対戦) 第9回神奈川県少年サッカー大会 3回戦で南大野コスモスにPK負け 第5回全国少年ミニサッカー大会 8人制の部 準決勝でPK負け たちはなキッカーズ創立15周年記念行事実行委員会発足 9月に祝賀式典を開催。記念誌を発行する。それにともなう資金づくりとしてバザーを開催することに決定									

60 年 度					59 年 度				
					60				59
10	9	8	5	3	2	1	11	10	9
第17回横浜国際チビッ子サッカー大会 LIA ブロック3位 旭高校サッカー部 新日鉄グラウンドにて たちばなを指導 Bチーム 予選一勝一負 Aチーム 決勝Tで尾山台に負け 第12回関東地区少年サッカー大会 あさみ野と親善試合 富士緑の休暇村で合宿 LIA 県予選ブロック2回戦 第9回全日本少年サッカー神奈川大会 LIA 予選ブロック3位 第12回横浜スポーツ少年団サッカー大会 LIA 優勝					勝田SS10周年記念招待試合 優勝 第16回横浜国際チビッ子サッカー大会 LIA 準優勝 港北区ジュニアスポーツ大会 LIA 優勝 第11回神奈川県少年サッカー選手権大会 LIA 県予選ブロック1位 4年ぶりの県中央大会進出するも 1回戦で惜敗 330チーム中16位 第10回横浜少年サッカー大会(新人戦) 1回戦 清水口招待試合に参加				



△ 第15回横浜国際チビッ子サッカー大会
LIA 準優勝



▷ 港北区ジュニアスポーツ大会
LIA 優勝

59 年 度					58 年 度				
					59				
9	8	7	6	5	4	2	2	1	1
鶴間10周年招待試合 決勝リーグ進出 静岡の長泉南に惜敗 準優勝 予選リーグで敗退 第11回関東地区対抗少年サッカー大会 さぎ沼、八潮SC(埼玉)と親善試合 富士緑の休暇村で合宿 優勝の大根ラディッシュに3回戦で負 第六回全国子供ミニサッカー大会 永田コーチ長期出張より復帰 下田小グラウンド整備終了 LIA 県予選ブロック2回戦 第8回全日本少年サッカー神奈川大会 決勝T 1回戦で惜敗 第11回横浜スポーツ少年団サッカー大会 LIA・LIAともブロック1位					第1回クラブ対抗ミニサッカー大会 3年56年生 総合2位 特別T優勝 第10回神奈川県少年サッカー選手権大会 Lの部、LIAの部とも3回戦 昭和58年度読売旗争奪読売少年サッカー 冬期大会 第1次予選リーグで惜敗 第9回横浜少年サッカー大会(新人戦) 2回戦で本郷に敗退 曾田監督現場に復帰				



▷ 第1回クラブ対抗ミニサッカー大会
セルジオ越後氏に指導を受ける



△ 第16期卒業生「お別れ会」

62年度						61年度					
						62					
7	7	6	5	5	4	3	2	1	11	10	8
第14回横浜スポーツ少年団サッカー大会 LL-A ブロック1位 決勝Tベスト8 LL-A ブロック2位 決勝T1回戦 「たばなキッカーズ創立20周年準備委員会」発足 第11回全日本少年サッカー神奈川大会 4回戦 いずみKCに惜敗 第3回港北区サッカー協会大会 SL 3位 第14回横浜スポーツ少年団サッカー大会 LL-A ブロック準々決勝で惜敗 「たばなキッカーズ創立20周年準備委員会」開催						第13回関東団地少年サッカー大会 SL 3位 第18回横浜国際チビ子サッカー大会 LL-A 予選リーグ4位 LL-B 予選リーグ4位 第6回港北区ジュニアスポーツ大会 LL-A 2位 第13回神奈川県少年サッカー大会 第12回横浜少年サッカー大会(新人戦) LL-A 第2戦はやぶさにPK負 62年度読売旗争奪読売少年サッカー春季大会 決勝T進出 準々決勝で惜敗					



△ 港北区ジュニアスポーツ大会 LL-A 3位



△ 第18期卒業生



△ 第19期卒業生

61年度						60年度					
						61					
8	8	7	6	5	4	3	2	1	11		60
決勝リーグ 浜松JFCに惜敗 第13回横浜スポーツ少年団サッカー大会 LL-A ブロック2位 決勝T1回戦負 LL-A ブロック1位 決勝T2回戦負 第10回全日本少年サッカー神奈川大会 LL-A 県予選ブロック2位 第2回港北区サッカー協会大会 SL-A 4位 第8回全国子供ミニサッカー大会 県予選 2位 全国大会 4位 富士緑の休暇村で合宿 GPフェスティバル五年生大会招待試合 予選リーグ 2位						LL-A ブロック1位 決勝Tで駒林に惜敗 港北区ジュニアスポーツ大会 LL-A 優勝 LL-A 3位 第12回神奈川県少年サッカー選手権大会 LL-A 予選ブロック2位 第11回横浜少年サッカー大会(新人戦) 第2回戦 上星川に敗れる 61年度読売旗争奪読売少年サッカー春季大会 予選リーグ 1位 ブロック決勝で惜敗					



△ 「ゴール」12月号より

第8回全国子供ミニサッカー大会 7/31~8/3の4日間
にわたって、東京・新習志野の
屋上を会場に開催された。第8回
全国子供ミニサッカー大会では、
全国から地区予選を勝ちぬいた16
チームが参加、優勝をめざして激
突した。
ベスト4入りしたのは、トーナ
メントを勝ち上がった泉陽台、
泉陽台(横浜宮城)、熊本・津島、
たちばな(神奈川)と敗者復活戦
からよみがえった有楽(小・野田)
だ。

優勝 泉陽台
3位 たちばな
4位 有楽
5位 泉陽台
6位 泉陽台
7位 泉陽台
8位 泉陽台
9位 泉陽台
10位 泉陽台
11位 泉陽台
12位 泉陽台
13位 泉陽台
14位 泉陽台
15位 泉陽台
16位 泉陽台



△ 第16回横浜国際チビ子サッカー大会 LL-A 準優勝

△ 新聞

8	8	7	6	5	4
63年度読売旗争奪読売少年サッカー春季大会 1次予選リーグ 1位 2次予選リーグ 1位 決勝T 4位 団地大会 新2年生 2位 新3年生 3位 第15回横浜スポーツ少年団サッカー大会 予選リーグ 1位 決勝T 2回戦負 第12回全日本少年サッカー大会県予選 ブロック優勝 中央大会 1回戦GPに惜敗 (GP県代表となる) 港北区ジュニアスポーツ大会 SL 1A 1回戦敗退 SL 1B 1回戦敗退 LL 1A 2回戦惜敗 LL 1B 2回戦惜敗 L 1B 2回戦惜敗 L 1A 優勝 たちはなキッカーズ夏季合宿 8/5~8/8					

▷ 第七回セルジオ越後杯記念大会
3位



◁ 読売少年サッカー春季大会

2	2	1	1	11	11	11	10	9	8	8
富士緑の休暇村で合宿 腰越(鎌倉)、矢崎(府中)、町田SS と親善試合 第14回関東団地対抗少年サッカー大会 L 1A、LL 1Aとも決勝T 1回戦 9月20日 バザー開催 第19回横浜国際チビ子サッカー大会 L 1A ブロック2位 決勝T ベスト8 鶴見川(亀島橋下流)河川敷 たちはな 専用グラウンド整備開始 第7回港北区ジュニアスポーツ大会 SL 準優勝 GP サッカーフェスティバル1年生大会 3回戦 第14回神奈川県少年サッカー大会 L 1A 1回戦 第13回横浜少年サッカー大会(新人戦) L 1A 1回戦PK負 藤沢市新人戦交流大会 L 予選リーグ 3位 3位バート優勝 第7回セルジオ杯記念サッカー大会 3位										

富士緑の休暇村 合宿



△ 班対抗試合



△ 飯合炊飯



△ ミーティング



△ 朝の体操

横浜市スポーツ少年団サッカー大会成績表

4月～7月

年度	回	クラス	優勝	準優勝	第3位	第4位	チーム数
49	1	LL SL	横浜東 横浜東	たちばな 銀嶺	山王谷 篠原つばめ	本郷 富岡ひばりが丘	8 4
50	2	L LL SL	洋光台 横浜東 横浜東	山王谷 たちばな 銀嶺	篠原つばめ 山王谷 篠原つばめ	たちばな 篠原つばめ 黒滝	19 13 9
51	3	J L LL SL	ヨコハマサッカー 山王谷 たちばな 黒滝	中和田南 たちばな 山王谷 公田	本郷 篠原つばめ 公田 富岡ひばりが丘	準 横浜東 富岡ひばりが丘 勝田	9 25 25 11
52	4	J L LL SL	ヨコハマサッカー たちばな 夏山 瀬ヶ崎	公田 横浜東 山王谷 本郷	たちばな 山王谷 たちばな 黒滝	洋光台 公田 富岡 篠原つばめ	7 29 27 16
53	5	J L LL SL	F C 本郷 たちばな たちばな 黒滝	たちばな 駒林 夏山 横浜東	エンタープライズ 山王谷 瀬ヶ崎 山王谷	洋光台 篠原つばめ 駒林 駒林	11 24 25 19
54	6	J L LL SL	YMCA 二俣川 たちばな 篠原つばめ 富岡	たちばな 横浜東 夏山 山王谷	南神大寺かもめ 駒林 瀬ヶ崎 本郷	勝田 山王谷 本郷 かながわ	8 32 30 20
58	10	L LL SL	本郷 山王谷 夏山	奈良 F C 野庭 野庭 K C	横浜東 夏山 あざみ野	たちばな かながわ 港南台	63 61 39

たちばなキッカーズ輝かしき足跡

横浜少年サッカー大会（新人戦）

2月～4月

年度	回	優勝	準優勝	第3位	第4位
51	1	山王谷	横浜東	たちばな	本郷
52	2	山王谷	たちばな	駒クリッパー J 駒クリッパー J	—
53	3	たちばな	山王谷	横浜東	篠原つばめ
54	4	たちばな	横浜東	駒林	山王谷
56	6	たちばな	港南台	F C 本郷	駒林
57	7	駒林	横浜東	山王谷	たちばな
58	8	山王谷	本郷	たちばな	黒滝

全日本少年サッカー大会（県大会）

年度	回	優勝	準優勝	第3位	第4位
52	1	善行	ゴール プランターズ	百合ヶ丘	たちばな
53	2	いずみ	たちばな	村岡	浜見 A
54	3	浜見 A	たちばな	村岡	大庭コンドル

スポーツテスト (合宿／記録)

注：㊦は年度を示す

年 度		リフティング 回	30メートル走 秒	ド リ ブ ル 秒	ス ロ ー イ ン m	プレスキック m
記 録	L	内 田 ⁵⁹ 884	永 長 ⁵⁹ 4.91	村 上 ⁵⁴ 19.60	小 栗 ⁶⁰ 19.9	谷 嶋 ⁵⁷ 35.8
	LL	柴田 ⁶² 305	武 貞 ⁶² 5.20	海 野 ⁶⁰ 20.11	内 田 ⁵⁷ 14.2	村 上 ⁵³ 30.5
58	L	(1)河本 ^充 205	(1)辛 5.10	(1)河本 ^充 20.00	(1)佐 藤 18.2	(1)鈴 木 34.6
		(2)伊 藤 189	(1)鈴 木 5.10	(2)佐 藤 20.80	(2)河本 ^充 17.3	(2)田辺 ^実 32.8
		(3)大 村 127	(1)山 本 5.10	(3)田 中 20.90	(3)田辺 ^実 15.3	(3)内 田 30.5
	LL	(1)吉 村 11	(1)大 野 5.80	(1)田辺 ^義 23.10	(1)三 橋 10.2	(1)吉 村 19.5
		(2)田辺 ^義 10	(1)芳 賀 5.80	(2)前 島 24.80	(2)大 野 10.0	(2)田辺 ^義 18.9
		(2)大 野 10	(1)草 野 5.80	(3)吉 村 26.00	(3)前 島 9.9	(3)室 伏 18.4
59	L	(1)内 田 884	(1)永 長 4.91	(1)野 里 19.98	(1)小 栗 16.3	(1)樺 沢 31.2
		(2)野 里 347	(2)笠 原 5.17	(2)配 野 20.00	(2)野 里 15.8	(2)仁 平 30.3
		(3)田辺 ^義 337	(3)田 中 5.21	(3)田 中 21.12	(3)田 中 15.3	(3)篠原 ^嶋 29.2
	LL	(1)吉 村 109	(1)松 崎 5.29	(1)吉 村 21.80	(1)伊 藤 13.5	(1)吉 村 25.6
		(2)海 野 32	(2)箕 輪 5.31	(2)窪 23.56	(2)福 谷 13.0	(2)福 谷 24.1
		(3)伊 藤 18 (3)草 野 18	(3)海 野 5.42	(3)伊 藤 23.64	(3)芳 賀 12.2	(3)草 野 22.9
60	L	(1)吉 村 224	(1)安 士 5.17	(1)伊 藤 21.00	(1)小 栗 19.9	(1)箕 輪 31.3
		(2)田辺 ^義 202	(2)大 野 5.22	(2)田辺 ^義 21.25	(2)伊 藤 16.6	(2)吉 村 31.0
		(3)丸 山 167	(3)伊 藤 5.30	(3)草 野 22.45	(3)福 谷 15.2	(3)丸 山 30.0
	LL	(1)海 野 34	(1)出 口 5.47	(1)海 野 20.11	(1)海 野 11.8	(1)内 田 23.4
		(2)出 口 23	(2)猪 狩 5.51	(2)十 河 23.39	(2)山 口 11.6	(2)田辺 ^貴 20.9
		(3)高 木 13 (3)猪 狩 13	(3)武 田 5.54	(3)山 口 24.50	(3)中 村 10.4	(3)海 野 20.9
61	L	(1)吉 村 392	(1)箕 輪 4.98	(1)草 野 21.08	(1)伊 藤 18.1	(1)箕 輪 32.7
		(2)越 前 320	(2)伊 藤 5.17	(2)室 伏 21.92	(2)福 谷 17.3	(2)福 谷 31.9
		(3)出 口 156 (3)十 河 156	(3)海 野 5.20	(3)海 野 21.97	(3)芳 賀 15.9	(3)吉 村 31.4
	LL	(1)秋元 ^洋 94	(1)辻 5.38	(1)猪 狩 22.47	(1)中 村 13.4	(1)秋元 ^洋 29.6
		(2)猪 狩 84	(1)今 西 5.38	(2)勝 田 23.17	(2)佐々木 12.8	(2)田 島 28.2
		(3)薄 木 81	(2)猪 狩 5.42	(3)大 輪 24.19	(3)秋元 ^洋 12.6 (3)田 島 12.6	(3)青 木 24.4
62	L	(1)十 河 211	(1)青 木 4.96	(1)海 野 19.95	(1)海 野 18.2	(1)秋 元 34.6
		(2)横 山 105	(2)出 口 4.98	(2)出 口 20.05	(2)田 辺 15.5	(2)田 中 33.5
		(3)薄 木 91	(3)世 良 4.99	(3)薄 木 20.53	(3)田 島 15.0	(2)海 野 33.5
	LL	(1)柴田 ^淳 305	(1)武 貞 5.20	(1)三 田 20.79	(1)鷺 津 12.6	(1)沢 田 25.0
		(2)吉 川 83	(2)沢 田 5.32	(2)森 本 21.81	(1)柴田 ^淳 12.6	(2)本 原 23.7
		(3)本 原 81	(3)中 田 5.40	(3)小 山 21.98	(3)吉 川 12.4	(3)鷺 津 21.2

横浜国際チビ子サッカー大会成績表

年 度	回	クラス	優 勝	準 優 勝	第 3 位	第 4 位	チム数
46	3	L LL SL	ク ス ノ 木 原 王 谷	原 (アポロ) た ち ば な 横 浜 東	朝 鮮 学 園 谷 山 王 原	山 王 谷	
47	4	L LL	G.プランターズ ア ポ ロ	た ち ば な G.プランターズ	St.ジョセフ 篠原つばめ	篠原つばめ 山 王 谷	9 8
48	5	L LL	ア ポ ロ St. ジョセフ	篠原つばめ 篠原つばめ	山 王 谷 St.ジョセフ 横 浜 東 た ち ば な		12 10
49	6	L LL SL	朝 鮮 学 園 た ち ば な 横 浜 東	F C ゴール 山 王 谷 銀 嶺	山 王 谷 横 浜 東 篠原つばめ	篠原つばめ St.ジョセフ 公 田	15 15 6
50	7	L LL SL	朝 鮮 学 園 横 浜 東 横 浜 東	篠原つばめ 山 王 谷 勝	駒 ち ば な 朝 鮮 学 園	洋 朝 鮮 学 園 黒 園 滝	21 18 17
51	8	L LL SL	横 浜 東 横 浜 黒	YMCA 横 浜 た ち ば な 公 田	た ち ば な 山 王 谷 横 浜 東	勝 公 勝 田 田 田	27 30 19
52	9	L LL SL	た ち ば な た 勝	横 浜 東 公 篠原つばめ	山 王 谷 駒 瀨 ヶ	勝 横 山 浜 王 東 谷	29 33 26
53	10	L LL SL	た 横 黒	横 浜 東 篠原つばめ 山 王 谷	山 公 駒	瀨 ヶ 崎 黒 本 滝 郷	30 34 26
54	11	L LL SL	朝 鮮 学 園 篠原つばめ 山 王 谷	横 浜 東 勝 田 ヶ か な が わ	た ち ば な 山 王 谷 港 南 台	YMCA 二俣川 た ち ば な 瀨 ヶ 崎	39 40 25
55	12	L-A L-B LL SL	た ち ば な 小 横 山	黒 横 浜 東 山 王 谷 駒 瀨 ヶ	勝 山 王 谷 YMCA 青葉台 黒 滝 滝	夏 洋 本 光 山 郷 山	22 27 42 29
56	13	L-A L-B LL-A LL-B SL	F C 本 郷 上 星 川 夏 庭 K C	港 南 台 F C 本 郷 港 北 F C 山	横 浜 東 西 山 王 谷 上 星 川 F C 野 庭	山 王 谷 F C フロー 駒 トライスター 洋 光 台	27 30 28 31 36
57	14	L-A L-B LL-A LL-B SL	F C 本 郷 富 西 黒 駒	F C 奈 良 大 崎 山 駒 王 林 王 谷	駒 大 瀬 曾 ヶ 岡 瀬 富 野 庭 K C	た ち ば な 野 庭 K C 夏 かな が 山	28 30 28 32 37
58	15	LL-B	F C 奈 良	た ち ば な A	ア ロ ー ズ	希 望 ヶ 丘	34
59	16	LL-A	夏 山	た ち ば な A	本 郷	野 庭 K C	38

記念に寄せて・コーチから

たちはなキッカーズ 二十周年を祝して

永田 欣也

たちはなキッカーズの二十周年を、関係者一同と共に、コーチの一員としてお祝いできるのを心から喜ばしく思っています。

創設以来二十年を経て、現在多数のOBが、日本リーグ、関東大学リーグ、高校全国大会、中学、県・市大会で活躍しているのを見聞するのは実に楽しいものであり、いつの日か、たちはなOBの「全日本チーム」でのプレーを応援に行けるのを夢見ている一人です。

たちはなキッカーズのお手伝いは、五十一年秋の横浜国際ちびっ子大会が初めて、第十及び第十一期OBが四年生と三年生の時で、L・L・Bチームの湘南桂台のグラウンドでのものすごい強風の下での試合は、楽しい思い出の一つとして忘れられません。

五十三年及び五十四年の二年続けての全国大会神奈川県予選二位を頂点とした、たちはなキッカーズの黄金期から見ると最近の戦績は決して華々しいものではありませんが、曾田監督の指導の下、たちはなキッカーズの特徴である、ミニ大人サッカーでない、子供が自分で考えて動くサッカーでの、あらたなる黄金時代を期待しています。

始め十年間はL・L・Bチームの、現在はL・Bチームのお手伝いをしていますが、たちはなキッカーズを代表するAチームに選ばれなくても、一人でも多くの子供達が、サッカーが好きになり、その面白さを覚え、のびのびとサッカーを楽しむよう指導していきたいと念願しています。但しこれはたてまえで、試合に敗ければ子供達よりカッカして何とか勝つよう、あれこれと子供達にはできない戦術、高度のプレーを要求してしまうのが実情です。これを機に初心に立ち戻り子供のレベルに合せての練習試合の指導を考え、たちはなキッカーズのより一層の発展に寄与したいと思っています。

私のサッカー観

佐野 仁

たちはなキッカーズ創立二十周年おめでとうございます。

一口に二十年と言っても生れた子供が成人式を迎えるまでの歳月になるので色々歴史もある。その歴史の中で、私の一番の思い出は、五十三年・五十四年の全日本サッカー大会県予選で優勝を逸して準優勝となり全国大会に出場できず涙をのんだのが一番の思い出である。あれからもう十年も過ぎていくのに昨日のように一つ一つのプレーまで時々思い出されます。

たちはなキッカーズを創立した四十三年にメキシコオリンピックで日本代表が銅メダルを獲得した。それ以降日本もサッカー人口が増加し、それに連れ底辺は広がってきた。

子供の頃は南米やヨーロッパと試合をやっても差はないが、高校・大学・実業団(全日本も含む)に連れて差が出てくる。これは何故原因か? ……キリンカップで来日したブラジルのフラメンゴチームのジーコ選手が全日本

夢をもとう

大島 勉

たちはなキッカーズが、創部以来ここに二十周年を迎えられたことを、心からおよろこび申し上げます。

人生にたとえれば、成人式を迎えた記念すべき年であります。あらためて曾田さんを初めコーチの方々、先輩OB、それにお父さん、お母さん達の御協力の賜物と感謝致しております。

それに加え、何といっても主役は子供達であります。たちはなキッカーズの「信条」であります「のびのびサッカー」「楽しむサッカー」に憧れて入部されて来る子供達、そして一方では毎年必ず卒業する子供達、この積み重ねで二十周年という重い伝統を築き上げたものと思います。私もこの「信条」に基づき微力ながらこれからも協力させて頂きたいと思っています。

さて、日本のサッカー界は今、二十一世紀に向け大きな夢を膨らませようとしています。それは二〇〇二年に日本で「ワールドカップ」を開催しようという大きな夢であります。そして、これが実現するとなれば「ワールドカップ」の主役となる選手は、この記念すべき二十周年に卒業する子供達であります。「夢がないとやる気がおこらない」と言われています。これから果立つ「たちはなキッカーズのイレブン」には、これ以上大きな夢はないと思います。夢に向って大きくはばたいてほしいと思います。そして、「たちはなキッカーズ」としての夢である全国制覇に向け子供達共々ががんばっていきなさいと思います。

そして、「たちはなキッカーズ」二十周年を起点として、これから三十年、四十年と伝統を引継ぐために、ぜひとも、OB先輩の諸君、下田小学校に



選抜に対して、スピードと体力はあるが、基礎的な技術がない。正確なトラップ・パスができないうちにスピードサッカーを目指しても無理であると指摘している。これは私も同感である。子供のうちにサッカーの基礎であるドリブル・トラップ・ヘディング・キック・ボールを持たない時の動き・ディフェンス・遊びの中での練習等々を踏えて充分教えていく必要がある。

私の一番嫌いなのは子供の試合中サイドコーチを行い、子供の考えているサッカーをやらせず、指導者の考えているサッカーをやらせて勝てば喜んでいたりことや、試合中に失敗すると大声で怒り、試合が終ると、なぐる・ける等している指導者をよく見かけるが、もっての外である。子供達はチームのためになるようにみんな努力しているのが、たまたま失敗しただけのことであり、逆にチームのために努力したことをはめてやっても良いのではないか、子供に怒って教えるも萎縮するのみでプレーの失敗はあっても好プレーにはつながらないと思います。のびのびサッカーをやらせることにより試合で百パーセントの力を引き出すことにつながり、好結果を得ると確信しています。

私のサッカー観は以上であります。これをモットーにたちはなキッカーズのために微力ながら努力していきたいと思っています。

集合!! 最後に、二十一世紀に向け「たちばなキッカーズ」の益々の発展と、大きな夢に向け挑戦を始めよう。

たちばなと私

前 島 宏 行

創立二十周年おめでとうございます。

私と「たちばな」とのつき合ひも、十年目を迎え感無量といったところで、中学・高校と浦和で過ごし、サッカーと一緒に育ったといっても良い環境にあった私が再びサッカーと出会ったのは、昭和五十三年、長男が四年生の秋に入団した時である。サラリーマン生活を十数年続けるうち、お定まりの如くゴルフを始めたが、なにか納得のいかない日々を送っていた頃でもあった。ある日、練習を見学していた時に、長男がお世話になっていたL.L.B.の永田コーチに声をかけられ、大人対子供の練習試合で走ったのが、親子ともどもサッカーに明け暮れることになったきっかけである。その頃は、まだ一人の少年の父親として練習の見学をしたり、試合の応援に行ったりしていたに過ぎなかった。二年後に次男のチビが一年生ではあったが、お願いしてメンバーに加えていただき、兄弟そろってお世話になることになった。

昭和五十七年に、お奨めに従って、私が四級審判の資格を取得すると同時に、曾田監督初め先輩コーチの皆様にすめられ、コーチ陣に名を連ねることになり、一家総出演でサッカーにどっぷりの生活が始まったのである。このころから団員も増え始めSLチームが結成されることになり、永田コーチ流にお父さんを一本釣りで引きつり込み、今の若い(?)コーチ陣の布石ができていった。

た。なによりも子供達を愛し、その情熱こそが子供の心を動かし、強い絆で結ばれ信頼されていると考えます。子供達一人一人の個性を充分に発揮させ伸ばしてやるのがコーチの役割と教えられました。

SLを担当六年目、今年も可愛い一年生が入ってきました。みんなに、「たちばなに入った理由は」と聞くと、サッカーはおもしろいから、友達やっているから、兄ちゃんがいるからと、色々言っています。中にはプロになりたいから入りましたと言う子供もいます。でも最初は靴のヒモも結べないワンパクばかりです。ボールの蹴り方からスローイン、ルールを教え、たまには手洗いの世話等、教えることは山程あり、SLはそれは、大変です。しかし半年も経つとコーチへ、リフティングが5回できるようになったことやフエイントができるようになったと自慢気な顔をして見せに來ます。このような時はコーチとして本当に嬉しいのです。

SLチームができてから五年間の公式戦では、一度も優勝はありませんが、子供の楽しいサッカーをやっている姿を見ていると、一人一人の個性が良く分ります。自分のボールをすぐ味方に渡す子「優しい子」、味方のボールを横取りする子「ガンバリヤ」、ボールがくるとすぐ蹴る子「怖がりや」、みんなと一緒にタダ走る子「いたずらっ子」と色々個性を持って一生懸命です。一年もたつと個性が活かれ、上達へと変わり、サッカーが益々おもしろく楽しくなってきました。SLの間は、基礎練習を重点に置いて、個性を伸ばし、楽しいサッカーをすることが子供達に一番良い方法であり、コーチと子供の信頼関係ができていると思っています。

二十周年を記して色々書きましたが、子供達一人一人の個性を引き出して伸ばしてこそ楽しいサッカーができるのではないのでしょうか。これからも曾田監督のもと「たちばなキッカーズ」を盛り上げていきたいと思っています。

この若いコーチ仲間で、しばしば話題に上るのが、サッカーの基本とは何かということである。敵陣に向って走り、敵のゴールにボールを蹴り込む。先ず走る、敵より先にボールに触れ、敵の守備をかわし、ゴールにボールを運ぶ。キレの良い出足、横へのゆさぶり……。これからも、この基本を子供達に身につけてもらい、練習の成果を実戦で活かし、少しでも口惜しい思いをする機会を減らして、うまいビールを味わうことが唯一の楽しみとなってしまった今日この頃である。

二十周年を迎えて

子供達一人一人の個性を大切に

田 辺 昭 治

たちばなが、昭和四十三年下田に生まれて二十年、第一期生が五年のときですから、当時の一期生は今三十一歳の誕生日を迎えています。この歳月を考えただけでも大変な歴史と伝統のあるクラブチームであると思います。ましてこの二十年間サッカー一筋に「たちばな」を育て築き上げた曾田監督の功績は絶大なものであります。

私も「たちばな」にお世話になる事、七年がたちました。最初は、一人の父親として子供の応援やら、選手の送り迎えを手伝っているうちに、いつしかサッカーに興味を持ち子供達のコーチをするようになりました。当時は、SLは有りませんでした。私がコーチを引き受けた翌年にSLが発足致しました。SLのコーチとして指導する時、曾田監督より「たちばな」の指導方針を聞き、大変素晴らしい考えの持主であり抱擁力優れた人と思いまし

君達は有名選手

末 山 本 村

ドリブル、グラウンド五周とコーチの笛が鳴る。練習のはじまりはまずドリブルである。サッカーで一番大切なことは足とボールを仲良くさせること。すなわちドリブルだと思います。練習する場所は車の通らない道路や家の庭でいいよ。毎日練習するように心掛けよう。それからトラップ、ヘッドイング、キックと色々あります。君達が今やってほしいことは前記の技術面のこと。

小学生の頃身につけた技は大人になっても身体がおぼえています。からだ小さい、足がおそい、力がない、これは成長と共に変わってきます。だからそんなことはあまり気にせずに、まず技をみがいて下さい。中学・高校のころには、からだも大きくなり、キック力も強くなり、走力も速くなり、そして、たちばな時代にみがかいた技がかみ合った時に、君達は日の丸のユニホームを着て、国立競技場でプレーできる可能性を持っているよ。だから今のうちにたくさん練習をして技をみがいて下さい。

それともう一つ、五・六年生でレギュラーになれなかった君達、良く聞いてほしい。最近日吉台中では、サッカーマンが多く、サッカー部には入れてもレギュラーになるのはとてもむずかしいそうだ。そこで特筆したいのが、たちばなでレギュラーでなかった君達の先ばいのがんばりだ。たちばな時代にみがかいた技術に加え、中学へ行ってからパワーアップにつとめ、一回りも二回りもたくましくなり、レギュラーの座を勝ち取った先ばい達もいるよ。またとてもむずかしいと思われたキャプテンになった先ばいもいるよ。君達もこの先ばい達を目標にしてぜひがんばってほしい。何ごととも一生けん命に

努力すれば、いつかはチャンスがくるよ。中学・高校・大学・日の丸と目標はいっぱいだよ。

「さあガンバレノ」、「さあガンパローノ」を合言葉に。

最後になりましたが、たちばなキッカーズ二十周年を心よりお喜び申し上げます。

たちばならしさ

南 間 正 次

たちばなキッカーズ創立二十周年おめでとうございます。

地域スポーツクラブとしての発展に尽力をつくされてこられた、監督をはじめ諸先輩並びに御父兄の方々に對し、心から敬意を表します。

二十年の歩みの中の何分の一かを携わっているだけではありますが、その幾分かに触れることができたと思います。いろいろな大会等で知り合ったチームの監督、コーチの方々から「たちばなさんのサッカー」という言葉を耳にする。その度に「たちばならしさ」とは何かを考えさせられるが、その一例として、夏の合宿で低学年から高学年までを一緒にした班別対抗試合があると。学年差を越えたチームワークを生み出し、全員が夢中になり、力いっぱい頑張る、中には普段目立たない子供が、周りから、びっくりするような力を出したり、練習ではなかったことのないプレーを決めたりする。また、各班がそれぞれ子供達だけで考え、工夫をこらしている。そこに、たちばなの伝統が受けつがれ、一人ひとりに「たちばならしさ」が芽生え、育てられるのではないのでしょうか。

終わりに、二十年は人間で言うならば成人ですが、遠からずきっと「たち

ばな二世」が入ってくることでしょう。二十周年を一つの節目として、これからも他のチームの目標となるよう発展させていただきたいと思ひます。

サッカーにたずさわって

村 松 理 雄

たちばなキッカーズ創立二十周年、おめでとうございます。

私がたちばなキッカーズに御世話になるようになってから三年、コーチとしてもたちばなの一員としても、若葉マークがとれません。すばらしい伝統や歴史、さらに子供達への指導方法などまだ良く消化できず、ただおもしろさだけで過ごしてきた感じです。

これからが、スポーツや、サッカーについての勉強だと思っています。私がサッカーを知り、本気になってやり始めたのは、中学生の頃からでした。くる日もくる日もサッカーという生活です。苦しい練習や泥んこ試合の中では、やめようと思ったことも、二度や三度ではなかったはず。でもそのつらさが、逆に楽しさを感じさせてくれたのです。サッカー仲間と過ごした日々は、今でも忘れられない貴重な経験となっています。

私自身スポーツを観るのも好きですが、まず自分で身体を動かして、やってみるの方が、好きだったのです。皆さんも一つのスポーツだけでなく、多くのスポーツを体験し、汗まみれになって、夢中になって取り組んでいてほしいと願っています。

サッカーは一人ではできません。チームのメンバーとの協力、頑張りだと思ひます。私もたちばなの皆さんに教えられ、励まされながら、何十年前の若さのつもりで、グラウンドをかけまわりたいと思っています。

SLと共に

柴 田 幸 吉

新しい大きなボールを抱えて、ピカピカのコーチャーを見せびらかしながら、ちょっとどぶだぶのユニホームを着て不安そうにグラウンドに立っている一年生。

毎年四月、五月になると未来のマラドーナが何人か入ってくる。この小さなマラドーナ達と土、日グラウンドで遊んで早くも四年がたちました。試合中に虫を追いかけたり、砂遊びをしたり、転んで泣いたりしていた一年生も、二年になる頃にはそれらしい顔つきをしてくる。グラウンドいっぱい暴れまわり、声を出して指示をしたりして、オリンピックやワールドカップに出ているサッカーマン達も子供の頃はこんな風に元気だったんだな、とはほえましい。コーチ達に悪戯をしたり、ちょっかいを出してくるものこの頃からで試合もサッカーらしくなってくる。こうやって子供達が生まれて初めてサッカーに触れ楽しんでる、その心と体の弾みが直に伝わってきてこちらも何ともいえずうれしくなってくる。

私は、この子供達に思いっきりグラウンドで暴れてもらいたい。体を使い頭を働かせ汗を流す楽しさを知って欲しい。そう思いつつ、子供達とサッカーの出会いを見つめています。



がんばれ、たちばな

田 島 直 樹

たちばなキッカーズ創立二十周年、おめでとうございます。監督をはじめ、コーチの方々ごろうさまです。

ひと口に二十年といいますが、十年ひと昔で、ふた昔、オギャーと生まれた赤んぼうが成人式を迎えたということで、たちばなキッカーズも成人として、他のチームの手下になるべき立場です。はたして成人としてのチームになりえたでしょうか。昔のたちばなキッカーズは強かったと、よく耳にしますが、それでは現在のチームが弱くなったのでしょうか。いや、技術的には決してひけをとらないと思います。では、なぜ良い結果が得られないのだろうか。それは精神力の差ではないでしょうか。ゲームに負けたくやしさを出さない、絶対に勝つのだという気持を表に出さない、いや、出せない子供達のように見うけられます。御存じのようにサッカーは格闘技といわれています。勝つか負けるかの勝負です。参加するだけではだめです。出場した以上その大会の頂点を常にめざしてもらいたいものです。コーチとして子供の親としての気持です。

ただ我々コーチの根底に、サッカーを楽しんでもらいたいという気持は変りません。だが子供達には、頂点をめざす努力を是非してほしいと思ひます。がんばれ、たちばな。めざせ全日本、めざせ日本一！

負けないものをひとつ

内山 義嗣

チョウチョウサンバ、ジグザグサンバ、軽快なリズムにのって、テレビの画面に、翼君が登場したのは、もう五、六年前になるのだろうか。我が家の子供も、アニメから、サッカーというスポーツを知った。

土曜、日曜になるとオレンジ色のユニホームの子供達が下田小学校のグラウンドで、楽しそうにボールの奪い合いやシュート練習の姿を見ながら、サッカーも格闘技だと感じた。世界一強いマイク・タイソンは、積極的に前に出るタイプ。それは、ワンパンチで相手を倒す力があるからであり、モハメド・アリは、足を使い、体の柔軟性を活かし、フェイントをかけ、相手の疲れた頃に、ストレートパンチを出して倒す。それは自分の得意とする技術を、ひとつ身に付けることにより、最大の武器にもなり、守りにもなるのではないだろうか。

一人一人が得意とする技術を出すことにより、勝利へと導き、勝っても負けても、十一人で喜びや悔しさも分け合い、ひとつの目的に向かっていく緊張感。まだ、いろいろあると思いますが、これからも末長くサッカーを愛していくことはありませんか。



二十周年に寄せて

佐藤 敬

私たちはキッカーズ創立二十周年、お目出とうございます。

この二十年、ひとえに曾田監督を始めとして先輩コーチ、御父母の日々の御指導、努力によるものであり、この時期にコーチの一員として籍を置かせていただいていることを誇りに思っております。

私とサッカーの出会いには子供がたばなにお世話になってからであります。それまでは剣道をやってきており、棒（竹刀）をボールに代えて、言葉では良く似ておりますが実際は似ても似つかぬもので、健闘しております。

昨年全日本は、ソウルオリンピック出場への予選にて惜しくも敗れました。また、たちばなの各種県大会の戦績を見ますと、十年前は華々しいものを残しております。この二十周年を機会に心機一転して試合での優勝を目ざすべくがんばりましょう。

そして二十五周年、三十周年を迎えたいと思います。

少年サッカーの審判の工夫

（二級審判員） 中 林 由 行

「今日のレフリーは、ひどかった。全然反則をとってくれなかった」「あの線審はオフサイドがわかっていない」「レフリーの間違った判定で負けてしまった」などなど、少年サッカーではコーチや父母の間でレフリーに対す

る不満がよく聞かれる。それらの半分は負けた側の八つ当たりといえなくもないが、残りの半分はレフリーの未熟さへの正しい指摘でもある。ここでは少年サッカーのレフリーをめざす人に役に立つと思われることを、私の経験からいくつかあげてみたい。

① ボールを見ないで、先を予測する

レフリーをやっていると、どうしてもボールとボールを持っている選手に注意が集中してしまう。これでは視野が狭くなっていい判定がむずかしくなる。主審も線審もボールを持っている選手と同じ立場に立って、次にどこにボールを出そうか、と考えることが大切である。そうすると広くグラウンドを見まわしてパスを受けられる選手を捜さなければならない。これを訓練していくとだいたい次にパスを受ける選手がわかるし、そこで起きそうなオフサイドとか、プッシングとかいう反則も予想できるようになる。もちろんボールを持った選手に相手側が急速につめよっていったような場合は目を放してはいけないが、大部分の場合、試合の展開を読んで、目を先へ先へと転じることで自分でも驚くほど楽に判定できるものである。

② 故意でなければ反則ではない

足が引かかっても、ボールが手に当たっても故意でなければ反則ではない、というのは誰でも知っていることである。そこで少年サッカーでは故意というのとはとんだいから、あまり反則としてとらない方が良く、という意見も出てくる。またやった本人が、今のは故意ではなかったということを実証できれば反則でなくなるという考えも出てくる。しかしこの「故意」というのは主審が故意と判定した場合ということで、必ずしも本人の意志の問題ではない。例えば本人はボールにさわれると思ってタックルしたらわずかに遅れて、相手の足を引っかけてしまったという時、主審が、本人が全く間に合うと思っていただけと判断すれば、それは反則ではない。しかし頭の半分にでもひよっとして間に合わなくて足に引っかかってしまったかも知れな

いな、という考えがあったはずだ、と判断すれば笛を吹くべきなのである。

③ オフサイドはボールの方向を見きわめてから旗を上げる

線審の判定で一番問題になるのがオフサイドである。ひとつは、体が出ていなくても、後から二人目の相手側選手と一線に並んでいる選手はオフサイドの位置にいるということ。特にゴール前のフリーキックの時、バックのラインと同じ位置に選手が立っていてキックがされたら直ちに旗を上げなければならない。もうひとつは、オフサイドの位置にいても、その選手と反対サイドにパスが行った場合は旗を上げないということ。だからボールの飛んだ方向をよく見て、オフサイドポジションの選手の方向にいった場合だけ旗を上げるようにする。

④ 主審と線審の打合わせと協力

大人の試合では試合前に主審と線審がきちんと打合わせをするのが普通である。少年の場合はあまりやられていないが、いつもやるように心掛けるべきである。その内容はルールに書いてないような、それぞれの個性にまかされているような審判技術上の相互理解が主になる。例えば「ペナルティアエリア内の反則の合図を線審がするかどうか」「クリアされたと思われるボールが実はゴールラインを一旦越えていて得点であった場合の合図」「ペナルティライン近くの守備側の反則が、ラインの中であったか外であったかの合図」「終了数分前の合図」「ロスタイムをとっている時の合図」「主審がオフサイドの旗を見落した場合の処置」「スローインの方向が主審と線審で違っていた場合の処置」などなどである。この打合わせを充分やっておくと、ほとんどのトラブルを避けることができる。ただし主審と線審は常に顔を向け合った位置にいてこまめに交信をしていることが必要である。

⑤ ボールの見やすい位置に走り込む

少年サッカーのレフリーングの悪い例として最も多いのは、ボールがどこ

にあらうとも、グラウンドの中央部近くに立ったままのレフリーが笛を吹いている姿である。多くの反則は真横の位置からが最も判定しやすいから、いい判定をしようという気があるならば、その位置に走り込まなければならぬ。またゴール周辺の判定は勝負に重大な影響を持つので、遠くからそこを判定するなどというズボラは許されない。少年サッカーはグラウンドも小さく、時間も短いだから労力を惜しむ理由はないはずである。

⑥ 教育的配慮とは

少年サッカーではよく「教育的配慮」というようなことが言われる。どうも大人と違う判定方法があるべきだ、というような意味に聞こえるが、よく理解できない言葉である。子供を将来いいサッカープレーヤーになるように育てなければならぬことは当然である。そのためには反則は反則として、きちんとやってやるのが大事なので、下手な審判は子供をスポイルすることに一役買っているとも言っても言いすぎではない。ただ子供がおびえるような笛とか、おかげさなジェスチャーはやめた方がいいし、笛を吹いた時に何で反則になったかわかっていないような子供には、一言声をかけてやった方がいいと私は思っている。

⑦ 線審は主審と同じ気持で

線審をまじめにやると主審よりも精神的に疲れる位、集中を必要とする。オフサイドをまず絶対に見逃がさないようにしなければならぬのと、ライン際の出そうなボールと、そのボールをはさんでもみ合う選手の反則のすべてを判定しなければいけないケースが多いからである。オフサイドは、目でオフサイド近辺の選手を見たままで、パスされた瞬間のキックの音を聞いて判定することもできる。ボールは大部分がラインの外に出ていても、少しでもラインにかかっていればまだインプレーである。選手の反則を判定する時は、自分は線審でなくて主審であると思って見ているとやりやすいものである。

⑧ 笛は原則として反則の時だけに吹く

ボールがタッチラインを割るたびに笛を吹くレフリーをかなり見かける。笛は原則として反則があった場合に吹くものであって、それ以外の時にやたらに吹くのは混乱のもとである。ラインを割ったのに選手がそれに気がつかない場合だけは笛を吹く必要がある。またインプレー中に子供の何かのプレーに対して注意を与えるつもりで、ピッピと軽く笛を吹いてそのままプレーを続行させる例があるが、インプレー中に笛を吹くということは、プレーを止めるという合図であり、そのまま流すということはあり得ないことを知っていただければならない。

⑨ 姿勢を正しジェスチャーを大きく

レフリーが美しく見える時、それは背筋をシャンと伸ばし、ジェスチャーでの腕がきちんと伸びている姿である。フリーキックの方向を示す時、コーナーやゴールを指す時、間接フリーキックを示す時、警告のカードを出す時など、所定の角度に必ず腕を伸ばして、明確なジェスチャーをしなければならぬ。

⑩ サイドコーチとサイドクレームをやめさせる

少年サッカーの悪癖は試合中の子供に対する監督などのサイドコーチである。中にはコーチというより、子供に対する罵声という方がびつたりする場合も多い。これは禁じられていることであるからレフリーは注意すべきである。聞かない場合はグラウンドの外に追い出してもかまわない。もうひとつは、やはり監督などが試合中に審判の判定に大きな声で文句をつけたりすることがある。これも非紳士的な行為であり、直ちに注意を与える必要がある。

以上思いつくままに書きましたので、順序・内容にまとまりが欠けることをお詫びします。私自身も最初、サッカー少年の親として四級からスタートし、今は二級になったのですが、レフリーというのはやればやるほど、むず

かしく、またやればやるだけ進歩するものだ、ということを感じています。レフリーは判定でミスすればする程早く上達するものです。どうかミスを恐れず、また同じミスを二度繰り返さないようにして下さい。

最後になりましたが、監督・コーチ・父母の皆さんのおかげで、たちはなキッカーズが二十周年を迎えたことは大変素晴らしいことだと思います。私もその一員として、これからも、たちはなを子供だけでなく、父母・OBを含めて皆で楽しめるクラブにしていこう微力をつくしたいと思います。

独自の方針を模索し トップレベルを目指す

神奈川県協会第4種(少年)委員長

橋本良雄

神奈川県少年委員会の発足時

昭和39年の東京オリンピックを契機として、日本全国に各スポーツの発展・普及、底辺の拡大が叫ばれてきた。日本スポーツ少年団の発足もその一端であった。

神奈川県下でも、少年サッカー教室が開か

れたり、ゴム製サッカーボールを無償で配ったりしたという。

横浜、藤沢、小田原、鎌倉の地域で、少年サッカーチームが誕生したのも、そのころであった。

昭和42年、第1回スポーツ少年団大会の開催。日本サッカー協会の要請で片岡次夫氏が

神奈川県JSCを参加させたのは、昭和44年である。

その後、片岡氏(現協会顧問)、関根智治氏(現協会副会長、岡野寧夫氏(現協会理事)らの努力で県大会を開催するまでにこぎつけた。

スポーツ少年団の傘下で広がっていった少年サッカーは、夏の全国スポーツ少年団大会の他に、もう一つの県大会、それも県サッカー協会のもとで結束を深めたいという要望を生み、昭和49年10月12日に、藤本隆明氏(現横浜協会理事長)の呼びかけに、堀内正明、曾田弘治(横浜)、関根智治、小野隆弘(藤沢)、島森五郎、岡野寧夫(鎌倉)、尾崎恭一(小田原)、小瀬村博(南足柄)、小俣基行(厚木)、杉本実(相模原)らが応じた。これが神奈川県サッカー協会第4種(少年)委員会の発端である。

昭和50年3月、第1回少年選手権が、県協会の行事として開催された。

昭和50年4月、県協会に少年部として登録。チーム数は107。当時の登録料は、500円。協会から5万円の補助を受けた。それらの予算で、大会事業が運営されていた。(この部分、スポーツコミュニティさわやかなの記事より抜粋)

たちはなキッカーズを 振り返つて

二十年前のあの頃

一期 村上 三紀夫

今年がソウルオリンピックの年、ちょうど二十年前はメキシコオリンピックの年であった。日本がサッカーで銅メダルに輝き、その頃は野球にかわってサッカーがスポーツ好きの活発な少年達をとりこにしつつあった。私もその一人であった。

小学校五年生の時である。それ迄は多分にもれず、野球オンリーで、放課後毎日のように仲間と遊んでいた。サッカーについては無知であり、ただ目茶苦茶にボールを蹴っていただけであつた。それゆえ、ボールを他の奴に奪われようものなら、血相をかえて追っかけていき、当時、テレビではやってたキックボクシングの真空飛膝蹴りのまねごとをして奪い返すというようなことをしていた記憶がある。それでもサッカーが好きで集まった仲間と毎日授業の間の五分休みも惜しんで校庭で走りまわっていた。

そんなある日、同級生の一人の女の子が、彼女のお父様がサッカーを教えてくれるというありがたい話を私に持ちかけてくれた。その女の子が曾田葉子さんだったのである。仲間を誘い、休日の朝早くに初練習が始まり、こうして『たちはなキッカーズ』が誕生した。それからは、休みのたび曾田監督

のもと、全員一丸となって練習を積み、対外試合には連戦連勝、今のたちはなキッカーズに勝るとも劣らないチーム……と言いたいところだが、実際は、敗けた方が圧倒的に多かったと思う。しかし、練習は楽しく、曾田監督が、自由な雰囲気のもと、遊びながらいろいろコーチしてくださり、日曜がくるのを毎回来しみにしていたと思う。

話は戻るが、今回の二十周年の原稿依頼の件で、大変御無沙汰していた曾田監督の元気なお顔と変らぬジャージ姿を拝見でき、大変うれしく、なつかしく思った。あのオレンジ色のストッキングや、曾田監督の愛車で、私達をベレ、釜本、杉山といった名選手の試合を見に連れて行ってくれたこと等、二十年前のことが断片的ではあるが、いろいろ思い出されてくる。たちはなキッカーズが大変強く、有名になっているということも以前耳にしていたが、その時いただいた十五周年記念誌を読んで、その素晴らしい戦績と充実した活動にあらためて驚くとともに、曾田監督の偉大さを感じた。

私は高校の時、当時、やはりブームになりつつあったテニスを始め、クラブを仲間とつくり、大学でもテニスに明け暮れていた。特にサッカーが嫌いになった訳ではないが、その時自分を夢中にさせてくれるスポーツを常にやってきたように思う。特に、小学生の頃は好きなことは走りまわっても疲れを知らない面もあり、また、スポーツの基礎的な感覚が養われる時期だと思ふ。サッカーをやったことで、足腰はもちろん、バランス感覚や、フェイントのタイミング、相手の動きをボールを見ながらとらえるなど、大いにテニスにも役立っている。そしてなによりも、小学生時代を楽しく送れたこと、スポーツの楽しさを味わえたことをうれしく思っている。

書き遅れてしまいましたが、創立二十周年を迎えられたことを心から御祝申し上げるとともに、今後の尚一層の発展を期待しております。

最後に、この場を借りて、曾田監督をはじめ、当時お世話して下さった御家族や関係者に一期を代表して深く感謝致します。

サッカーを始めたころの思い出

三期 町田 宏

たちはなキッカーズ創立二十周年おめでとうございます。

私は小学校五年の時に東京から転校してきましたが、それまでいた小学校では野球が全盛で、サッカーは誰もやっていませんでした。ですから初めはサッカーのおもしろさがわからず、野球をする仲間を探して何とかみんなが野球をするように仕向けようとしていました。しかし担任が池畑先生であつたこともあり、だんだんと興味を持つようになりました。五年生をレベルごとの三チームに分けた時も、私は最初一番レベルの低いCチームに入っていました。サッカーを遅く始めたためか興味が長続きし、また技術が向上するにつれて自然に練習に熱が入り、その後Aチームに入ることができました。

五年の時は敗けた試合も多かったと思いますが、曾田監督や池畑先生をはじめとする先生方の指導により、チームは確実に強くなっていきました。以前大差で敗けた相手に再び対戦し勝ったこともありましたが「俺たちがたちはなに敗けるはずがない」と思っていた相手の顔色が変わっていくのを見たときはとても愉快に感じました。

不利なゲームは相手チームの人数が自分たちよりも多くいるように感じるものです。走り負けているため、相手より遅くボールの位置に着き相手のマークをはずす動きもできません。パスを出そうとしてもまわりは敵ばかりという感じで囲まれるわけですが、これも六年の時の試合では囲むことの方が多くなりました。

シュートや確実にパスをするための正確で距離の蹴れるキック力。相手を自分に引き寄せてフリーの味方を作るためのキープ力。どんな強いボールで

も一瞬で止めて素早く次のステップに進むためのトラップ。私たちの時と比べて今の子供たちはこれらのことはずいぶんうまくなっていると思います。

またちょっと変わった思い出として、夏休みに慶応大学のグラウンドに行つて毎日練習を見ていたことがあります。舞山君と一緒にいたのですが、当時全日本の代表メンバーだった選手もいて、試合や厳しい練習を見たりいろいろ教えてもらったりすることができ大変役に立ちました。

たちはなでの一番の思い出は県大会の準決勝で敗れた時のことで、私がサッカーで泣いた最初の時のことです。PK戦で惜敗したのですがベンチに戻ってきてしばらくは何も言わず、全員がぐちゃし涙を流していました。どこにこんなに涙がたまっているのだろうかと思うくらい涙がでました。とにかく無念でなりませんでしたが、この涙でチームワークがより強くなったことは確実で、この時のメンバーは中学に行つても堅いチームワークでサッカーを続けることができました。

たちはなキッカーズで多くの思い出を作らせていただき本当に感謝しています。今後益々発展し、少年サッカーをさらに盛り上げていただきたいと思います。

楽しむサッカー

四期 石村 泰三

何がきっかけだったのか、すっかり忘れてしまったけれど、いつの間にかキッカーズのメンバーになっていた。五年生の後半だったように思う。それまで野球一辺倒で、サッカーなど興味もなかった私だが、六年生になる頃には、キッカーズの練習日はもちろん、他の日でも、暇さえあればボールを蹴り、

サッカーマガジンを愛読する（もともとこれは、付録のポスターが目当てだったのだが）いっばしのサッカー少年に変身していた。

なぜ、短期間のうちにあれほどサッカーに熱中するようになったのか、今振り返ってみるとよく分かる。たちはなキッカーズを通して、私はサッカーの基本を教わったけれど、それ以上に、サッカーを楽しむ心を教わったのである。

一口にサッカーを楽しむ、といっても、その楽しみ方はいろいろあると思う。走り、蹴り、体ぶつけ合って戦うスポーツとしてのサッカーの楽しさ。あるいは、どのように試合を組み立て、いかに相手の裏をかくか、という点からいえば、知的ゲームとしてのサッカーの楽しさ。さらには練習や試合を通してチームワークを培った仲間と、サッカー以外の場でも付き合う「アフターサッカー」の楽しさ等々、数え上げればきりが無い。

たちはなキッカーズは、いつでも自由で、のびのびとした雰囲気があったので、練習に参加していると、そういった様々なサッカーの楽しみ方が自然と身に付いていくような、そんなチームカラーを持っていたように思う。だからこそ、ますます練習が楽しくなり、練習すればするだけ、サッカーが好きになっていったのではないだろうか。そんな具合に、サッカーを楽しむ心を教えていただいたことに對して、曾田監督をはじめ、池畑先生や中山先生には感謝している。

現在のたちはなキッカーズに、どれ位の人数がいて、どんな練習をしているのか、残念ながら分からないが、OBの一人として、現役の、そして未来のキッカーズ諸君に言いたいのは、「サッカーを楽しむ心を忘れるな！」ということだ。技術的に上手になったり、試合に勝つ、というのも大事なことだが、もっと大事なことは、サッカーを好きになること、いろいろな形でサッカーを楽しむことだと思う。サッカーに限らず、何にせよ、まず楽しむこと、好きになることがなければ、決して長続きしないだろうからである。

気分は今でも思い出される。その日の最後に行うゲームも楽しかった。

サッカーに夢中になり、ほとんど勉強もせず、塾へも行かず、スポーツもサッカー一筋であった。このたちはな時代からいえることは、今でも語れる楽しい小学生生活を送ったこと。もう一つ、高校からサッカーをやめバドミントンに転向し、高校バドミントン部、大学バドミントン同好会とも主将を務めました。これは、ひとえに、たちはなで四年生からキャプテンをやらせてもらったことがみんなをまとめ、ひっぱっていくことができた大きな理由だと思っている。また、どんなスポーツでも、共通すると思うが「相手のプレーをよむ」、「相手の逆をつく」、「自分のゲームを組み立てる」ということは、大変重要だと思うし、その力を培ってくれたのがたちはなであり、サッカーであった。

私のサッカーとのつき合いは、中学校を卒業してから体育の時間以外はありません。サッカーをやめた理由は、高校サッカーがスピードとからだをはったディフェンスを必要とすることにあるからです。中学校までは、なんとか通用したが、高校ではできません。それと、サッカーは団体スポーツであるということ。一人でも勝手なプレーをする者がいればチームがばらばらになり、勝てるものも勝てなくなるので、それがいやだったからです。それでバドミントンを始めました。それまでバドミントンは、個人競技だと思っていました。たしかに1対1、2対2ですが、個人個人がそのゲームに全力でぶつかった結果、チームの勝利につながる。サッカーとは違った団体スポーツであり、私には、新鮮で魅力的であった。

サッカーの楽しさ、基本（パスアンドゴー、相手とボールの間に自分のからだをいれる等）、そして、スポーツの基本を含めて教えていただいた曾田監督をはじめ、小学校の中山先生、池畑先生、馬渡先生に感謝しております。これからも、チビッコ達にサッカーの楽しさ、スポーツの基本を教え続けて下さい。

たちはなキッカーズ自体も、昔私が現役キッカーズだった頃と同じように、サッカーを丸ごと楽しんでしまう、というチームカラーをこれからも失わずに、いつまでも子供達にサッカーの楽しさを教え続けて欲しいと思う。

私がサッカーから得たもの

五期 岩崎延宏

私の小学校時代のスポーツといえば野球かサッカーでした。三年生からサッカーを始めてから学校生活すべての時間（昼休み・放課後・体育の授業）がサッカーボールと一緒だったと思います。仲間がいないときでも空想し、一人でドリブルしてシュート板めがけて蹴り込んでいた。その当時、サッカーとは、ドリブルし相手を抜きシュート（ゴール）するものだと思っていた。ボールは、自分のボールと曾田さん宅の玄関にいつもぶらさげてあった「たちはなのボール」を使っていた。ときには自宅の玄関にボールをぶらさげヘッドイング練習もやった。

私がたちはなに入ってから、先頭になってやっていたのは太田、今橋、小山、鈴木、町田、舞山さん達であったように思う。なかでも小山、舞山さんは、小柄であり、大きな相手を柔らかいボールタッチでちょこちょこと抜いていく姿が思い浮かぶ。小さかった私にとって、その姿を知らず知らずに真似るべきものとして見ていたのではないかと思う。また、テレビのダイヤモンドサッカーと雑誌サッカーマガジン、イレブンを見ていて、特にテレビを見た後すぐにボールを持って公園にいき、プレーヤーになった気分がボールを蹴ったものだ。たちはなの練習は日曜日の七時からだったので毎週待ちどおしく、楽しみにしていて、冬でも朝グランドへ向かう時のうきうきした

少年サッカーについて

六期 池沢正彰

サッカーが生活の一部になった。始めたのは五年生の時で友達の多くが「たちはな」に入っていたことがきっかけで、なんとなくボールを蹴りだしたように覚えている。その後（たちはなを卒業して十年以上経つが）完全に生活の中に溶け込んでしまった。現在はあの頃の自分のような少年たちと一緒にプレーしている（指導者ということになると思うが、指導者としての自覚があまりない）。

少年達を観ていると驚かされることが多い。彼らの成長は全く不連続で、明日は昨日と今日の延長線上にないことが多い。ある時飛躍的に技術的レベルが向上し、チームメイトから頼りにされるようになる。あるいはチームメイトとして他のメンバーに認められるようになる。彼の内部での自信になる。さらに試合（特に対外的な試合）を通じて精神的、あるいは人格的に成長するケースに出会うこともある。

少年サッカーにおいても大人の介入によって集団管理的指導による没個性、勝負に対する異常なまでの執着などで機械的なサッカーを観ることもあるが、少年達がサッカーを好きになるようにサッカーを楽しむことを覚えてほしい。



サッカーと勉強との 狭間を越えて

七期 鈴木 一 浩

たちはなキッカーズ創立二十周年おめでとうございます。

たちはなキッカーズと聞くと、かなり遠い昔のような響きがしてきます。今、その遠い昔を思い出してみると、本当に懐かしい気持ちでいっぱいです。

たちはなキッカーズを経て、中学・高校・大学とサッカーを続けてきました。たちはなにいた小学校の時から一番のびのびとサッカーをしていたように思います。テレビでワールドカップや高校選手権等を観戦して、自分もあの選手のようになりたいと夢みて練習したりしました。

結果的に高校へ進学してから、全国高校選手権大会に二回出場することができましたが、私の場合、たちはなの時に培った基礎的な体力、テクニクがあったからこそと確信しています。

基礎的な体力であるとかテクニクというのは、いざ身につけようと肩に力を入れて、たくさん練習してもなかなか身につかないものです。やはり頭も身体も一番柔軟性に富んだ小学生ぐらいのときに身につけるのが、一番いいと思います。そういった意味で、そういう環境の中で、のびのびとサッカーの入口に導いて下さった曾田さんには、今でも感謝の気持ちでいっぱいです。たちはなにいた少年時代の思い出はたくさんありますが、少年ながらに当時、寂しいと感じたことがあります。それは受験勉強とサッカーの両立ができません、サッカーをやめてしまおう友人が何人かいたことです。私自身の中でも、中学・高校・大学とサッカーと勉強の両立というのは永遠のテーマであったように思います。私自身あまり成績がいい方ではありませんでしたが、

今、たちはなの 少年時代と比べて

八期 木下 圭

たちはなキッカーズ創立二十周年おめでとうございます。

私が卒業してから、もう十二年も過ぎてしまったのかと、とても驚きました。今でもあの頃のたのしかったことは、最近のことのようによく覚えています。同期の仲間達とも、よく会って思い出話をしたりしています。私たちがたちはなキッカーズにいた頃は、現在のような少年サッカーも、盛んではなく県内のチーム数も、とても少なかったように思います。その中で、たちはなキッカーズは、とても強く、私たちのチームも何度か優勝をしました。特に、強くて印象深く残っているのは、私より二つ年上の池沢（兄）さん、吉原さんたちのチームでした。そのかっこの良さ、強さ、サッカーの技術についても憧れていたものでした。

現在はどうなのかわかりませんが、私たちの頃は、練習用のユニホームの他に、レギュラーにしか渡されない十五枚のユニホームがあり、それを貰うことはとても名誉なこと、みんなで競い合っていました。また、たちはなは、日曜日しか練習がなかったもので、学校の休み時間はもちろんのこと、放課後に、みんなが集まってミニゲームなど楽しんだり朝の登校時間にも、私の家の前で、みんなが集まるまでリフティングをしたりして、ほとんど毎日ボールに触れていました。そのころの誕生日のプレゼントなども、スパイクやボールなど、全てがサッカーに結びついたものでした。

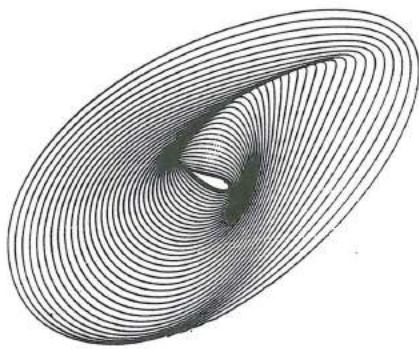
私は、たちはなを卒業した後、中学校、高校、大学とサッカーを続け、二年ほど前に、ある鶴見の少年サッカーチームを一年間ほど教えていました。

勉強とスポーツの両立はできました。そして、勉強とスポーツの両立は社会人になった今でも様々な形で役立っています。

疲れた体で勉強ができるものかと思われる方がいるかと思いますが、疲れているから長時間は勉強できない、ということを利用して勉強できないものでしょうか。短い時間で他人よりも、他人並みの勉強をしなくてはならないのならば、効率のよい勉強となるはずですが。またコンセンレーションも、他人より優れたものとなるでしょう。

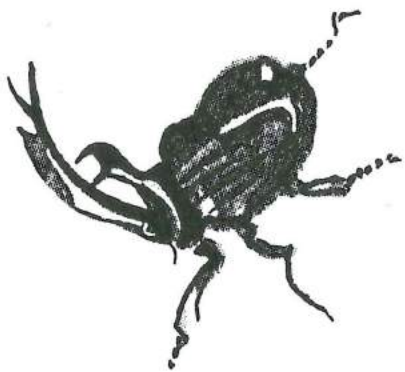
日本の教育制度が変らない限り、日本の受験戦争などという言葉はなくならないと思いますが、少なくともたちはなキッカーズ出身の子供達だけでも、受験などという言葉に負けず、空高くボールを蹴り上げて欲しいものだと思います。また、我々大人は小さなこだわりを捨て、大きな気持ちで子供達を包んであげたいものです。

たちはなキッカーズの益々の御発展を祈念して、一九八八年五月五日



その時、驚いたのは、子供たちが、サッカーを楽しんでいるようには見え、まるで習い事か、塾にきているように見え、しかたなくやっているのではなにかと思えるほどでした。また、何に対しても無気力なところが目立ち、時々、子供たちが、どこか冷めた大人のように見えたときもありました。とても恐いことです。私たちの頃とは違い、今の時代は、情報が氾濫しているために、自分自身の発見が少なくなっている、ただ与えられるものだけに適応していくだけになっているのではないのでしょうか。

子供は、何にでも興味を持ち、もともと元気で無邪気な姿が本当ではないのでしょうか。たちはなでは、これからも、サッカーの技術的なことはもとより、仲間や友達とサッカーを楽しむことを通してもっと大切なことを子供たちに教えていってほしいと思います。



少年サッカーの在り方

九期 村上 滋 春

「私たちはキッカーズをこれまで支えてこられた、曾田さん、コーチの皆様、二十周年おめでとうございます。これからのますますの御発展を御祈り致します。」

私が、私たちはキッカーズでサッカーをやっていた頃はとにかくサッカーをすること、ボールを蹴ることが、楽しくて仕方なかった。試合の勝ち負けなど二の次であつたと思う。好きなサッカーの試合ができて、試合に勝った時は嬉しくてたまらなかった。

中学・高校・大学とサッカーを続け、レベルが高くなるにつれ、勝負第一主義になっていく。そのために、厳しい練習をこなす。しかし、私は辛くなかった。それは、サッカーが好きだから、試合に勝つ喜びを知っていたからだと思う。私のサッカーの基礎は、少年サッカーを通じて自然に身に付いていたようだ。

今、私が少年サッカーに期待することは、子供達にサッカーの楽しさを教えて下さい。大人達が、子供を抑えつけることなく、自由に伸び伸びとサッカーができる環境をつくってやって下さい。

私は、試合を通じてサッカーを教えるのが一番だと思います。どんな練習より楽しく、どんな練習より教わるものがあると思います。指導者の立場に立った時、誰もが強いチームを作りたいと思います。しかし、相手が子供だけに、いくら尻をたたいてもだめだと思います。子供達が、試合を通じて勝つ喜びと負ける悔しさを知った時、そして、彼らがどうしたら勝てるのかと考え始めた時、彼らに適切なアドバイスをして下さい。

でも、技術は小学生の時にある程度ついていたので、体力面と戦術面に集中することができました。このおかげで、レベルの上がついていくサッカーに常に楽しく取り組むことができました。

「最後に」二十周年、あれからもう十年たったのかという気がする。私が小六の時に十周年だった。その時のセルジオ越後の言葉をまだ覚えている。

「百年、二百年たっても、私たちは続くように……」、このセルジオさんの言葉を思い出すたびに、今よりもっと私たちは大きくなって欲しいと思います。そこで、OBの勝手な願いとして、私たちは少年団で終わらないで、Jユース・ユース・社会人とチームを拡大し、いつの日か読売クラブや日産をぬくようなクラブになって欲しいと思います。

最近、やや低迷しているようですが、これからも曾田さんには、方針をかえずに名選手をたくさん育てて欲しいと思います。私もOBとして自分の経験を活かして、お手伝いさせていただきたいと思っています。

思ったことを取止めなく書きましたが、自分を育ててくれたクラブが二十周年を迎えることに感激しています。本当に指導していただいた曾田さん、佐野さん、永田さん、大島さん、杉崎さんには、感謝しています。

私の少年時代の

サッカーから学んだもの

十一期 高橋 利 明

創立二十周年おめでとうございます。

僕がたちばなに入ったのは小学校三年になった時で、当時野球が好きで中学に入ったら野球をやろうと思っていた僕は、あまり体力もなく中学に入る

最後に、サッカーを通じて、チームの枠を越えた友達を沢山作って下さい。これからも、私たちはキッカーズが、三十周年、四十周年を迎えることを期待しています。

私にとつてのたちばなサッカー

(OBとして思うこと)

十期 本間 真一郎

私の小学生時代をふり返ると、中央公園や下田小学校でサッカーをしたことが思い出される。試合のことなどより鮮明に覚えているのは、自分達で色々と考えたり工夫したりしてやったためだと思う。これは、今考えれば曾田さんの指導のおかげという気がする。当時の曾田さんは二つのことしかいかなかった。

一、サッカーとは楽しいスポーツということ

二、技術(ボールコントロールなど)にアドバイスする

私が高校・大学とサッカーを続けてきた中で、曾田さんのこの指導方法に出会えたことは幸運だったと思う。現在の少年サッカーはチーム数が増えた上、レベルも上がっているの、私達の時のように簡単には勝てないようですが、安易に勝つサッカーに走ることは間違いだと思っています。曾田さんの方法で勝つてこそ価値があるのではないかと思います。(しかし、勝つこととおもしろくなる、勝たないとつまらないという矛盾もある)

また、自身の経験から小学校で技術をしっかりとつけてもらえたのは良かったと思います。高校以上のサッカーになると戦術というものが出てきます。頭で理解できても技術がともなわないというのが一番多いと思います。

までに体力をつけておこうと思ったのが、サッカーを始めたきっかけでした。ところが、毎週日曜日に練習に出ているうちにサッカーがおもしろくなり、単なる体力づくりではなくなっていました。最初のうちはただがむしゃらにボールを追って、蹴っての繰り返しだったのが、ドリブルをして人が抜けるようになつたり、パスをつないだり、だんだんサッカーらしくなっていくにつれ、増々楽しくなってきました。リフティングなどもはじめはボールを足であげることもできなかったのが、友達が日曜日ごとにどんどんうまくなるので、練習が終ったら、ひたすらリフティングの練習をしてかなりの回数できるようになりうれしかったのを覚えています。

しかしだんだん時がたつにつれ試合に出たいという欲がでてきました。みんなの場合は、最初からサッカーをやりたいと入ってきたので試合に出たいと思うのは当たり前だと思うかもしれませんが、僕の場合は、最初は体力づくりのつもりがだんだん好きになってきたというタイプなのでそういう気持ち遅かったのかもしれない。

しかし僕と同じ学年の人といえば、大場君、増山君を筆頭にみんなうまい人達ばかりで、結局Aチームには入れませんでした。僕はその時Bチームのキャプテンに選ばれましたが、そのことを聞いた時、キャプテンなんてどうしたらいのかわからないし、「僕なんかで務まるだろうか」そんなことをしばらくの間考えていました。

でも今考えると、キャプテンをやらせてもらって、いろいろと勉強になり、自分にはプラスだったと思います。最後に、試合に出れなかったり、Aチームに入れなくてつまらないと思っている人、サッカーをやめようかなと思っ

だからもう少しがんばって、コーチの人達と一緒にすばらしいたちはなキッカーズにしてください。

サッカーから学んだこと

十二期 大滝 友男

私が小学校の頃は、サッカーをすることが楽しみで学校に行っていたようなものでした。放課後になると、みんなと夜暗くなるまで練習していたけれども、毎日がとても楽しかった。

たちはなに入ったのは、小学二年生でしたが、当時よく本間さんに、溝に入ったボールは足でとれといわれました。今思えばそのようにしていたことが、サッカーの本当の基礎になったのかもしれない。練習は週一回日曜日だけでしたが、最後に行く試合がとても楽しくて、午前中で終わってしまうのが残念でした。私は四年生頃から小さな塾に行っていました。早く勉強を終らせてサッカーをしに行きたくてたまりませんでした。

最近の子供達は家の中で、ファミコンをしたり、塾へ行ったりで外で遊ぶことが少ないのではないのでしょうか。私の頃は、家の中で遊ぶより、外遊びが楽しく雨の日は退屈でしょうがなかったものでした。

確かに勉強も大切だと思いますが、サッカーなどのスポーツから学ぶもの、勉強からでは学べないものがたくさんあると思います。だからもっとのびのびと遊んだり、スポーツもして、勉強も頑張ってください。

僕の少年時代と今の子供達に

十三期 若森 彰

僕は小学三年までサッカーを知りませんでした。それまで毎日のように野球をやっていました。そんな僕がなぜサッカーを始めたかというところ、それまで団地でやっていたソフトは週一回の練習で時間も短いからあまり意味がないと母にいわれ、サッカーをやることになりました。そして「たちはな」に入りサッカーのことを何も知らない僕は楽しいやら怖いやらでなんとかやっていました。そしてサッカーをやっている自分もチームの一員として試合をやった。でもこれは、小さい頃の自分を振り返り、初めてそう感じます。

何年かたち、五年の時だと思えますが、その年の正月の選手権にOBの先輩が出るというので、曾田さんやチームのみんなで見に行きました。その時見たチームが、あの「旭高校」でした。その試合を見て僕は、選手権に出る「国立」でやりたいと思いました。そのようになんだかんだやって四年間がすぎ、中学でもサッカー部に入り、なんとか「旭高校」に入り、僕の夢でもあった選手権に出ることができました。結果的には負けましたがサッカーを始めて後悔などしていません。

このように僕の少年時代を簡単にいうと、サッカーばかりでした。そしていつのまにか、サッカーが生活の一部になっていました。

話がかわりますが、僕が子供達にいいたいことは、まず、サッカーだけでなくもっといろんなことをやってほしいと思います。はやりのものばかりでなく他のスポーツや遊びをやり、何が面白い面白くないか、何が良いことか悪いことか、いろいろやらないと分からないと思います。そして、その中

から何か一つぐらい自分のためになることがあるはず。それにいつかきつと、それらのことが役に立つと思います。次に夢をもってほしいと思います。僕も「国立」という夢があったからこそ、あそこまで、できたんだと思います。それに夢があれば向上心もわかない、やる気も出ない、面白くないと思います。それから、サッカーは格闘技だから、けがや汚れなど気にせず、もっと「ハングリー」になり、けがや汚れは、サッカー選手の勲章だと思いがんばってほしいと思います。

そして最後になりますが、「たちはな」の子供達には、親兄弟、監督さん、コーチの皆さん、友達、OBの先輩達などいろんな人達がみんなに期待しているのだから、それに応えられるようにこれからも、もっともつとがんばってほしいと思います。

今のたちはなにもう一つ

”何か”がほしい

十三期 中野 純

このたびは創立二十周年おめでとうございます。

僕達十三期生が「たちはなキッカーズ」を卒業して七年目を迎えようとしています。僕達の時代は、中学生の頃に市大会や県大会で良い成績を残した。その時のメンバーで、「旭高校」に進んだ若森君は、正月の選手権大会に出場し、準々決勝に駒を進めました。その他のメンバーもそれぞれの高校で活躍していました。

それらみな「たちはなキッカーズ」の楽しいのびのびとしたすばらしいチームカラーや、監督さん、コーチの方々のご指導と、よく面倒をみていただ

いた先輩方のおかげだと思っています。僕達の多くは、曾田さん、大島さん、佐野さん、永田さんのお世話になりました。いたずら盛りの僕達を怒ろうとはせず、勝手にプレーしていても、「こうしろ」とは強制せずに、個性を伸ばすような指導をしてくれました。

先輩方の中にもジュニアユースの日本代表になられた方や、現在の日本のトップレベル、JSLの名門日産サッカーチームに所属している方が身近にいて、僕達の憧れの人でもあり、目標とするプレーヤーでもありました。これ程の環境に恵まれたチームは、当時の横浜には「たちはなキッカーズ」の他にはなかった、と今でも誇りに思っています。

最近「たちはなキッカーズ」は、あまり調子が出ていないと聞いています。しかし、先日練習や試合を見て安心しました。「たちはな」特有のチームカラーもよく出ていましたし、スピードも他のチームに決してひけをとっていません。そして何よりも「たちはな」伝統の抜群のテクニックは、昔も今も変わらず横浜でもトップレベルのものだと確信しました。むしろ現在の方が技術の面では優れているような感じがします。ただ、一つだけいわせてもらいうなら「何か」が足りないような気がします。「何か」とは接戦を勝利に結びつける「何か」であり、実力では数段上の相手に勝つ「何か」です。これは技術がいくらあっても出てきません。でも、きつとやってくれんと思えます。監督・コーチの方々のすばらしいご指導があります。先輩もいます。伝統も歴史もあります。

今の「たちはな」のみなさんも、これからの「たちはな」のみなさんも是非、誇りをもって頑張ってくださいと思います。



若きサッカー小僧たちへの願い

十四期 平方雅之

私がサッカーに興味を持ち始めたのは小学校に入ってからすぐでした。休み時間や放課後にサッカーで遊んでいましたが、ついに小学二年の夏に入部を決意しました。少したって私の友達もたくさん入りました。これでまた友達の輪が広がりました。やはりこういうクラブみたいなものに入部すると今まで知らなかった人とも知りあえるし、年上の人や年下の人とも仲良くなれるし、いい面が多いと思います。

そして汗を流して努力すれば、そのあとには必ず喜びあふれる栄光があるということです。私が初めて感じた喜びとはL・I・Aのときの団地対抗戦でした。その後は小五のときのL・I・Aで先輩たちが新人戦で優勝したときだけで六年のときは一度も優勝しませんでした。ここではまた負けるくやしさを学びました。もし小学生のときたちばなに入ってなかったら、今の私はまったく別人となっていたでしょう。

ところで、少し話は変わりますが、私は小三の冬に川崎市の川崎区へ引越しました。しかし私は日曜や祝日には朝は父の車に乗っけてもらい、帰りは一時間以上かかる道のりを通いました。なぜならサッカーが好きだったからです。たちばなで知り合ったみんなと別れたくなかったからです。

しかし三年間通うのにはつらいことはたくさんありました。小三のころはバスと電車をのりつき家へ帰るのはとてもこわかったです。こうしてみんなと共に小二から小六までたちばなですごしましたが、日曜日の朝、遅くまで寝ていたいのに、六時前に起きて三年間私を下田小まで運んでくれた父や、毎週日曜に遠いところから来てくれる曾田さんやその他のコーチのみなさん

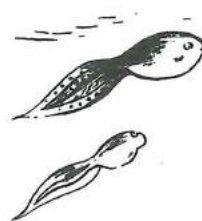
には大変なご苦勞をかけたと思っています。自分がサッカーをするだけなのに自分一人では何もできないのをつくづくと感じました。ここでもまた人に感謝する気持ちを知りました。

そして今私は高三で受験をひかえた身ですがまだサッカーを続けております。勉強が大変だからといってそんな簡単にサッカーをやめられるでしょうか。そんなことはできません。今のチームメイトを裏切ることなんかできません。やはり最後までとことんやらないのでは大違いです。もし中学の入試や高校や大学の入試があらうとどうか最後までプレーし続けて下さい。こんなことでくじけたのではないのです。最後まで負けじ魂で取りくめばできないものはないのです。おたまじゃくしが必ず蛙になるように、冬は必ず春となるように、努力すればそのときはつらくても、必ず春はくるのです。ですから最後までがんばりましょう。

またもうプレーしてない方たちもサッカーをいつまでも愛していつてもらいたいと思います。

最後に、曾田さん、大島さん、永田さん、その他のコーチのみなさんや、協力してくださった父兄のみなさん、楽しい思い出をありがとうございます。

そして若きサッカー小僧たちへ、勝つことよりも勝つために努力すること、一歩前進することを目指して、これからもなお一層がんばって下さい。



サッカーを続けて

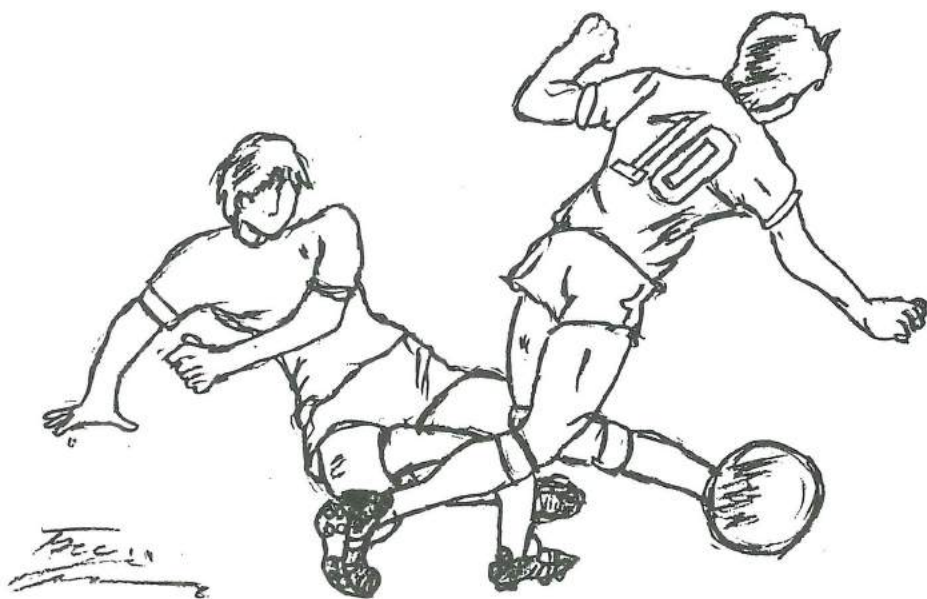
十四期 柏瀬秀一

僕は、現在ある高校のサッカー部副主将を、やらせてもらっています。かなりの弱小チームですが、高校生になってもまだサッカーを楽しく続けていられるのは、やはり「たちばな」のおかげだと思っています。

僕がたちばなに入ったのは、小学校三年生のころだったと思います。その頃は、人数も、百人余りでしたが、あまり熱心ではなかった僕は、バツとしたプレーもできず、四年間ずっとBチームでした。何で自分を試合に使ってくれないのだろう。あいつが出ていのに自分は出れない。こんな気持ちの中で練習もさぼりがちになりました。でも、こんなさぼっている自分を支えてくれたのは、たちばなの仲間でした。練習に引っぱりきたり、朝練にさそってくれたり、僕をサッカーに引き込んでくれました。ここで自分がやめたら仲間にも負けになります。途中で投げ出したくない。そう思って、続けることを決意しました。テクニックは無いけど気持だけは、と頑張って行きました。

そうして今、まだサッカーをやっています。一時期やめたいと思った時に、やめずにつづけて良かったと思います。今だにボールコントロールは下手で、たちばなでしつかりやっておけば——と後悔させられますが、気持だけは、今でもだれにも負けません。たちばなで得られた仲間と、この気持はこれからの僕を、また支えてくれることでしょう。

今でも卒業の時にいただいた色紙を眺めることがあります。迷った時、落ち込んだ時、行きつまった時、たちばなの思い出が一番の特効薬です。



たちばなキッカーズ 時代の思い出

たちばなキッカーズ

十五期 田 辺 実

僕がたちばなに入ったのは、三年生の頃でした。それまで野球ばかりしていたが、その時からサッカー一筋のサッカー大好き少年になりました。これも、たちばなに入って、監督やコーチに「楽しいサッカー」を教えてもらったからだと思います。土曜・日曜の練習も楽しくできたし、大会でもけっこういい成績を残せた。四年生の時には、県大会四位、新人戦三位、ミニサッカー県大会優勝等々です。ミニサッカーは、全国大会に出れたが合宿と重なって棄権してしまい、とても残念でした。もし出場していれば、全国優勝していたかも……。

今思うとたちばなでの試合等、覚えていることが多いです。それだけこの頃はサッカーにあけくれていました。今は高校サッカーで、毎日を過ごしています。たちばなでの経験が今でも、とても役に立っていて監督コーチには、とても感謝しています。自分自身今まで八年間サッカーを続けてきて、色々な思い出ができたし、たちばなに入って本当に良かったと思います。

「楽しいサッカー」を教えてくれた「たちばなキッカーズ」監督コーチの皆さんありがとうございます。これからも、いい選手を育てて頑張ってください。

曾田監督をはじめ多くのコーチの方々も、たちばなキッカーズのサッカーをこれからも育てていって下さい。

今後のたちはなキッカーズのより一層の御活躍を期待します。

輝け!! たちばなキッカーズ

十五期 佐 藤 勇

私が小学校を卒業したのが五年前。ちょうどたちはなが十五周年という年に最上級生としてサッカーをやりました。その時にも、先輩達の昔のたちはなのお話を楽しく読んだのですが、今度は、私が書く立場になり驚いています。

さて、私がたちばなに入ったのが、小学校三年の春で、入るきっかけは、兄がサッカーをやっていて、よく父と一緒に見に行っていたことからです。私は、特別体が大きい訳でもないし、気が強くもなかったのですが、すばしっこいことだけが、私の取り柄でした。それでも、三年間たちはなのセンターフォワードとしてがんばることができました。その中でも、四年生の時には、国際ちびっ子L・I・Bの部で優勝と冬の県大会四位という成績を残し、この大会で自分達もやれるということがわかりました。

六年生にもなれば、みんな体が大きくなるのですが、私はいっこうに大きくならないので、ヘッドイングやドリブルなどにハンディを背負いました。自分から点を取りに行くのは難しいので、自分がおとりになって点をとるというようにしました。だから、フォワードの人達も、背が高いとか足が速い相手のバックには、無理をしないで味方を使ったプレーなどで、自分なりに工夫して見て下さい。サッカーは、体も使いますが頭も使います。それを教

さい。たちはなキッカーズの健闘を期待しています。
頑張れたたちはなキッカーズノ

価値あるサッカー

十五期 山 本 亮

「たちはなキッカーズ創立二十周年」おめでとうございます。

キッカーズの長い歴史に比べたら、僕のサッカー歴なんか短いのですが、今までサッカーを続けてきて、本当によかったと思います。そして僕がサッカーを始めるきっかけになった「たちはなキッカーズ」には、心から感謝をしています。

でも、さすがに高校に進学したときには、続けるか続けまいか、とても迷いましたが、今までは違った意味でのサッカーの面白さを知りたくなり、サッカー部入部を決めました。また、それとは別に今までサッカーをしてきたことでつくってきた人間関係を、大切にしていきたいと思ったのも、理由の一つでした。

「たちはなキッカーズ」のサッカーは、僕が今まで経験してきた中でもっとも楽しいサッカーでした。もちろん、楽しさの中にも厳しさや、けじめのあるたいへん意味のあるものでした。

その厳しさとけじめとが、たちはなキッカーズを引退した後でも、僕自身の生活の中で十二分に役立っています。試合に負けたときや、監督やコーチにおこられたときの悔しさも、それをバネにして、頑張ってきました。

これからも、これらの初心を忘れずに、自分自身に価値あるサッカー生活を送っていききたいと思います。

えて下さったのが、監督やコーチの皆さんでした。

是非これからも強いチームを作って二十五周年・三十周年とたちはなキッカーズの繁栄を望んでやみません。

遠く離れてもたちはな

十五期 鈴 木 信二郎

たちはなキッカーズ創立二十周年おめでとうございます。

僕は、卒業してから四年が経ちました。僕は、三年生の時に入団しましたので、約四年間お世話になりました。そして、その四年間には、たくさんのできごとがありました。

三年生の時は、L・I・Bでしたので、負けてばかりいたような気がします。四年生の時は、L・I・Aとなりましたが、春の市大会では、予選落ちしてしまったりして不調でしたが秋の市大会でBブロックながら優勝し、更に冬の県大会では四位に入ります。その成績だったように思います。また、この時の県四位が僕達の最高成績でもありました。

五年生の時、僕は、周りの予想に反してL・I・Aになることができました。僕は、あまり試合には出られませんでした。市大会では、四位などの成績でした。

そして、最後の六年生の時は、新人戦の三位を最高に市大会では、四位などでした。県大会では、上位に入りませんでした。ただ夏の全国ミニサッカー大会では県優勝し、全国大会の途中でキケンしましたが、出場し続けていたら、全国上位も夢ではなかったのではないかと今でも思います。

このように、僕は、四年間をたちはなですごしましたが、この四年間の

かげで、中学のサッカー部では、レギュラーですごせましたし、今はあまり強くはありませんが高校サッカー部の主将となろうとしています。僕のことを御指導してくださった、曾田さんや大島さんや永田さんには、感謝の気持ちでいっぱいです。

最後に、たちばなキッカーズの御発展を遠く離れた佐賀からお祈り申し上げます。

サッカーに思う

十六期 配野 治

二十周年おめでとうございます。

僕は、もう「たちばなキッカーズ」を離れて早くも三年経ちますが、その三年間の中学時代もサッカーを続けていました。中学でのサッカー練習は、小学校でやったのとは、比べものにならない位きびしい練習でした。

もう少しさかのぼって六年間を振り返ると色々な思い出があります。特に、小学生時代は、ドリブルの練習をいやというほどにやらせられ、それが試合にも活きて、当時の私達チームも徐々に実力がついてきたように思います。そして最後の頃の大会では、いつも大差で負けていた駒林に0対2までおいこむまでに成長していました。ひとえに毎日の練習のおかげだと思っています。

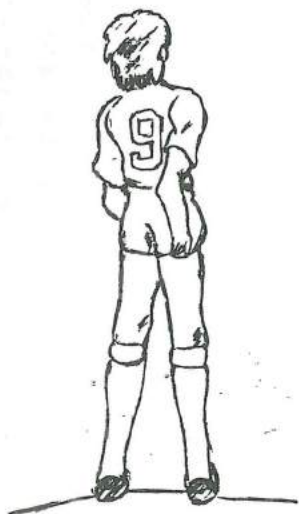
これから続く「たちばなキッカーズ」の君達へ/今までに負けた試合を忘れずにこれからも頑張ってください。

たちばなでの思い出

十六期 篠原 晃

たちばな二十周年記念おめでとうございます。

ぼくがたちばなに入ったのは、一年生の時だった。その頃は、サッカーに少しも興味がなかったのに、全然うまくなかった。小学校四年生位までは、永田さんにお世話になった。それであまり成長もなかった。しかし、五年生の時合宿に行って、練習試合でたままたまうまいシュートを入れたら曾田さんにはめられた。それからぼくは、サッカーというものに對する関心がでてきた。そして、その時から生まれかわったように練習にでたせいか、ずいぶん上達して、L・Aに入れた。ポジションは、バックだった。よく曾田さんに「おまえは1対1が強い」と言われた。それ以外に取柄がなかったのだと思う。だけどその取柄がぼくにはとても心強かった。たちばなにいた六年間、負ける悔しさ、勝つ喜びを経験できて本当によかったと思います。これからまたたちばなで教わったことを活かしていきたいです。



たちばなキッカーズに在籍して

十六期 野里 拓也

たちばなキッカーズ二十周年おめでとうございます。

ぼくがたちばなにはいったのは今から八年前です。そのころは、サッカーの「サ」の字も知らないといっても過言ではないほどサッカーのことをなんにも知りませんでした。

小学校二年生から三年まで続けましたが、父の仕事の関係で引越しが三年と六年の時と二回あって、電車やバスを使ってたちばなに通っていました。特に、小六の半年は静岡の三島から新幹線を使ってかようななど、信じられないこともやってのけました。それがみのつてか、港北大大会優勝や県大会予選ブロック突破などにつながりとてもいい思い出になりました。三月に曾田監督にもらった「CF賞」今でも大事にベナントといっしょに飾ってあります。ぼくはずっとCFでしたが、図太さ、執念に欠け、CFにふさわしくないCFだったなと今思います。六年の四月、卒業年の一月までの公式戦二十四試合でぼくがあげた得点は37得点でした。これはぼくが記録を小学校の時につけていたので間違いありません。ぼくはやや左にボールをもっていき右足のアウトでキーパーのどきわをねらうシュートが得意でした。このシュートを使うたびにたちばなでの試合を思い出します。中学では中盤に移り、今ではまわりを使う方が楽しくなっています。高校の方も「日大三島高校」に決まり今トレーニングにはげんでいます。たちばなで教えられたサッカーの楽しさを忘れずにこれからもサッカーを続けようと思います。後輩諸君これからのたちばなの歴史を作るのは君達です。健闘をいのちっています。がんばってください。

サッカーの思い出

十六期 笠原 宣広

僕は、小学校三年生の時にサッカーを始めました。始めた理由というのが、僕の悪いくせで友達が何かやっているから自分もそれがやりたくてしょうがなくなつて、それでたちばなキッカーズに入りました。あきつぱい性格でしたが、好きなサッカーだけは最後まで続けて中学校でもやり続けました。中学校のサッカーというのは、小学校の時とくらべものにならないくらいすごい。何がすごいかというと、一番スピードが違ふと思う。ボールによっていく速さとか、パスを出す速さとか、ドリブルとか、が中学生と小学生の大きな違いだと思う。

今、僕は、高校でもサッカーをやっている。練習はきついけど、最後までやり続ける自信がある。

何か一つに夢中になり一生懸命になって、汗をかくというのは最高だと思う。

たちばなキッカーズでの思い出

十六期 仁 平 圭

たちばなキッカーズ二十周年おめでとうございます。

僕達の時代（四年前）のキッカーズの特徴は、チーム全体が明るくて監督やコーチがすごくやさしく、いつもたのしくプレーができたということです。中学では勉強がいそがしくて部活には入れなかったけど、この三年間ただ

むだに使っていたわけではない。週に最低五日間はボールに触れていた。そして今、都内三位の実力を持つ高校へ進学し、宿敵、帝京、暁星、堀越をたおし全国出場を目指してがんばっているところです。

またキッカーズ時代の試合の思い出は、港北大大会決勝の篠原つばめ戦です。この試合は始め緊張して動きが悪かったのですが、前半の終り頃にはもうみちがえるほど良くなり3対1と快勝した。これは、僕達の時代に初めてとった優勝で、すごく喜んだことを覚えています。また県大会二回戦も記憶がまだ新しい。東山FCというチームで初めての顔合わせのチームだった。前半配野が先取点を取って調子づいたと思ったら、直後に取られて後半のこり五分前オフサイドトラップ失敗で1対2と惜敗した。しかし、この試合に負けてから、みんなで夜練習や朝練習をやり続けて勝率がかなり高くなった。

このちばなキッカーズにいた時、技術はもちろん試合中のマナーや日常生活での礼儀や常識、サッカーの楽しさを教えてもらい、たいへん光栄に思っています。

これからもサッカーを高校・大学・社会人と続けていきたいと思っています。



たちばなでの思い出

十七期 田 辺 義 昭

ぼくは、二年生からたちばなに入りました。

その中で一番思い出になったことは、六年生のときの合宿です。今までの合宿では、上級生の人達といっしょにいればよかったけれども、六年の時の合宿では、合宿に行くまえに、班をきめたり、班の人達をまとめていかなくはなりません。試合やかくし芸とかは、とても楽しくできたと思いました。それに夜はみんなでいろいろな話をしたり、ふざけたりして、とてもたのしかったです。それに、もう合宿に行ってから三年たったけれども、このようなたのしい思い出や、がんばった思い出は今でも残っています。だから、僕はたちばなに入ってよかったと思いました。

そして、これからもいろいろなことがんばっていききたいと思っています。

たちばなの思い出

十七期 前 島 睦

たちばな創立二十周年おめでとうございます。

僕がたちばなに入ったのは、一年生の時でした。その時SLはなかったと記憶しています。

一番楽しかったことは、夏の合宿でした。六年生の時の合宿では、僕のチームが優勝し、僕が最優秀選手に選ばれました。

たちばなで学んだこと

十八期 吉 村 正 輝

たちばなに入っていろいろなことを経験しました。面白くてたまらなかつた合宿の思い出、みんなでさわいでいた夜。

そして、色々なチームとの試合で勝ったときでも、区の大会のように、楽しいように何でもできる勝ち方もあれば、夏の全国ミニサッカー大会のOSジュニア戦のように、みんなが必死で戦って、やつとの思いで勝った試合もあった。その反対に、団地サッカー大会水沼戦のように、どうにも歯がたたなくて負けた試合や、攻めつばなしでもなかなか点が入らず、結局負けた国際チビッコ大会六浦少年戦など色々な思い出ができ、また友達もたくさんできてほんとうによかったと思う。キャプテンとしては、やり残したことがたくさんあった。

この苦い経験をいかして、これからは一生懸命がんばり、色々な大会で優勝したいと思う。そして後輩の皆さんも一人一人が自覚を持ち、協力し助け合ってまじめに練習に取り組めば、必ず良い成績が出てくると思います。

二十周年おめでとうございます。



その一瞬

十七期 小 栗 周 一

創立二十周年おめでとうございます。

僕がたちばなに入ったきっかけは、仲のよかった友達が入るというので、いっしょに入ったというささいなことでした。

そんな僕の思い出の中で一番心に残っていることは、伊勢山との試合でした。一点リードされてからものすごくみんなが燃えたのです。異常に燃えた僕は後半、左からドリブルでもちこんでセンターリング、中にいた二人が押しこんで同点に追いついたのです。涙が出るほど感動する同点ゴールでした。サッカーのすばらしさを感じた瞬間でもありました。

僕のめざしているサッカーは、今よりも数倍技術を上げ、できれば全国にも通用するような選手になりたいと思っています。高校へは、できればサッカーの強い高校に進みたいと思っています。

これからもたちばならしいサッカーをして頑張ってください。

一番の思い出

十八期 伊藤 謙三

僕がたばなキッカーズに入ったのは、一年の秋だった。それから僕はずっとサッカーをやっている。だから僕の学校生活の中で心に強く残っていることの中には、サッカーに関することが多い。

特に僕がよくおぼえているのは、六年の夏休みに新宿の伊勢丹の屋上で開かれた、全国子供ミニサッカー大会のことだ。僕達のチームは、一回戦で前回の優勝チームをPK戦で破り、その後はトーナメントを順当に勝ち上り、準優勝で神奈川県予選を通過し、全国大会へ出場することになった。全国大会でも準決勝まで勝ち上がったが、優勝したチームに破れ、三位決定戦に望みをかけることになったが、3対4と逆点され、四位になってしまった。でも全国で四位というのは、とても立派な成績だったと思う。それまでも港北区や横浜市で良い成績を残したことはあったが、全国というのは初めてだった。

特に僕は普通のサッカーよりミニサッカーの方が好きで、その分得意だったので、得点も多く、喜びも大きかった。

これから、サッカーを続け、このような良い思い出を作っていきたい。

たばなキッカーズ

十八期 近藤 大輔

僕は、六年生の時に広島^{こいっえ}の己斐上小学からきました。広島では週三回、学校が終わってから夜七時頃まで練習しました。ナイター設備もあり、下田小の三倍以上あるグラウンドで練習しました。しかし、この学校にきて、グラウンドはせまいし、ゴールもミニサッカー用かなと思うくらい小さかったのでびっくりしました。

たばなのL・Bというチームに入り、初めての試合なのに、レギュラーでCFをやらせてもらいました。そして、一年間僕はL・BのCFで点を取りまくりました。そして、たばなをやめるときには、すでに得点王になっていました。この一年間たばなの練習を休まず行ったのが、この得点王という記録をだせたのだと思います。



中学もサッカーを続けて

十八期 室 伏 勢

ぼくは、篠原中学校へ入ってから、すぐラッキーなことに一年生からレギュラーで試合に出してもらっています。篠原中のサッカーはあまり強くありませんでしたから、それ程練習もきびしくありません。でも、今年初めて県大会に出場できるようになってから先生も、段々と熱心になってきました。

この県大会予選の時、試合終了寸前に相手チームのキーパーとぶつかり右腕を骨折してしまいました。翌日、決勝戦・準決勝の二試合は骨折のまま出場し、ものすごく痛かったけど夢中でしました。そして、準決勝・決勝も勝ち県大会に出ることができました。でも、県大会は昨年の優勝チームとあたり、おしくも3対2で負けてしまいました。すごく、くやしかったです。

でも、また、この夏にあるからそれに向けて頑張りたいと思います。

たばなにいて

十九期 田 辺 貴 之

創立二十周年おめでとうございます。

僕は一年生の時に入り、六十三年度に卒業しました。

たばなに入ってから今まで一番うれしかったことは、六年生の時の県大会の第一次戦で、僕が一点を決めて勝ったことです。



中学一年生になってもサッカーは続けたいと思います。

今度は三十周年を目指しがんばって下さい。

いつまでもこのすばらしいたばなキッカーズで練習をしてきたことを、いつまでも忘れないようにしたいと思います。

最後の合宿

十九期 出 口 浩 一 郎

ぼくは、六年生までなん度も合宿に来ているが、六年の合宿が一番思いでにのこっています。理由はそれが最後の合宿だったからです。班対抗の試合は、ぼく達三班がみごとに優勝しました。

優勝するまでがきつかった。なんといっても苦戦した試合は、十河君の班や小田君の班です。十河君の班とは、優勝をあらそう試合になった。結果は0対0で引き分けだが、とても強かった。小田君の班は、小田君のパワーがすごかったが、三年のとし君が点を入れてなんとか勝った。どっちも強かったです。

とてもいい思い出になった。

たちばなキッカーズに入って

十九期 小田 俊直

二十周年おめでとうございます。

ぼくがたちばなキッカーズに入ったのは一年の終りごろで、それから六年あつという間の六年間だった。たちばなキッカーズに入って本当に良かった。じょうぶな体はできたし、多くの友達とも知り合えたし、とてもよい思い出がたくさんできた。

一番印象に残っている試合と言えば国際ちびっ子の予戦ブロックの日産との試合だ。練習試合もちょくちょくやったが、そのほとんどが負けていた。その試合はみんなが自分の力を一〇〇%出して戦った結果、1対1の同点だった。少しくやしかったけれどとてもうれしかった。

ぼくたちは全体的にまあまあ成績だったと思う。ぼくは次のことが分かった。どんなチームでも油断してはいけない。どんな試合でも全力をつくす。最後まであきらめないなどを。こんなことを考えながら練習し、強いたちばなキッカーズにしてみたいと思う。くだいようだが本当に、たちばなキッカーズに入ってよかったなノと思っているのだ。

私のめざすサッカー

十九期 海野 貴男

ぼくが一番思い出にのこったことは、合宿で五年生の時の班対抗の試合で

11月25日、こりずに晴。準決勝、山田若竹戦。この試合は、田中、室伏、笠原も出場し田中のロングシュートをはじめ、内田、野里のハットトリックで大量得点、完勝。
さあ！決勝戦、勝田、相手に不足なし……と燃える。前半、内田逆襲からハーフラインを越えたところでボールを得て、そのまま独走し、キーパーをかわして、ころびながらのシュート。後半、勝田の当たり強く、足の速い9番次から次へと抜いてあわや同点となるかどうかの危機一発、右から篠原（雄）のすごいスライディングクリアの超ファインプレーでふせぐ。これに力を得て、終了間際、右サイドスローインからキーパーが寄ってきたところを右隅へ野里シュート。優勝！ 本大会42チーム中、6戦全勝、総得点21、失点1の成績であった。ともあれ、公式戦久々の快挙、この子達の良き思い出とならんことを！
(配野)

(試合結果)

たちばな	4-0	YMCA
たちばな	2-1	日吉南
たちばな	1-0	高田小
たちばな	2-0	篠原西小
たちばな	10-0	山田若竹
たちばな	2-0	勝田



◆ LA 港北区大会に優勝！

11月3日(土) 港北区ジュニアスポーツ大会(サッカー、ソフトボール、ミニバスケット)の開会式が約4000人参加して新羽グランドで行われた。

開会式終了後、12時第一戦開始。たちばなLA対横浜YMCA。立ち上がり、配野のアシストで田辺初ゴール。続いて澤沢のコーナーキックから桑山、待っていましたと合わせてゴール。初勝利。

11月4日(日) 晴、さわやか。第二戦の相手は、日吉南、のっぴばかりのチーム。まるで中学生と小学生の対戦みたい。前半0-1でリードされ、後半開始早々、内田のコーナーキックが相手の肩に当たりゴール(自殺点)。後半残り3分、やはりコーナーキックをキーパーはじき、永長チョンと合わせ2-1で逆転勝ち。

11月11日(日) またまた晴。第三戦、高田小。前半はなかよく0-0、後半に持ち込む。ゴール前の混戦、田辺が敵とボールの奪い合いのなかへ野里がスルスルと入りこんで、敵のミスをつきシュート。バック陣の澤沢、篠原、仁平の守りも固く、この1点をキープ。

準々決勝、対篠原西小(つばめ)。前半0-0で互角、後半に入って有村すばらしいシュート。続いて河本のアシストで野里決める。ゴールキーパーの斎藤が試合毎にうまくなる、たのしい。



優勝したことです。だけどスポーツテストで一つもとれなかったのが残念でした。だけど六年のときはいっぱいといわれてうれしかったです。楽しかったことはとくにないと思う。

苦しかったことは、LAになってからの練習がとてきまかったこと。自分のめざしているサッカーは、とにかくうまくなって全日本の選手になりたい。

一年間キャプテンをやって

十九期 高木 辰有

一年前の背番号発表の時、ぼくは、LAのキャプテンに指名されて19番という番号をもらった。その時はすごくおどろいた。だけどこの一年なんとかやってこれた。

しかし、キャプテンになって最初のころは、試合でも練習でも何をすればいいのかとまどつき、あまり思いきったプレーができなかった。しかし、だんだん慣れてくると、試合でも練習でも、気にならなくなった。

でも試合に負けたときなんかは、自信をなくした。しかしその反対に勝ったときは、やる気が人一倍でた。こんなことがいっぱいあってこの一年間通してきた。キャプテンを一年間やって、とてもよい経験になった。

三年から入って四年間の最後の一年間をキャプテンというもので終えたのはとてもよかった。

現役の子の抱負

ぼくとサッカー

六年生 薄木 雄

合宿の思い出

六年生 田島 直宗

ぼくは二年生の時から合宿に参加したが、やはり一番印象に残っているのは、昨年の合宿です。ぼくは出口君が率いる三班でした。三泊四日の中でいろいろすばらしい出来事を経験しました。その中でも班対この試合でいろいろなポジションを務めました。そして、ぼく達は協力して一生けん命がんばりました。その結果、ぼく達は、優勝カップを自分達のものにすることが出来たのです。言葉では言い表せられないほど、うれしかったです。短かった三泊四日であったが、たくさんのことを学び、たちばなのすばらしさを知ったのです。

今年は、最上級生となりました。そして、今年がなんと、たちばなキッカーズの二十周年です。二十周年という長い歴史をもつこのたちばなに入れたことを、ぼくはほこりに思います。これからたくさんさんの試合をこなしていき、みんなで力を合わせて強くなるようにがんばりたいと思います。そして、仲良く楽しくこれからサッカーをやっていきたいと思います。

三年生では、半分しか試合に出してもらえませんでした。ぼくはもっと練習をして前半戦、後半戦を出してもらえようと思いました。

四年生では、だいが合宿にもなれてきました。四年生では、練習したかいがあり前半戦、後半戦と試合に出させてもらいました。ぼくは、がんばって点数もたくさん入れました。ぼくは、合宿がたのしくなりました。

五年生では、思わぬことにキーパーをやらされました。四試合点を取られませんでした。しかし一試合負けて優勝には、なれませんでした。合宿は、私生活とチームワークを良くするために大変良いことだと思っています。今年は、二十周年なので合宿や大会で優勝したいと思っています。

たちばなに入って

六年生 中村 拡史

幼稚園のころからサッカーがすきなぼくでした。一年になったら、すぐにたちばなへ入りました。一番はじめに友達になった人は、六年生の人でした。名前は忘れてしまいましたが、とてもやさしくて、キックの仕方やヘッドインの仕方をぼくに教えてくれました。その人も高校できつとサッカー部へ入っていると思います。

この五年間をふり返ってみると楽しいこともあり、かなしいこともありました。試合の中でいちばん印象に残ったのは新人戦で、横浜スタジアムでの試合でした。負けたのはくやしかったけれど、みんなで思いきって試合ができたので悔いはなかったです。それに初めて人工芝で試合ができたので、良かったと思っています。

六年生になり、L・Bのキャプテンになった今、高木君のようにみんなを

ぼくは、サッカーをやっていてよかったと思います。それはなぜかと言うと、今、健康でいられるということです。

一つのことをみんなで作るということは、とてもすばらしいことだと思います。十一人の心が一つになったときにチームの力が出ると思う。だからまず一人一人のぎじゅつを上げて、試合に勝つていこうと思いました。

ぼくは、たちばなキッカーズで教えてもらったことをうれしく思います。たちばなキッカーズ ばんざい！

合宿の思い出

六年生 猪狩 浩二

ぼくは、三年生でたちばなキッカーズに入りました。

ぼくが入ったきっかけは、高田小学校では、四年生からサッカークラブや早朝練習があり、三年生ではサッカークラブや早朝練習には入ることが出来ませんでした。

ぼくはがまんでなくて、たちばなキッカーズに入りました。

たちばなキッカーズで、一番たのしみなのは、合宿でした。三年生のころは、不安でした。なぜかという、初めてだったので何をやるのかも知りませんでした。しかし、六年生に良く教えてもらいました。

引っぱって行き、チームワークを大切に、今年一年精一杯がんばろうと思います。

合宿に行ったこと

六年生 勝田 尚義

ぼくは、合宿に行つて楽しかった。一番おもしろかったのは、夜みんなでいっしょにねることでした。ぼくの班は四班でした。班長は山口君だったけど、山口君は入院していたから近藤君にかわった。山口君は、行けなくてかわいそうだと思った。

夜ねるとき近藤君がこわい話とか、ざぶとんをのせるからおもしろかった。あとおもしろかったのは、かくし芸でした。みんなおもしろい名前で、みんなわらっていました。そして帰る時、千円もらってみんなで、おみやげを買って部屋にもどりました。

バスの中ですきな人とすわって、楽しくてたまにはおこられたりしたけど、とってもおもしろかったです。それでまどの外を見ていると雨がふっていました。そしてやつときました。でもこれからずっと家まで歩くのです。

歩いていると野崎君のお父さんとお母さんが車できました。「のっぺいかない？」といったから、お言葉にあまえて乗せてもらいました。そして家に入ってみると、お父さんとお兄ちゃんがまっています。

「とっても楽しかったです。」



LLBのはつ勝利

五年生 今西 哲也

ぼくは、国際チビッコで、はつ勝利をしました。そして、しんぱんがフェをピーとならして試合をしました。ぼくと小嶋君でセンターフォワードをやりました。はじめに小嶋君がチョビをしました。そしてぼくがまた小嶋君にボールをわたしました。そして、あいてのチームにボールをとられました。そしてまたとりかえして、そのとりかえした人が小嶋君にパスをして、小嶋君がドリブルでもっていつてシュートしたらはいりました。ぼくたちが先取点でした。

そして、あいてのチームがせめてきたのを西平君がとりました。そしてあいてのチームがボールをだしました。それを高橋君がスローインしました。そのスローインしたボールがぼくにきて、それをシュートしたらはいりました。そして、またあいてのチームがせめてきました。そして、それをあいてのチームがシュートしました。だけどそれは、沼田君がとりました。沼田君がハンドキックをしてぼくにわたしました。それをぼくが小嶋君にパスして、それを小嶋君がシュートしました。そしてそれははいりました。そして、またあいてのチームがせめてきました。それを小嶋君がカットして、ぼくに小嶋君がパスして、それをぼくがシュートして「やった！四点目だ！」と思ったらあいてのチームのゴールキーパーにとられてしまいました。そして試合終了しました。たちはなは、3-0でかちました。

ぼくたちは、国際チビッコ大会五位でした。ぼくは、一点きめたとき、うれしかったです。Lになってもサッカーをつづけてがんばります。

たちはなキッカーズ

六年生 遠藤 豊

ぼくがたちはなに入ったのは、二年生のときで、そのころは、「雨がふってほしいな！サッカー休みになればいいな！」と思っていた。でも、だんだん入るにつれて、「早く土曜日にならないかな！」と思ったり、雨がふっているときは、「雨、やんでほしいな！」、休みのときは、「今日、サッカーあればいいのに！」と思うようになった。それに友達もだんだんふえてくると、「たちはなに入ってよかったな！」とも思うようになってきた。

たちはなでは、合宿やたちはな杯があり、合宿では、七班か八班のチームに分け、総当たりの試合をする。また、合宿の最後の日の夜には、各班で考えたげきをする。そのときは、おもしろいげきがたくさんあるので、みんな大笑いする。

ぼくはこれからもみんなと仲よく楽しくやっていきたいです。

はじめての一点

五年生 (四年の時) 本原 功介

ぼくはサッカーをやっていますが、三年生のさいしょは、ほけつだったの、しあいに出してもらえなかったの、しあいに出られる人たちが、うらやましかったです。「一回でもいいから、前半だけでもいいからしあいに出たい」と思って、人一ぱい練習したのにしあいだしてもらえなくて「どうしてみんなは、こんなにうまくなるのかなあ」と思いました。それから人一ぱ

楽しかった合宿

五年生 柴田 淳之介

僕が今までで心に残った中で去年の合宿のことがある。僕は、近藤君の班だった。山口君が来れなかったの、班長が近藤君になったのだ。朝練でおなじみの本間先輩もきて倍楽しくなった。合宿に着くと、すぐ昼飯だった。僕は父さんと、合宿に行く朝言い合いをしていた。初めの昼食は、何が出るか？ということだった。僕は「カレー」、父さんは「玉子どんぶり」と言い合っていたので、ここでわかるだろうと思っていると、なんと「玉子どんぶり」だった。

合宿での大きな楽しみは、みんなできしゅにカレーを作り食べたことだ。僕は火をたきたかったが、「まだ四年だからまきを運んで来て」と言われ、「ちえっ」と思った。僕はいっぱいおいしくわたりした。僕はなんだか、皆で食べると、ご飯が、いっぱい入るしおいしいなあノと感じた。

次は、スポーツテストの日。僕ははじめからきんちょうした。だが、スローイン、リフティングで一等をとった。スローインは、鷲津君と同じ成績でした。でも、リフティングは三百五回たちはな記録を作れた。ドリブルは、途中まで良かったのに、最後の方でへまをして、一位から四位までに入れないで、残念だった。リフティングの賞をもらった時は、もううれしくて、あまりしゃべれなかった。もう一つ去年は、班対抗の試合で、一度も勝てなかったという記録もつくったのだった。最後の夜のお楽しみ会は、練習もせず、ぶっつけ本番だっただけに、全然だめにしてしまった。本当に合宿は、楽しかった。

今年もガンバルゾノ！

いれん習しました。

ぼくは、「今度こそし合にでるぞ」と心にきめました。雨の日も夜もやりました。それでだんだんしんをもってきました。次のサッカーのれん習の日にも一秒もむだにしないでれん習をしました。それでコーチにほめられました。そのときは、とつてもうれしかったです。まだし合にもでられないほくだけどコーチにほめられただけでも、し合にでられるよりは、うれしくないけどやっぱりうれしいです。でもぼくは、コーチが「きょうは、し合があるぞ」というと力がすつとなくなってしまうのです。それは、やっぱりし合に出たいのに出られないのが分かってからです。

しかしきょうは、「本原センターハーフをやれ」とコーチにいわれたのですごくうれしくなりました。はじめてし合に出るのだから「じゃまにならないかなあ」と思いました。でもやるしかないと思えました。し合ボールがぼくの方にきたらおもいきりクリアーしようと思つてけろうとしたら、はりきりすぎてからぶりをしてしまいました。それで決まってしまうました。でもみんないい人ばかりなので、「またがんばろう。まだ一点じゃないか。がんばろうぜ」といつてくれたからうれしかったです。だから「今度こそぼくが決めてやる」と思いました。でもあい手がててくわてなかなかきまりませんでした。坂本くんが、すばやいドリブルでパスしてくれました。みんなぼくにわたすとは、思わなかったのしょうか。ぼくには、ノーマークです。でもまだバックの三人がいます。ぼくはれん習のせいかをみせるためにドリブルでもちこんでシュートをしました。ボールは、いきおいよくとびました。それで決まりました。みんなよろこんでくれました。とつてもうれしかったです。コーチもよろこんでくれました。

今では、し合にも出してもらえし、れんしゅし合でもキャプテンになることもあるし、ハットトリックをすることもあります。もつともつとうまくなつて本場のキャプテンになつてセンターフォワードになりたいです。

たちばなサッカー 愛好会の誕生

誰でもが楽しめる

地域のサッカーをめざして

—— たちばなサッカー愛好会の設立から
現在までの四年を振りかえって ——

中 林 由 行

■愛好会の現状と活動

たちばなサッカー愛好会は、現在約五十名の父母を中心に構成されている。その活動は、①「たちばなニュース」という二ページの会報を毎月発行し、たちばなキッカーズと愛好会の活動の広報をする。②たちばなキッカーズの試合の応援・観戦をする。③たちばなキッカーズの活動の側面からの協力をする（グラウンド確保、つきそい、資金集め、イベント協力など）。④自分達のサッカークラブをつくり、サッカーを楽しむ。⑤会員同士の交流で楽しむ（新年会、忘年会、ボーリング大会、旅行、ゴルフ会など）、などである。この活動の中で現在最も盛んなのは、皆でサッカーを楽しむことで、愛好会（五十人）の中に「たちばなサッカークラブ」がつくられ、参加者は三十七

人（夫婦で入っている七組の人を二人と数えると四十四人）になっている。このクラブの特徴は、大部分の人がこれまでサッカーをやったことの無い人で、平均年齢が四十才を越えていること、練習やクラブ内での試合がまったく男女混合になっていることである。これは他にはなかなか無いめずらしいサッカークラブといえるだろう。

■愛好会設立の経緯

愛好会の設立発起人会は、昭和五十九年三月十八日（日）に約三十名の父母によって行われた。設立の準備は前年の五十八年の後半から始められていたが、そのきっかけは、同年の九月十八日の「たちばなキッカーズ十五周年行事」のための父母の連帯だった。せっかく子供を通じて親しくなり、サッカーが好きになった父母達が、子供の卒業と同時に付き合いが無くなったり、サッカーと縁が切れるのはさびしい、何とかしたい、という願望が愛好会につながった。その当時の設立の提案には次のように書かれていた。

—— 私達は、たちばなキッカーズに出会うことによってサッカーの面白さ、チームワークの素晴らしさ、地域の人々との交流の楽しさなどを知ることができました。たとえ自分の子供が小学校を卒業しても、キッカーズの子供達を見守り、父母同士のつながりをたもちながら「たちばなキッカーズ」の末長い発展を願う、というのが多くの人の気持であると思います。現役やOBの父母の献身的な協力によって「十五周年記念式典」が盛大に行われましたが、これを機会に現役・OBの父母による「懇親会」を設立し、サッカーを楽しむながら「たちばなキッカーズ」の活動を支援すると同時に地域の人々の親交を深めることを提案します。（昭和五十八年九月二十五日）——

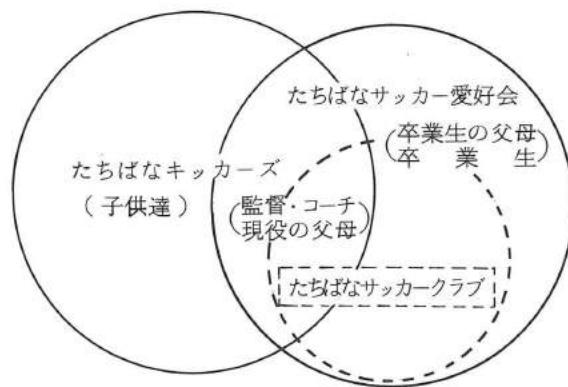
この呼びかけに賛同した父母によって設立準備がすすめられ、十五周年式典から丁度半年後の五十九年三月十八日に公団集会所で開かれた発起人会で

設立が決議され、正式には四月一日の発足となった。名称はいろいろな案の中からアンケートにより「たちばなサッカー愛好会」と決定した。当日は、設立主旨の説明、会則の承認、役員の選出などがおこなわれ、初代の会長に谷嶋忠雄氏が就任した（現在は二代目の大滝泰氏）。三月十八日付で第一号の会報「たちばなニュース」が発行され、それ以後毎月発行されている。

■愛好会のこれから —— 三ちゃんサッカーを目ざして

現在の愛好会とキッカーズの関係は図に示すようになっている。設立当初は愛好会の活動が果してうまくゆくのかという不安があったが、その後愛好会の中に、自分達でサッカーをやって楽しむグループ「たちばなサッカークラブ」ができると、次第に入会者が増え、現在はこのクラブの活動が愛好会の中心になっている。サッカーをやったこともない中年が、サッカーをやろうと思ってくれるだろうか、というのは杞憂で、意外に多くの父母がクラブに参加してくれたのは大きな喜びだった。

スタート以来約四年が経過した今、クラブに新しい波が寄せはじめている。それはキッカーズの卒業生達がクラブの練習に参加しはじめたことである。このところの日吉台中のナイターの練習には、浪人中の子供達がいつも何人かは体ならしにきており、高校生のOBや中学生のOBも結構参加するようになってきている。練習試合をすると、そこで親子の対決、夫婦の対決がはじまり、真剣なプレーの合間に笑いが湧く。もちろん協力もある。サッカー経験の少ない父母達は当然のことながら若者達と勝負になる筈もないのであるが、若者達が気をつかって適当に相手をしてくれるお陰で試合らしくなっていて、皆が楽しめる形がとれている。こういった姿を見ていると、これが地域の楽しむサッカーの本当の形なんだなあ、と強く感じるのである。父ちゃん、母ちゃん、兄ちゃんなどで楽しむサッカーは、俗っぽく言えば「三ちゃんサ



(図-1) キッカーズと愛好会の関係

ッカー」とでもいうのだろうか。スマートに言えば「ファミリーサッカー」ということだろう。愛好会のめざすところはこの「三ちゃんサッカー」といえる。

若者達の参加により、いよいよその形が見えてきたというのが現在である。しかしさらにその先でどうなっていくかは、まだ分からない。若者達が増えてゆけば、若者チームと中年チームの共存という形も充分考えられる。あと十年もしたら高令層はどうしているだろうか。その時は皆でゲートボールチームをつくらうよ、という話も酒の席ではよく出てくる。愛好会の活動をサッカーに限る必要は無いわけで、将来はもっと巾広いクラブ活動の場になってゆけば、より楽しく、より開かれたものになってゆくだろう。十年・二十年先にこの愛好会がどのような発展をしているか楽しみである。

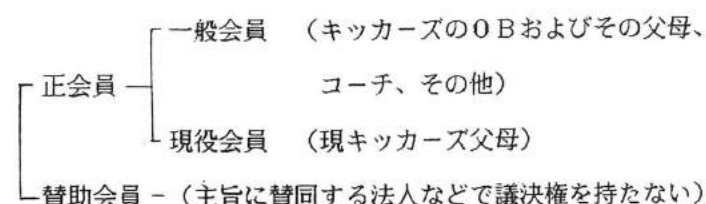
たちばなサッカー愛好会 会則

昭和59年4月1日

第1条（名称） 本会は「たちばなサッカー愛好会」と称し、本拠を横浜市港北区下田町におく。

第2条（目的） 本会は「たちばなキッカーズ」の活動を支援するとともに、会員相互の連帯と親睦を深め地域社会の発展に寄与することを目的とする。

第3条（会員） 本会の主旨に賛同する者は誰でも会員になることができる。会員の種類は以下のとおりとする。



第4条（会費） 会員は総会で決められた会費をおさめなければならない。会費の額については細則で定める。

第5条（入脱会） 本会への加入、脱退は自由とし手続きは所定の用紙を使用するものとする。脱退した場合にはすでにおさめられた年会費は返却されない。年度末までに年会費の振込がない場合には退会したものとする

第6条（年度） 本会の会計年度は、4月から翌年3月までとする。

第7条（活動） 本会は第2条の目的を達成するため、次の活動を行う。

- ① 会報「たちばなニュース（仮称）」の発行
- ② 「たちばなキッカーズ」及びその他のサッカーの試合の応援観戦
- ③ 「たちばなキッカーズ」関連の催事の実施、協力
- ④ サッカー場の手配や確保に関する協力
- ⑤ サッカーチームの結成、練習や試合の実施
- ⑥ 総会、役員会、懇親会の開催
- ⑦ その他「たちばなキッカーズ」を支援する活動

第8条（役員） 本会には次の役員をおく

会長1名、副会長2名、会計 数名、広報 数名、顧問 数名
役員は総会で選任する。役員の任期は1年とし再選は妨げない。
役員の中から事務局担当役員を1名互選する。

第9条（職務） 役員の職務は以下のとおりとする。

- ① 会長は本会を代表し活動を統括する。
- ② 副会長は会長を補佐し会長の代理をつとめる。
- ③ 会計は会費の徴収、支出の管理などをおこなう。
- ④ 広報は会報の発行および会議の書記をつとめる。
- ⑤ 顧問は本会の運営にたいする指導、助言をおこなう。
- ⑥ 事務局は本会の連絡窓口となる。

第10条（役員会） 役員会は役員によって構成される。役員会は会長の招集によって随時開催され総会の決定にもとづいて業務を執行する。

第11条（総会） 定例総会は決議機関として年1回開催され、年次活動計画の策定、役員の改選、会計報告などをおこなう。

第12条（懇親会） 本会は会員の親睦のために懇親会をおこなうことができる。

第13条（報告） 総会決定事項は会員に公示しなければならない。

第14条（改廃） 本会則の改廃は総会において出席者の3分の2以上の賛成によっておこなうことができる。

細則

（1） 会費の支払い方法

会費はその年度の初めに振込などによって支払うものとする。

振込先 城南信用金庫日吉下田店 普通 口座番号 060262

（2） 年会費 年会費は一般会員 2000円、現役会員 1000円、賛助会員は1口1000円とする。

愛好会から生まれた 「たちばなクラブ」の発足から現在

横川 芳江

昭和五十八年秋、人気のない校庭に数人の人影。たちはなキッカーズ後援会をつくるとうとう五十七、五十八、五十九年度の親達の姿だった。

多忙の身を何とか連絡をとり、打合わせをする人達に、夕暮れの日ざしが長い影をつくっていた。子供の試合の応援や、車の手配を通して親達の交流が深まり、このまま別れてしまうには惜しいとの声や、キッカーズをいつまでも応援したいとの気持ちが高まっている時だった。

そして、昭和五十九年三月、努力が実ってここに「たちばなサッカー愛好会」が発足することになった。

また、その動きとは別に、プレーするサッカー好きも増えていた。たちはな杯や、夏合宿での親子対戦によって、サッカーの楽しさを知り、虜になった人達だった。(この頃、大人はLの子達にどうやっても勝てなかった)顔を合わせると「ボールを蹴りたい」「サッカーをしよう」と言い合い、「サッカーチームをつくらうよ」という希望に発展していった。キッカーズのお手伝いをするコーチにも、サッカーを専門にしていなかった人も増え、大人のチームをつくる必要性が日ごとに増していった。

昭和五十九年十月、チームづくりの具体的方法もわからないまま、ユニホームの選択が始まった。

同月二十一日、愛好会宴会の席上で、背番号の抽選が行われた。二番から二十四番まで二十三名(うち女性二名)の錚々たるメンバーであった。

十一月十八日、待望のユニホームが出来上り、高田小学校で練習中のメンバー

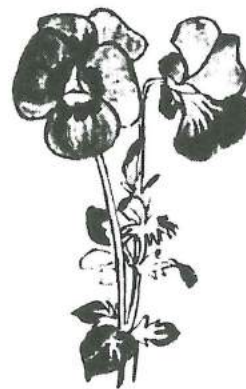
に配布。こうしてたちはなクラブ(たちはなサッカークラブ)の活動が始まった。六十一年十月、日吉台中学校での夜間利用が許可され、今迄の新日鉄グラウンド、高田小等での不定期な練習だったのが、飛躍的に増え、毎週土曜の夜はサッカーが定着した。

六十三年四月現在、会員四十四名(うち女性十三名)、他に卒業生が常時七・八名練習に加わっている。

卒業生が戻ってくるベースになりたいと思っていた希望もかないつつあり、老いも(居ないかな!)若きも、男も女も、親も子も、和気あいあいとサッカーに興じる様子は、友情の輪、家庭円満の図で、うれしい限りである。将来にむけて、夢はつきない。

若い人達が多くなったら社会人登録をして、天皇杯をめざすのもいい。外国遠征もしたい。サッカーの輪を広げて全国草サッカー大会を開き、日本中のお父さん、お母さんチームと対戦したらおもしろいだろう。老いてなお友情を温め、無理のない楽しいサッカーができればいい。

当面は、グラウンドを確保し、練習・試合の機会を多くつくること。また、二十周年にむけて、多くの卒業生や父母の方に仲間に入ってもらえるよう全力を尽くしたい。



1988年(昭和63年)6月2日 木曜日

ぼぷり 街かど情報

(今回は日曜日に掲載)

港北区下田町の「たちはなサッカー愛好会」はサッカーは初めてという人ばかり、男女約四十人の集まりです。メンバーのうち約十人が女性で平均年齢は四十歳前後、下田小学校のサッカーチーム「たちはなキッカーズ」が母体となっていて、わが子を応援するだけでは物足りなくなってきた父母たちが五年前につくったチームです。

素人ばかりのチームのため、いろいろなハプニングがあり、試合の流れの面白さより、おかしいことのほうがたくさんあったそうです。練習は毎週土曜日の夕方六時半から夜九時までで、主に日吉台中学校のナイター設備を利用してします。女性メンバーの横川芳江さん(40)は次のように話していました。サッカーを始めてから友達が増え、子供たちと共通の話題ができた「練習後のビールの味は格別です」汗に光る横川さんの顔は美しく輝いていました。

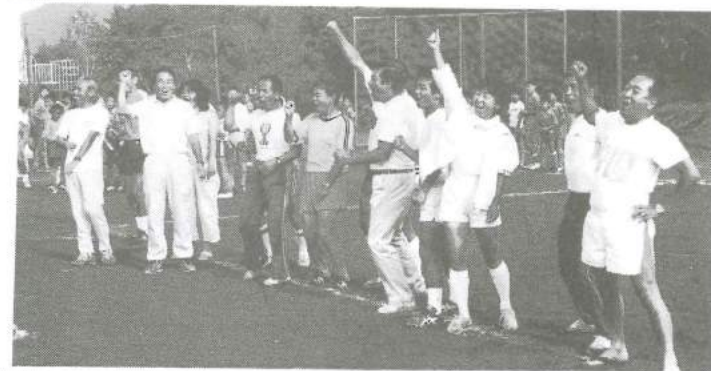
ママがライバル



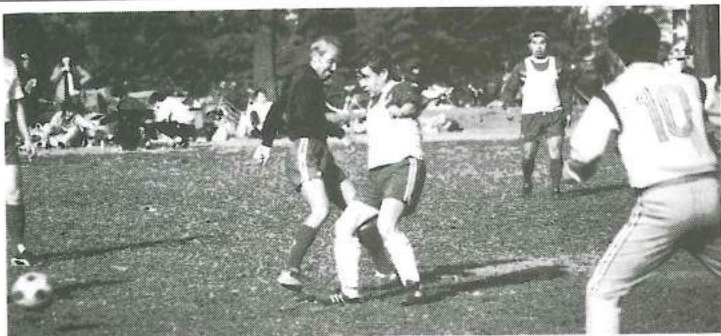
たちばなサッカー愛好会

あゆみ

61年度	60年度	59年度	年度
61		60	59
9 8 5 4	12 9 5 4	2 1 11 10 7 4	年 月
岡村新太郎氏を囲んで懇親会総会 第一回ボーリング大会 対外試合 対つばめ(ときわ公園) スポーツ傷害保険に加入。 対外試合 対つばさ(新日鉄) 対つばめ(ときわ公園)	総会 対外試合 対つばめ(ときわ公園) 対つばめ(ときわ公園) 半袖ユニホーム初めて着用 旭高校サッカー教室(新日鉄) 忘年会(下田寿司)	たちばなサッカー愛好会発足 「たちばなニュース」創刊 懇親会(福寿司) クラブ背番号 抽選 待望のユニホーム出来上り。 対外試合 対つばめ(ときわ公園) 新年会(たつ吉) 対外試合 対つばさ(新日鉄)	こと



62年度	61年度
63	62
6 5	1 12 11 10
総会 第四回ボーリング大会 対外試合 対つばめ(ときわ公園) 第三回ボーリング大会 対外試合 対つばめ・千代田化工 対東芝柳町 レディス・横浜市婦人スポーツミニサ ッカー大会参加(ときわ公園) 20周年記念バザー 体育の日・横浜市民サッカー大会参加 (本牧市民公園) 第二回クラブ杯(慶応、新日鉄) レディス・横浜レディスマスターズ大 会参加・三位(三ツ沢競技場) 横浜サッカーフェスティバル参加 (横浜スタジアム) 対外試合 対たそがれ(新日鉄) 対つばさ(新日鉄)	第二回ボーリング大会 レディス・体育の日交歓サッカー大会 に参加(本牧市民公園) 日吉台中学夜間施設利用者登録する。 ナイター初練習 第一回クラブ杯(新日鉄) 忘年会(下田寿司) レディス・横浜サッカーフェスティバ ルに参加(横浜スタジアム)



各期のメンバー

6期 49年度		5期 48年度		4期 47年度	
ポジション	氏名	ポジション	氏名	ポジション	氏名
FW	中村 浩人	HB	岩崎 延宏	FW	笠松 文雄
FW	池沢 正彰	GK	久保寺 清	GK	川辺 圭一
FW	吉原 昌利	FB	賀川 正規	FB	草生 祐文
HB	三井 英一	FB	間瀬 浩之	HB	石村 泰三
HB	早川 司	FB	吉川 薫夫		木村 敏夫
FB	岩村 佳広	FW	坂本 俊也	HF	島村 昌彦
HB	川村 利一	FB	小林 守		小林 敬一
HB	砂子 雅史	FW	大場 浩正		加藤 友基
FB	野道 尚行	FW	鈴木 邦彦	FB	小黒 修一
FB	龍野 智久	HB	木村 亮	FW	召田 充弘
FB	鈴木 善裕	HB	鈴木 充彦		藤田 淳
HB	高塚 直樹		斎藤 清	FW	久保寺 和彦
HB	加藤 弘	FW	竹内 正昭	FB	福地 貴博
	嶋田 正人	HB	阿久津 正人	HB	菅沼 敏行
	北村 健		田中 潤	FW	小菅 基成
FW	村井 進	FW	石井 正人	HB	瓜田 利昭
					高岡 孝次
					舟川 洋一
					石田 明文
					重田 隆史
					関根 大輔
					山口 浩満
					小谷 秀一
					渡辺 邦彦
					森 英二
					深沢 敏裕

各期のメンバー

3期 46年度		2期 45年度		1期 44年度	
ポジション	氏名	ポジション	氏名	ポジション	氏名
FB	鈴木 陽二	FW	小山 栄	FW	村上 三紀夫
FB	栗山 久史	FW	今橋 和彦	FB	飯田 隆
FB	渡辺 彰雄	FB	大野 昭	GK	賀久 哲郎
FB	山下 孝夫	HB	岡見 圭	FW	木口 純一
GK	松井 耕一	FW	加藤 公規	FB	小林 泰和
HB	町田 宏	FB	横田 浩	FW	里見 清行
HB	舞山 日良	FB	大川 哲	HB	瀬戸 氷祐
HB	船倉 直樹	HB	金子 賢	FB	高木 浩司
	佐藤 丈二	FW	長谷川 研二郎	HB	田中 仁志
FW	橋本 良	HB	竹沢 克衛	HB	豊田 雅彦
FW	椿 哲也	FW	土屋 至孝	FB	鈴木 正
FW	横山 諭	HB	森 隆一郎	FB	橋本 康司
FW	斎藤 均	FB	安達 均	マネージャー	森田 葉子 (旧姓 曾田)
FW	城風 智行	FB	木村 理貴		
FW	東出 信太朗	FW	森下 祐至		
FW	深沢 道裕	FB	小松 良輔		
FW	篠原 宏	FW	岩城 祐二		
	伴 英明	FW	渡辺 秀志		
	佐藤 明久	GK	太田 明		
	牛島 雅彦	HB	村井 元		
		HB	楠瀬 輝一		
		FB	越智 和志		
		FW	漆原 明一		
			梅原 健一		

各期のメンバー

12期 55年度		11期 54年度		10期 53年度	
ポジション	氏名	ポジション	氏名	ポジション	氏名
CH	瓜田直樹	FW	大場賢治	FW	本間真一郎
CB	山田光裕	FW	増山高弘	FB	村上祐也
RW	大滝友男	HB	永田俊策	HB	安沢裕之
ST	石井洋平	HB	岡本享	FB	目形康
RH	今仲浩康	FB	藤純司	FB	熊本卓也
LH	上野貴生	FB	高崎進	HB	戸田和彦
CF	桑山法久	GK	山口光晴	FB	西尾健
GK	佐藤靖英	HB	末山靖	HB	渡井哲
FB	青木元	HB	高橋利明	GK	落合尚人
FW	馬瀬智行	HB	金田健一	HB	松原茂徳
FB	江川有明	HB	西村繁	HB	田島泰彦
HB	大武一伯	FB	藤本和敏	FW	三宅元
FB	古賀達也	FW	宮本圭介	HB	木下忠幸
HB	篠原要	FW	金子博樹	HB	本宿冬郎
FB	南雲啓一		行司秀俊	FW	丹治一功
FW	前島輝			FB	小須田雅
HB	牧野健人	引越等で退会	三木俊二		
HB	村上治雄		秋本研一		
HB	山崎洋一				
GK	鎌田聡明				
引越等で退会	村上晋也				
	岩村知広				
	出沢達哉				

各期のメンバー

9期 52年度		8期 51年度		7期 50年度	
ポジション	氏名	ポジション	氏名	ポジション	氏名
HB	池沢潤	FW	黒岩典正	HB	鈴木一浩
FW	林陽介	GK	杉山信次郎	FW・GK	大森享
FW	早川裕樹	FB・GK	佐野祐一	FW	瓜田和彦
FB	大島宏樹	FB	友藤信英	FW	岩城一夫
HB	木下牧	FW	滝山佳男	FB	笠松吉雄
HB	鳥海秀之	FB	砂子泰彦	HB	大森亘
GK	堀江浩	HB	木下圭	GK	田辺誉
FW	三木健司	FB	田辺博之	FW	石本広之
FB	村上滋春	FW	安沢芳生	HB	坂村武
FW	軽部浩一	FW	篠原力	HB	山中さだのり
FW	増山祐一	FW	堀尾哲司		斎藤理
FB	井手裕二	HB	舞山春輝		久保寺一仁
HB	石川淳之	FW	落合佳人		太田秀一
FW	玉手弘章		高橋篤男		村井進
HB	佐藤隆造	FW	関根圭介		佐藤稔
HB	内田茂三	FB	藤英明		川口秀之
引越等で退会	小林透	引越等で退会	池上努		荻原利明
	林史朗		豊原義行		山口勇司
	岡本哲知		芹田弘		
	渋谷淳一		中丸清		
	白石智		鈴木一也		
			下村学昭		
			川森隆弘		

各期のメンバー

18期 61年度		17期 60年度		16期 59年度	
ポジション	氏名	ポジション	氏名	ポジション	氏名
GK	遠藤 誠	DF	前島 睦	MF	配野 治
DF	安土 雄一郎	MF	土谷 悟	FW	内田 昇
DF	福谷 和彦	FW	関谷 明大	DF	樺沢 健二
MF	越前 恒雄	DF	南間 利之	MF	田中 剛
DF	芳賀 優樹	FW	大野 樹里	FW	野里 拓也
FW	伊藤 謙三	DF	小栗 周一	DF	篠原 雄太
MF	草野 光雄	MF	田辺 義昭	FW	河本 利弘
FW	室伏 勢	FW	丸山 大助	MF	笠原 宣宏
MF	吉村 正輝	MF	大島 健	DF	仁平 圭
MF	山岸 治	FW	三宅 弘幸	MF	塚本 茂樹
FW	安土 健太郎	MF	難波 浩二	GK	室伏 太地
FW	相原 且登	MF	西口 剛史	DF	篠原 晃
DF	箕輪 吉利大	DF		FW	白鶴 清治
DF	関 貴士			DF	横川 英明
MF	冢次 崇太			MF	森木 龍也
FW	近藤 大輔			MF	有村 昌雄
DF	伊藤 文彦			FW	桑山 真史
MF	阪本 学			MF	山室 淳史
引越等で 退会	波多野 公士			MF	永長 勝行
	酒井 寿和			GK	斉藤 登
	浅井 庸介			MF	増田 克彦
				DF	佐藤 礼和
				FW	辛 燭碩
				MF	中鉢 要介
				DF	新井 弘展
				DF	新山 武志
				MF	久保寺 徹
				MF	国房 太郎
				MF	大西 文夫

各期のメンバー

15期 58年度		14期 57年度		13期 56年度	
ポジション	氏名	ポジション	氏名	ポジション	氏名
MF	田辺 実	HB	吉村 幸大	FW	鈴木 孝春
FW	伊藤 淳平	FW	山本 和人	GK	渡井 巧
DF	中林 真人	HB	田村 誠	FB	滝野 文範
DF	波多野 暁宏	GK	平方 雅之	FB	藤 裕治
FW	辛 燭日	FB	杏 敏男	HB	中野 純
MF	鈴木 信二郎	FB	松本 哲也	FB	江浜 克明
FW	佐藤 勇	CB	川合 康弘	HB	安田 知司
DF	守口 貴広	FW	中林 明彦	HB	丸山 智治
GK	山本 亮	HB	谷嶋 輝樹	HB	若森 彰
FW	河本 充弘	FW	佐世 真一	FW	絹村 誠
GK・MF	大村 慎二	FW	谷山 一也	FW	塘 泰三
MF	小笠原 直広	FB	神田 信幸	FB	岩城 俊彦
DF	草野 真裕	HB	落合 明人	FB	森部 達彦
FW	白岩 俊明	FW	桑山 和也	FB	麩谷 毅
	稲田 和彦	FW	石川 和夫	HB	小笠原 直樹
DF	望月 基	GK・HB	山田 功	HB	横川 英俊
		FB	福田 一	HB	笹谷 次郎
		FB	柏瀬 秀一	FW	今野 英一
		FB	村山 精一	GK	富吉 龍玄
		HB	横山 大輔	HB	阿部 靖
		FB・GK	馬瀬 直人	HB	今井 英智
		HB	藤田 宏	GK	高倉 泰介
		HB	西ヶ谷 聡享	HB	池田 新吾
		HB	田畑 裕三	FB	松井 茂稔
			渡部 貴	FW	三宅 稔
		引越等で 退会	平山 昌和		
			長塚 真也		
			配野 学		
			野里 洋介		

各期のメンバー

期 年度		20 期 63 年度		19 期 62 年度	
ポジション	氏 名	ポジション	氏 名	ポジション	氏 名
		GK	秋 元 洋 平	FW	田 辺 貴 之
		DF	佐々木 弘 一	MF	海 野 貴 男
		DF	青 木 健 二	MF	小 田 俊 直
		DF	城 宏 隆	DF	山 口 昌 平
		MF	薄 木 雄	DF	出 口 浩 一 郎
		FW	斉 藤 将 人	FW	十 河 康
		MF	今 井 洋 一	DF	横 山 惣 一
		FW	猪 狩 浩 二	DF	岩 渕 寿 洋
		MF	辻 真 弘	MF	田 中 誠
		MF	田 島 直 宗	MF	近 藤 宏 樹
		FW	梅 林 健 次	DF	高 木 辰 有
		DF	加 藤 靖	MF	葛 木 浩 一
		DF	中 村 弘 史	FW	児 島 健 一
		MF	勝 田 尚 義	MF	田 端 淳 記
		DF	野 崎 秀 和	FW	那 須 隆 行
		MF	工 藤 崇 広	FW	岸 健 司
		MF	大 輪 光 広	FW	松 久 友 隆
		FW	藤 本 武 志	DF	窪 田 寛
		DF	遠 藤 豊	DF	小 泉 裕 希
		MF	南 間 貴 之	GK	久保田 宏
		FW	村 松 孝 広	DF	佐々木 大 輔
		FW	鹿子島 光 康		
		DF	本 山 龍 祐		
		DF	小 松 正 博		
		FW	大 野 智 有		
		DF	丸 島 大 輔		
		退 会	和 気 正 紀		
			松 山 英 一 郎		
			岡 田 比 呂 樹		
			世 良 貴 久		

子達にささげる

緑の中

キラキラした太陽

ボールキック

風さわやかに

青空に舞う

走る、跳ぶ、守る

体と体ぶつけあい

何のために

ボールは知っている

自分のためか

強いかわいさ

自信があるかないか

キラキラした目

カガヤク顔

ある夏の

キチット結んだ口元

この一瞬が

この青春

今過ぎようとしている

子達よ

はばたけ未来へ

(配野睦夫)



昭和62年度 卒業生の横顔

①ポジション ②入学学年 ③身長 ④体重
⑤生年月日、星座 ⑥血液型 ⑦自分のサッ
カーの特長 ⑧監督からの寸評

〔1〕遠月泰誠

①GK ②4年生 ③153cm ④45kg
⑤S50・2・10 みずかめ座 ⑥AB型
⑦高めのキャッチング ⑧上に絶対強いGK。
特に左へ飛んでボールをとる宇宙遊泳は名人
芸。ただし右下に落とし穴あり。

〔2〕安土 有一郎

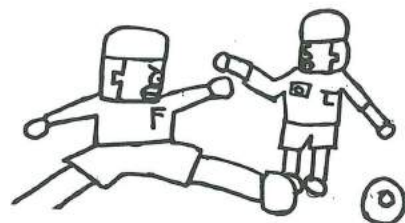
①左のバック ②2年 ③154cm ④4
4、5kg ⑤S49・6・16 ふたご座
⑥A型 ⑦カット ⑧手の振りは女性的だが
走るスピードは抜群。長いリーチでボールを
カットするプレーは頼もしい。オーバーラッ
プして上がるのも早いし、スローインもうま
い。背中をもっとかっこよく伸ばすこと。

〔3〕福谷和彦

①DF ②1年生 ③160cm ④52kg
⑤S49・5・24 ふたご座 ⑥O型
⑦タックル、ロングシュート ⑧冷静な“読
み”を買われてGKからコンバート。守りの
カナメ。ヘディングのクリアも効果的。中
盤からの殺人シュートは、入っても人らなく
ても、敵、味方からオーッと声が出る。左を
攻められたとき、ぎこちない。

〔4〕越前恒男

①左ハーフ ②2年生 ③150cm ④3
5kg ⑤S50・2・20 魚座 ⑥B型
⑦フェイント、センターリング ⑧5年のと
きに、てっていしてやったドリブルが独自の
サッカーを作った。キープ力抜群、状況判断
も良く、GKをやっても勘のいい動きが光る。
ねばり強さがほしい。



〔5〕芳賀優樹

①DF ②2年生 ③148cm ④34kg
⑤S50・1・4 おうし座 ⑥A型
⑦オーバーラップ（スピード）⑧なわとびの
名人。全身これバネ。すぐトップギアに入る
足も一級品。DF、MF、FWどこでもやれ
るオールラウンドプレーヤー。集中力が持続す
れば、もっと試合が見えるはず。

〔7〕伊藤泰謙三

①左ウイング ②1年生 ③152、5cm
④41kg ⑤S49・11・19 さそり座
⑥O型 ⑦左足でのプレー ⑧走る歩幅
が大きい。重心が低く競り合いに強い。黄
金の左足シュートは得点の確立が高い。状況
に応じて細かいステップが踏めるようになれ
ばプレーの幅が広がる。

〔8〕草里子光雄

①センターハーフ ②2年生 ③153cm
④37kg ⑤S49・7・9 かに座 ⑥
B型 ⑦ヘディングシュート ⑧前にGK
をやった経験が生きている。状況判断が良く、
ボールタッチが柔らかく、フェイントに意外
性がある。たちばなの伝統をついだ人。スピ
ードとたくましさほしい！

〔9〕室伏勢

①センターフォワード ②1年生 ③150
cm ④50kg ⑤S49・11・7 さ
そり座 ⑥O型 ⑦ドリブルで抜く事 ⑧ゲ
ーム勘の良さは大人なみ。からだでブロック
しながらボールをキープする特技もいいが、
彼のハイライトは、逆襲からの独走シュート。
オフサイドぎりぎり審判をあわてさせる。
決定的な場面ではずすのも特技？

〔10〕吉村正輝

①センターフォワード ②1年生 ③153
cm ④43kg ⑤S49・7・20 か
に座 ⑥O型 ⑦右45度のシュート コー
ナーキック ⑧ゴールの「狩人」。相手DF
のミスは絶対見逃さない。ねらったところへ
打つ気迫がすばらしい。腰の高い欠点と、時
々ばやく「むら気」が直れば大物。

〔18〕山岸治

①センターハーフ ②2年生 ③164cm
④53kg ⑤S49・7・22 かに座
⑥A型 ⑦カット、クリア ⑧キャプテンで
攻守の要。今一段の積極性が加われば満点。

〔19〕安土健太郎

①右ハーフ ②2年生 ③154cm ④4
3kg ⑤S49・6・16 ふたご座
⑥A型 ⑦タックル ⑧技術とセンスはトップ
レベル、体調の維持が課題。

〔21〕木目真良登

①右のウイング ②2年生 ③142cm
④34、5kg ⑤S50・2・24 うお座
⑥A型 ⑦スライディング ⑧体は小さいが
常に正面から当たるファイター。

〔22〕笠車命吉利大

①バック ②3年生 ③164cm ④65
kg ⑤S49・8・19 しし座 ⑥O型
⑦プレスキック、カット、タックル ⑧足の
速さとキック力はNo1。特にセットプレー
のキックは抜群。

〔24〕家次崇太

①右ハーフ ②4年生 ③160cm ④4
5、2kg ⑤S49・12・31 やき座
⑥？ ⑦スローイン、ファイトマン ⑧絶好
調時はファインプレー続出、集中力持続が課題。

〔25〕黒川貴士

①右バック ②5年生 ③149、5cm
④43kg ⑤S50・2・21 魚座 ⑥
O型 ⑦スローイン ⑧堅実な守備要員、常
に全力投球する努力家。

〔27〕近月泰大輔

①CF ②5年生 ③144cm ④35kg
⑤S49・12・10 いと座 ⑥AB
型 ⑦ドリブル ⑧チームNo1の点取り屋、
より強引さが加われば得点倍増。

〔28〕伊藤泰文彦

①バック ②5年生 ③162cm ④44
kg ⑤S49・7・22 かに座 ⑥A型
⑦スライディングタックル ⑧キーパーもこ
なす万能選手、地味ながら貢献度抜群。

〔30〕阪本学

①FW ②5年生 ③150cm ④40kg
⑤S49・9・30 てんびん座 ⑥O
型 ⑦センターリング ⑧チーム唯一の左利
きでLW/LHでアシストに徹底、シュート
力向上が課題。



昭和63年度 卒業生寸評

曾田監督と南間コーチに卒業生ひとりひとりの寸評をお願いしました。

〔2〕 横山 DF

ハードな守りが売りもの。気合が入るとどんなFWも自由にやらせない。声もよく出る。下半身も上もがっしり、(あれでゼンソクがあるとはほんと?) ヘッドの崩れ合いのタイミングを覚えれば鬼に金棒。

〔3〕 山口 DF

DFとして最高に試合が見えていて落ち着いてプレー出来る。時にはきびしいマークもやった。しかし思わぬ病気で半年間を棒にふってしまった。これも貴重な経験、将来に生かそう。

〔4〕 田中 DF

たちばなNO1のファイトマン。あの密着マークと出足のいいガッツプレーは、相手FWに最も嫌がられた!?あのプレーを後輩に伝えてほしい。キックが正確になればもっといいのだが。

〔5〕 岩淵 DF

相手FWを得意のスピードで追い、前へ出て勝負する時は最高に頼もしい。ヘディングも強い。何か何でも点を入れてやろうという積極性があれば、MFかFWをやらせてみたかった!

〔6〕 近藤 MF

からだは小さいが、前向きでボールに集中している時のプレーには迫力があり、得点力もある。活動量も多く、スタミナもある。時々ま気合の抜けた時は別の人になる。いつもねばり強くファイト満々でいこう!



〔7〕 出口 FW

状況判断の早さ、走る早さ、プレーの早さ——3つのスピード(3S)の代表者。特に6年の後半からますますスピードが出てきた。そのためスイーパーとしても重宝された。キックの正確さがほしい。それと姿勢!

〔8〕 小田 MF

小田といえば、馬力とゴール前の執念! 画千金のゴールを決めたときのガッツポーズ! もうひとつ柔らかいフェイントが出てくれば申し分ないのだが。

〔9〕 海野 MF

全身これ運動神経。たちばなのマラドーナ。しかし彼の本領は「負けず嫌いな魂」にある。ところがゴール前ではやさしくて、決定的なシュートをよく外す。最後まで「魂」を放すな!

〔10〕 田辺 FW

スポーツ勘、身体の柔らかさ、下半身のリーチなどスポーツ選手の卵として好素材。このところ結果をあせり過ぎてプレーが固くなりがち。先ずは相手のウラをとる楽しさを追求せよ!

〔11〕 十河 FW

今の子には珍しくヒザが柔軟、背中も真っ直ぐでバランスがすばらしい。今後、対敵動作、フェイントテクニックが、ますます多彩になる筈。早く大きくなあれ!

〔19〕 高木 DF

センターバックとして、またチームのキャプテンとしてこの1年、彼の役割は非常に大きかったと思う。皆から「辰ちゃん」と慕われ、試合では気迫のこもったプレーでチームを引っ張ってくれました。

〔20〕 荻木 DF

右サイドバックでチーム1の頑張り屋。どんな相手でも、持ち前の粘り強さで相手がいやけをさすまで離れず、最後にはボールを奪い取ってくれた。時にはゴールキーパーとして活躍してくれました。

〔21〕 児島 FW

センターフォワード。ある強力なチームとの交流試合で、相手のペナルティエリア少し前でのフリーキックを得た時、彼は相手のわずかにもたついたスキをついて、すばやくボールを置きシュート。その一点で試合に勝った。

〔22〕 田端 MF

ポジションを右ハーフとしているが、右ウイングの方が合っていたようで、思いきりのよいシュートを打つが、ハーフだといふボールを出すことに気を使っていたようだ。それだけ友達に対する思いやりがあるからでしょう。

〔23〕 羽生 FW

右ウイング。チーム1のパワーでロングキックを見せてくれた。試合では守りから一転逆襲するのに頼れるのがロングキックで、チームを勢いづかせてくれ、また何度も絶妙なコーナーキックを見せてくれた。

〔24〕 岸 FW

左ウイング。彼のアシストによる得点が最も多かった気がする。特技といえるボール扱いのうまさで相手を振り切りセンターリングし、チャンスと見ればシュートを打つその読みは鋭い。

〔25〕 松久 FW

センターフォワード。とにかく惜めない。ゲームで失敗しても、私かいう前に明るい顔で「スママセン」と言われると、何も言えなく苦笑するだけになってしまう。それから努力家で、ヘディングシュートは努力の結果だと思う。

〔26〕 窪田 DF

右サイドバック。チーム1の元気で、せり合いで倒されても平気な顔をして起き上がり再び相手にぶつかってゆく。それでいてケガをしたことがない。子供らしいヤンチャなところが、皆の人気者。

〔28〕 小泉 DF

左サイドバック。堅い守りが身上で、ボールを恐れず、そしてどんな大きい相手も恐れない。それがせり合いの強さになり、見ている者に気迫が伝わってくる。ヘディングによるクリアーを得意にしている。

〔29〕 久保田 GK

普段はおとなしいが、試合になるとよく声を出し、ハッスルプレーを見せてくれ、「よく頑張った!」とほめると「僕も初めてだよ!」などとおもしろいことを言ってチームを明るくしてくれた。

〔30〕 佐々木 MF

左ハーフ。相手のフェイントに掛からないのが特徴で、相手の身体の動きに惑わされず、しっかりボールだけ見据えているからのようで、彼が試合に出るたびに考え、身につけたものでしょう。

32

カト藤

今年は優勝した
 優勝した。青木
 31
 今年は優勝した
 優勝した。青木
 31
 今年は優勝した
 優勝した。青木
 31



今年は優勝した
 優勝した。青木
 31

今年は優勝した
 優勝した。青木
 31

5-1

33.

今年は優勝した
 優勝した。青木
 31

23
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100

創立二十周年記念行事資金調達バザー報告（たちばなニュース 四十一号より）

来年のたばなキッカーズ二十周年のためのバザーが、九月二十日（日）に公団集会所前の広場でひらかれた。手伝いのお父さんたちの集合は、朝の六時半、販売する品物の分類陳列、屋台の組み立て、調理器具の準備などがはじめられた。天気も曇ながら幸い雨の心配はなさそうだ。出店した屋台は、ヤキソバ、ヤキトリ、ミソコンニャク、フランクフルト、かき氷、綿あめ、ジュース、赤飯、生ビール、ケーキ＆コーヒーという豪華版。八時頃から調理を始めて十時から開店。始めは物品の屋台にお客が集中、なにしろ何でも安い。物も飛ぶように売れて行く。次第に屋台にも人が寄ってきてヤキトリ、ヤキソバ、フランクフルト、生ビールが盛況になってくる。お昼になるとキッカーズの子供たちが練習からあがってきて俄然賑やかになる。寒そうだからやめようかといっていた「かき氷」にも子供たちの列ができてつくる方が大汗。ヤキトリも何度も材料を追加してついに七〇〇本を売りつくす。四時までの予定であったが二時頃にはほとんどの物がなくなってしまう、残った品物を子供たちが持ちまわって大安売り、二時半には大半の屋台で手締めをしてあがりとなった。



皆さんのご協力によりバザーは大成成功におわり、総売り上げは八六三、六九八円（内訳・物品四四四、四九八円、屋台四一九、二〇〇円）となった。経費（備品、材料）二七四、九五九円を差し引いて純利益は五八八、七三九円であった。これはひとえに、町内会会長及び役員の方々と、場所を提供して下さった公団の皆様をはじめ、たちばなキッカーズOB、現役のお父さんお母さん方のご協力のたまものと思います。この紙面を借りて、皆様に厚くお礼申し上げます。ありがとうございます。



△ 物品販売に人の波



屋台も本格的 ▶

編集後記

先日、サッカー協会の堀内氏から、十五周年記念誌に続き、これだけのものができるのは、現役とOBのチームワークの良い方々さんの強みだとお褒めを受けました。原稿の収集から校正まで多数の方の奉仕で出来上がったのですから、これはたばなの宝物です。

二十周年の大きな節目に、今回は、「少年サッカーの在り方」にこだわりました。超多忙の中書きいただいた松本氏、岡村氏、越後氏の御指摘、突然のアンケートにお答えいただいた九チームの代表者の御意見、すべて無駄にせず、今後に活かします。

横浜協会幹部をお招きした座談会も有益な話が続出し、後で速記録を読みながら改めてヒザを叩きました。ただ、頁数に制約があって、全部を掲載できなかったのがまことに残念です。

(曾田)

二十周年記念誌を編集するにあたり、数多くの方々から様々のご協力をいただきました。特に、ご多用中にも拘わらず真心のこもった寄稿を賜わり、また、座談会に快く御出席下さったことに心より厚くお礼申し上げます。

特集「これからの少年サッカーの在り方」では、諸先生、協会役員、各チーム監督の方々より貴重なご意見をお寄せいただき感謝しております。ただ、編集者が不慣れなため十分なまとめができていない点もあると思います。不備な点がありましたら、ご啓示下されば幸いです。

また、編集の都合上、皆様からお寄せいただきました玉稿の題名・用字・用語について一部加筆、修正させていただきましたが、何卒ご容赦下さるよう

うお願い申し上げます。

編集にたずさわり感じたことは「のびのびサッカーをやった」という子ども等が実に多いのにびっくりしました。二十年間続けてきた方針が間違いなく子ども等に受け入れられ、脈々と続いているなあ—と思いました。

記念誌製作に当り、千代田印刷株式会社平井社長、島田取締役はじめ担当の北鬼江女史、そして、お口添えして下さった篠原つばめ代表堀内氏にはひとかたならぬお世話になり、この紙面をおかりして厚くお礼申し上げます。

たばなキッカーズ創立二十周年記念行事準備委員会組織を組むに当り、諸先輩父母の皆様も入っていただくようなご意見も出ましたが、十周年、十五周年とやっていただいて、ご苦勞をおかけしていることに鑑み、今回の記念組織運営を若手父母中心にさせていただきましたことを申しそえます。

さて、記念誌編集に際し、編集員の皆様をはじめ、それ以外の方々も多数応援下さり、たばな関係者の会員参加のもとによりやく完成したものだと思っております。ほんとうにありがとうございます。感謝しております。

記念誌は、皆様の手元におかれ、末長くご愛読下されば幸いです。

(配野)

たばなキッカーズ創立二十周年記念誌

発行	たばなキッカーズ
編集	創立二十周年記念行事委員会
印刷所	二十周年記念誌編集委員会
発行日	千代田印刷株式会社
	昭和六十三年九月一日

